合でも原子論的である。近代科學は全體の形態、形式の理念を個々の部分から先づ組み立てて置きながら、かうした全體の形態、形式の理念を、これ等の部分に於ける直接の促動力と見做すといふ事は自然科學に緣のないことである。――少くとも最近代の諸學說までの處では、自然科學に關係の遠いものであつた。けれども、ゲーテにとつては、生成の「法則」とはばらばらな諸部に內在する性質や力やそれ等のものの單純な關係を現はす公式ではない。生成の法則は實際の力として――或は實際上の力に類似のものとして――諸部分を自らの(全形態の)實現に驅り立てるその全形態のうちに存する。從つて原理的には諸種の障害、弱點、交錯が此の法則を完全にその動力發輝に至らしめない事もあり得るのは明白である。そこから植物界に關する次のやうな思想が考へられる。「此の領域では自然は極めて高い自由を以て活動しつゝも、而もその根本法則から遠ざかる事がない」といふ考へがこれである。「根本法則」とそれをめぐる自由の活動圈は精密科學には緣のない考へ方である。自然法則はどこまでも自然法則である。そして一般的に現實的ないづれの形態も、よし如何に非類型的で、吾々の驚異であつても、最も正規の現象に於て實證さるゝ法則と全く同一階位にある法則に從つて生み出されたのである。唯、法則が一定の、而も類型的形態を獲んともがくエネルギーを表はす公式である場合にのみ、此の法則の中心向性が、多少は左右にずれて、他の動機と交錯せる薄弱な偏倚せる現象となり終る事があり得る。ゲーテは言ふ、或る種の花、例へば Zentifolie（一種の薔薇）にあつては、「自然は自身の爲めに設定した限界を越えてゐる。」勿論自然は時としては限界を越える事に由つて、「或る他の完全に達する」が、時としては又單に畸形に變種する――併し嚴密に觀察すれば、かかる一定の形式を表はすかくの如き「限界」は存在せずして、此の限界といふのは、常に、基本的な力の作用の偶然な（嚴格に言つて）結果に過ぎない。已に暗示した樣に、一般世界構成に對するゲーテの此の態度は諸有機體の省察に依つて決定されてゐるのは明かである。何故ならば、有機體に於てのみ部分の力と力の方向が全體の形式に依つて決定される樣に見え、又此の形式は、いづれの個々の場合にも、或る「類型」に關係を持つ樣に見えるからである。――此の類型とは、省察する主觀に依つて、あとから獲られた平均であるのみならず、客觀的に妥當な規範である。從つて、正常なものと異常なもの、純粹な場合と、純例外的畸形とは、事實上の意味をも持つので、單に思惟上の意味ばかりではない。ゲーテは世界を有機的に理解し、有機體の上述の性質を世界のいづれの點に於ても感得したから、有機的な生成は、部分に內在する全體の形式法則に依つて決定される樣に彼には思はれた。此の形式法則の中軸は種の類型で、此の中軸の周圍に、個々の現象が、差違の多少を以て振動する。玆にゲーテの自然觀の古典主義に對する深い關係が示される。古代の精神性は、それがゲーテに與へた印

象の限りでは、存在の凡ゆる部分の本質を、立體的に形式を明確にした一般概念に見てゐる。希臘の藝術は類型を目標とし、個々の構成はその類型をめぐつて、或る程度の活動圏を以て動き、その完成の程度は類型の純粋性にありと考へる。丁度それと同じく、事物は色々の部門に屬するやうに思はれた。そしてその部門は一々の事物の典型を形成した。而して各事物は、それぞれ自己の屬する類型を提示することによつてそれ自身なのである。――此の事を各事物がなし得た程度は、屢或は常に不完全と不純粋に於てのみである。自然物の「法則」といふゲーテの思想に於ては、形態が法則であるが故に、形態と法則の二つの要素が合致する。形態とはすべての要素のうちに内在する、一切の生成を説明する動因である。これは有機的世界概念に適合する――而して形態は類型の實現である。蓋し此の類型は全然此の形態を自己内から釋放する事がないにしても、此の形型は無際限の變化、肥大、痩削を以て類型から隔る事はあり得るのである。法則とは「現象に於てはその例外のみを見るに過ぎないもの」の謂である。

斯くして、ゲーテの根本原理と一致しないやうに見えるかの二元論的表現が説明された樣に思ふ。かかる表現は、老齢になるに從つて。神的なものと現實的なものとの杆格、理念と經驗との杆格を益〻鋭く示してゐる。――それは多分、古典の理想が多少その絶對性から引きさがつた故であらう。その結果、彼は伊太利旅行後二十八年にして、希臘の特性は、かの「偉大な悟性」、即ち鋭い實在感覺を具へてゐるローマの特性程に彼の心を牽かないと宣言してゐる。彼は伊太利で彼の本質と世界觀照との統一性を獲たが、かくの如き統一性は遙かに立證的であり、遙かに原則的で、實證的に獲得されたものとして彼の青年期の素朴な統一性からは區別されるが、それと全く同樣に、晩年に見られる此の理念と實在との分離は、伊太利旅行のすぐ前に見られ、謂はば單純に經驗的運命的なかの分離とは區別される。これ等の立脚點は、年月を顧みない事實だけの意味、或は精神史的な意味では明瞭であるが、純粋にゲーテの傳記から見るといふ意味では極めて錯雜紛糾してゐる。それは、彼の生涯のいづれの時代でも、その中心傾向は、全く明瞭に、かの諸立脚點のいづれか一つによつてその特性を示されてはゐるが、他の立脚點も依然としてその前後に響きを殘してゐるからである。瞬間經驗、或は氣分などのニュアンスをもすぐに大びらで一般化した形式で表現するといふのがゲーテの心的特性である。彼はかうして起る矛盾には氣づいては居るが、而も全く平氣でゐるのは色々の言葉の示す處である。蓋し、種々の方面に亙つて姿を現す統一的生活の振子動が此の矛盾に於てのみ現れてゐる事を彼は知つてゐたのである。

扨て、彼の原理上統一せる世界相の諸要素が晩年に於て相離れたが、ゲーテが如何なる方法によつ

てこれを處理したかを跡づける事は極めて注意に値する。此の場合さしあたつて重要なのは、「象徴的場合」の概念である。彼は一七九七年の決定的宣言のうちで、次に述べる思想から出發する。即ち、「理想的なものを日常的なものと直接に結合する事は」困難い。併し彼に特に深い印象を與へる個々の現象が存在する。（個々の現象そのものとしては「日常的なもの」の領域に屬するが、）それ等が多くの他の現象を代表する事は彼の確證した處である。これ等の現象は他の凡ての現象に對して象徴的であることによつて、「自體のうちに一種の總體」を包括するといふ思想である。茲で重要なのは、次のことである。即ち、個々の構成が、理念を啓示するのは、もはやその直接的な孤立的存在に於てではなくして（此のことは實際不可能である、）却つて媒介を通してである事、此の個々の構成は、理念の現象領域を構成するあらゆる場合の全體を自己のうちに包攝してゐるといふ事である。これに基いて彼は此の「象徴的な」「顕著な」「重要な」場合の範疇に就いて次の如く言ふ。此の範疇は、「自分の性質と直接經驗との間に横る矛盾を忽ち除去してくれる。此の矛盾は以前には決して解決し得なかつたものである。」此の時分から彼は斷乎として「一の場合が凡百の場合に値する」事を特に強調固執する。それと共に彼には、人類の最も普遍的にして、最も深い問題の一つ、即ち有限の平面内に無限なるものを見出すと云ふ問題の解決公式が提示された。超世界と世界、理念と經驗、絶對と相對、普遍と特殊。これ等のものの間には、世界觀の諸問題が生起する。たとひそれ等の問題の解決が、對立する一方の完全な否定に於て見られても。そこで下の如きは問題解決の一方の大きな典型である。即ち、初めから一方の極にのみ局在せしめられた一切の價値と意義とが、その内容と意味とを完全に保留したまゝ他方の極に於て發見されるといふ事、有限なもの、實際世間的なもの、個別的なものを或る程度擴大强調することが、絶對、超實在、理念の座たるべくこれまで考へられたすべてを有効に代理するといふのである。象徴的場合に關する言葉の少ないゲーテの表現は、彼が如何に、兩極間の彼に意識された罅隙を、此の世界歴史的動機の方向に於て融和せんと試みたかを示してゐる。何となれば、現實的なものは一つの構造を持つて居るやうに彼には思はれるからである。その構造といふのは、その個々の部分に全體の代理者たるの資格を與へ、從つて此の個々の部分をその個在性に局限せしめない。それ故に、此の個々の部分は、その意味からすれば、やはり有限なるもの、實在的なるもの、經驗的なるものの而内に止つてゐるけれども、此の個々の部分の有する意味が無限に多數の個々體の意味を代理し得ることによつて、個々に經驗し得べきあらゆる事象の偶然性、相對性、個體的不充分性などが此の個々部分中で稀薄になる。經驗的には絶對普遍妥當的なるものは同時に、超經驗的なもの、即ち理念や絶對の妥當的相似像である。そして直觀的現實的な個々物が、かの一般妥當性

を具體化し得るならば、それと共に、此の兩世界の疎隔關係が融和せられる。現實は理念に對して絶望的な、全く孤立した斷片に分裂せずして、總體、意味及び以前には超現實的なものにのみ存在してゐた樣に思はれた法則は、これ等斷片の或る個々體の形式をかりて提示されるに到るのである。それに依つて「理想的なるものは日常的なるものと」間接に結合される。但し直接の結合は不可能である。此の事こそゲーテをして經驗論者たるを要せずして、實在論者たるを可能にした所以である。

ゲーテは、特殊的主觀的な方面から、或る他の概念に依つて、かの存在の分裂を融和せんと試みてゐる。此の概念は已に前章に於てその充分な內容を示したが、これは宇宙の秩序が人間に賦與した「中間狀態」なる概念である。彼は言ふ、「人間は中間狀態に置かれてゐる。從つて人間には、中間的なものを認識する事のみ許されてゐる。」それと關聯してゐることは、「人は理念を決して窮地に追ひ込む事が出來ない。」卽ち換言すれば、絶對的なもの、理念的なものはそれ自體、經驗の形式、個々の現實的なるものの形式に移されず、個々の現實的なるものから讀み取り得ない。併し人間は兩者の中間に在る、と云つても兩世界の市民、或は兩世界からの合成體としてゞはなく、獨自の統一的地位を占めてゐる。彼は此の地位に於て宇宙的總體の相似像である（同時にこれに屬してゐる）、卽ち小宇宙である。此の小宇宙はその精神性に於てかの總體の意味をくりかへす。從つて全體の個々の部分のいづれにも屬しない。卽ち、理念にも屬せず、又經驗的實在的事象にも全く屬し得ないものである。

ゲーテは一八一七年頃に「科學研究の道程に於ては、全然經驗に服從するのも、絶對に理念に服從するのも均しく有害である」と言ひ、それから數年後には、「探求すべからざるものから全く離れることも、又探求すべからざるものと緊密に結びつくことを敢てすることも均しく有害であらう」と言つてゐる。かうした表現或はこれに類した表現の否定的、禁止的形式の示してゐるのは兩分極性の混合が問題ではなくして、第三者、卽ち「人類の諸限界」間に於ける吾人の立場が問題である事である。世界と超世界との間に、卽ち純經驗と純理念との間に吾々は生活してゐる。その生活の獨立性、自己に集中する存在は、吾々を保護してかの兩極の對立間に分裂するとか、或はその對立內に徒らに振動する事をなからしめる。藝術家は「自然と競うてはならぬ。」彼は個々の現實を模寫する事も、直觀すべからざる理念に沒頭する事も不可で、「藝術家として自己を完成」すべきものである。丁度それと同じく人間はひたすら「人間として自己を完成する事」に努力すべきである。予の信ずる處では、玆に、彼の晩年の最も深く大膽な根本概念の一つが現れてゐる。かかる根本概念に關してはゲーテは謂はば折に觸れてのみ斷片的暗示を洩したに過ぎない。理念と經驗、神的なものと個々的現實との二元論は今やゲーテの不斷の問題である。而して此の問題の人間學的解答は、人間を兩部分から組織する

ことではない。或は單に兩域の交叉點に人間を定住せしめることでもない。此の問題の解答は人間に一つの位置を指定することである。此の位置は或る程度迄兩者の中間に位し、此の兩者から同距離の中間を占めるものであるけれども、而も人類的獨自な地位であり、人類的に統一的な地位である――此の地位はかの對立を客觀的には融合はしないが、此の對立とその二元的結果から吾々の宇宙的位置を救うものである。人間はかくの如く獨立的な「創造理念」として、謂はばこれ以上に起源を究め得ない。「創造理念」として、かの存在の兩極に對立することによつて初めて、――此のことは予が前に暗示した――自己を此の全存在の同位者として知ることが出來、此の全存在を總體として動かす法則に、單獨に自體内に於て從ひ得るのである。――そして勿論、かの葛藤の彼岸に於て、吾々の本性の獨立に立脚しようとする主觀的人間學的方法は、茲から、人間の客觀的存立の上にも、人間の自己和解の豫感を走らせてゐる。即ち、彼の遺稿の一節にかうある、「吾々は最早、自然科學を取り扱ふに際して理念を經驗に對立させる場合に置かれてゐない。吾々は寧ろ理念を經驗の中に探し求めることに慣れてゐる。何故ならば、自然は理念に從つて振舞ふことを確信するからである。同樣に又人間は自己の始める一切事に於て理念を追及することを確信するからである。」「中心點」、茲に吾々が位置を占め、茲から諸現象の均齊距離の配備を得る。――此の中心點なる範疇的形式に依つて、吾々は、事物の渾沌を有機化する可能を獲得する。彼は曾て言ふ、吾々が自然界に見る凡ての個々體は常に他の多くのものを伴ひ、それと混融してゐる。いづれの點に於ても極めて多數のものが入り亂れて作用する結果、如何なる學說に對しても、原因と結果、病患と徵候とを識別するに大なる困難が起るのである。「故に此の場合、眞面目な觀察者に殘された唯一つの事は、何處かに中心點を設定すること、然る後に如何に他のものを圓周的に取り扱ふかを試みる事である。」　從つて吾々は此の世界に於て技術を以て身を處して行く、そして我々は世界の差別相を技術を以て認識の統一に綜合するが、かくの如き技術は、吾々人間の形而上的位置、即ち存在上の「中間狀態」の理論的放射として現れるのである。吾々は此の中間狀態に於ては、存在の諸對立面に、常に同一距離で相對してゐる。

精神的世界の分極に固定せしめられた諸對立の上に統一の企圖を貫かんとする第三の方法は恐らく前述の動機の一變容に過ぎない。「若し人が予に如何にせば最も善く理念と經驗とを結合し得るかと訊ねるならば、予は實踐による（praktisch）と答へる」――即ち、實踐に依るとは前進的、合目的的な探求に依るといふ意味である。ゲーテの晩年に於ては、到る所實踐的態度への指示に接する。此の實踐的態度とは精神的にして形而上的な矛盾が純精神的解答を全然許容しない樣に思はれる場合に、――一點から一點へと吾々を導く活動を意味する。此の言ひ廻しはファウストの最後の言葉と　遍歷

時代」の傾向全體を以て立派に表現されてゐる。此の事が如何なる力を有し、如何なる倫理的價値を有するにしても――先づ吾々の免れ難い印象は、眞に困難な、深刻な問題が上の言葉で單に回避されたに過ぎないかの感じである。此の問題を實踐の領域に轉置することは勿論可能であらう。何故といふに實踐の領域に於ては此の問題の解答が見出されるからである。それは、他の諸領域では、謂はば土壤の性質が、此の問題の展開を容さないのである。例へばカントであるが、理性と感性とは理論の領域ではどこまでも二元論を脱しないが、此の純粹理性と感性との間の大なる懸案をカントは實踐の領域にまで追求した。そして玆で此の懸案を統一はせぬまでも無理でない結論に引張つて行つた。併し、ゲーテはそのやうな意味で實踐を云謂したのではない。ゲーテが人間に指し示すものは行動そのものである。即ち、日日の實踐的な直接問題に即しての活動であつて、決して解き難い原理的な世界問題とか人生問題でもなければ、又問題の純思想的結論でもない。「遍歴時代」の終りにある亞米利加への移住は結局此の事を表す象徴に過ぎない。此の事は、已に述べた如く、精神の最後の要求の前に兜を脱いだもの、即ち心的エネルギーの素朴な實踐への復歸と考へられ得る。此の素朴な實踐から出發して、心的エネルギーの發展の道程は、その最深の層に於て實生活と和解すべき、かの欲求まで昇つたのであつた。直接的な「有用な」活動をせよといふ勸告の基く基礎は、何の爲めに役立つかといふ事のぼんやりした、檢討を經ざる數々の價値判斷である。何故なれば、活動目的の價値の爲めでなければ、何に據つて、活動が有用といふ正當な名目を贏ち得よう。而も活動目的の價値は活動その事に依つては到底證明し得ないのである。從つて單純な、形式的な手段である活動の價値は、常に目的の價値を必要とする。此の目的の價値は、直覺的に淺薄に定められるか、それとも一層深い理由を求めるかである。ゲーテが「日の要求」を吾々の實踐價値の徹底的說明と名附けるなら、當然問題にならねばならぬのは、少なからぬ强度を以て「日」が吾々に課する無數のつまらぬ要求と眞實な本質的な要求を區別する規準の如何である。而して此の標識は明かに「日」から引き出して來られず、又是認された要求も不法の要求も全く均等に實現さるゝ據り所たる活動の概念からも引き出し得ないのである。

日々の變化中に現れる手近の對象が恰度役に立つ所謂分化せざる活動の評價に對する上述の如き難點があるにも拘らず、此の活動はゲーテには第一に次の如き根柢の深い動機から出て來る樣である。ゲーテの多數の言葉が示す處に據ると、彼には、活動とは、生の內容でもなく、或は他人と伍して生の證明をなすことでもない。活動とはゲーテにとつては生そのものである。換言すれば、人間存在の特殊のエネルギーである。而して生はたゞ生自體に委ねられて充分である。換言すれば、活動は各

瞬間毎に手近の目標を目の前に持つて居り、此の手近な目標の中にはさしあたつて必要な一切のものが籠められて居るのである。つまり次の瞬間の前にはその瞬間の必要とするものが立つのである。此のやうな思想は、此の存在の自然の調和に就いてのゲーテの確信に基いてゐる。生に對するかくの如き深い信頼、卽ち又その刹那に進む目的性、――他の言葉で言へば、活動に對する深き信頼こそは日の要求が吾々の義務であるといふ事の眞の意義であるやうに思はれる。――此の活動の脈搏のうちにはその都度手近な活動の目標が下繪となつて描かれてゐるか、或は此の脈搏には一般存在關聯が直接にその目的を提示してゐる。――目標は、遠い處から一々の瞬間の當爲を定めるに及ばない。生は歩一歩發展する、そしてその價値規準を見當のつかぬ遠方にある目標から豫期することはしない（これはゲーテの基督敎に對する截然たる反對動機の一つであるが。）斯くして、生と同意義なる活動は、若し純粹に感得されるならば、その求むる內容を直接に自らの前に持つて居る。次にはどう歩むかを知ることは（客觀的には、日の要求）謂はば此の活動の本具の形式である。此の事は、力或は過程たる生が個々の內容に對して獲たる勝利に他ならぬのである。個々の內容は他の秩序から引き出して生に加へ得るであらう。蓋し、玆に問題となつてゐる生の時間的秩序に對しては他の秩序は無關係だからである。ゲーテがはつきりした內容も述べずに、最も單純なもの、最も手近のもの、その瞬間だけ正當な實踐、日の要求に向ふやうにと、吾々に勸めて居るが、――それは、實踐的價値は、生の泉の流れる方向に現出するものであつて、他の方向から此の方向に向つて來るのではないと云ふ事の象徵に過ぎない。卽ち、權能と價値とを持つた生の過程は、吾々が活動と名附ける一切のものに對してその活動の內容を與へるのに生の過程獨自の形式を用ゐる。換言すれば、瞬間から瞬間へと、進展的にして跳躍なき生產の形に於て行ふのであるが、上述のことは、かくの如き權能と價値とを持つた生の過程を表はす象徵に過ぎないのである。ゲーテには已に活動自體が本來の價値であるが故に、實踐を最少限の內容に制限した。――此の事は彼には活動は、人生の生きる仕方で、生そのものが生の確定的價値である事の結果である。*

＊純粹な生命活動性の意義は彼の個性觀に關する章で更に他の側面から吟味する。

併し此の事は玆では附隨的に述べるに止める。活動に關するゲーテの評價は、理念と經驗的實際との間に罅隙を克服するといふ吾々の問題に對して他の意義を有する。彼は曾て「差別相を同一義と直觀する事」を最高事と呼んだ。そしてそれに並べて「行」Tat を添へた。行とは「分離せるものを同一體にする能動的結合」である。兩場合共現象と生が抱合する。此の現象と生は「あらゆる中間段階に於て分離する。」卽ち、中間段階とは宇宙的形而上的な、純粹觀照も純粹活動も行はれない處を總稱

する。從つて、ゲーテにとつては、活動は、かの二元論の一方の側から他方の側に達する實際的手段である。已に掲げた引用が敎へる樣に、純理論的努力に於ても「理念と經驗とを繫ぐ」ものは實踐的要素、進展的作爲である。宇宙の理念的系列を構成する諸內容は、それだけとしては未だ相並んで孤在する。貫流する活動があつて初めて、實際に一方の內容から他方の內容に導き、思惟に於ても分極間の實際的連續を作り出すのである。それは恰度、諸點を貫いて一線とする運動が、その諸點相互の孤在を不斷の結合に移す樣なものである。實際の研究的働きがあつて初めて、個體と全體、經驗と理念が連續せ一線の兩極となるのである。而して此の事は凡ての領域、非理論的領域までも押し廣められる。よし、現實と絕對、經驗と超經驗的なものとの間に漸次に高進する系列を以て諸內容を思想上確立しても、未だ充分と言はれない。實行があつて初めてそれ等のものは鎔和流通する。卽ち、實踐的不斷の運動性があつて初めてそれ等のものを實際に聯絡し、經驗的に分離せるものを理念の理想狀態に移すのである。尙異れる方向の活動、反理念的無神的支裂的活動の存することは勿論ではあるが、――ゲーテはこれを擧げる必要は毫も無かつた。併し彼は、よしこれ等のものを云謂するとしても完全な意味での活動とは名附けないであらう。彼は屢「純粹」活動に就いて述べる場合、確に「純粹」の二重の意味が玆に加味される。卽ち、一つは純粹とは道德的無瑕、卑しい動機から自由であるものを意味し、二つには恰度吾々が、全くの口實又は全くの無意味を「純粹の口實」「純粹の無意味」といふ樣に、その槪念に全く混りなく照應するものを意味する。純粹活動とは活動態そのものの衝動と意味以外の何者もそこに入り來らざる活動の謂である。かうした意味の活動態は、これを言ひ換へれば、人間獨自の生活のひたむきな中心的な動きのことである。ゲーテは此のやうな純粹な活動を完全に象徵する驚嘆すべき表現に於、「單子（Monas）」「自體を中心とする廻轉」であるとした。蓋し單子の運動狀態は純粹活動の最後の生の形式で、生の基礎であるからである。而して此の自體中心の廻轉は、道德的意味に於ける「純粹」活動である。卽ち、經驗的に與へられた存在の個々のものの、ばらばらなものを高めて理念たらしめる活動である。かくして、實踐は、不明確な立場から救はれる。蓋し、實踐は世界觀の點で、倫理を中心とする人人の心中に於てすら多少ぼんやりした立場を占めるものである。結局は一切の事悉く實行に歸趨するとか、道德的價値は他のいづれの價値にも優つてゐるとかいふ聲を聞く場合には、此の實踐の諸內容の價値を問題にせねばならぬ。而もそれを問題にしたからとて、提示される多數の內容間の選擇の原理を得る事はないのである。實踐行爲の此の一般的な優先權は、世界諸要素の關聯全體に於ける一定の位置に依つて立證されない。併しながら次の二つの場合に於ては實踐的なものも立ち所に確立せしめられる。卽ち、一方に於ては實踐が純粹な活

動であること、表現せられるものは活動を本質とする人間の最も内面的な獨自な自然だけであるといふことが行爲の價値に滿足を與へる場合であり、他方に於ては、此の活動自體が所與のもの、單獨のものから發して存在の意味たる理念に至る道である場合である。實踐は、それに就いてのゲーテ以外の價値評價から見れば、最後の根柢に於ては、理念實現の偶然的手段に過ぎない。それ故、これ等の價値評價にとつては、此の業績の主張は綜合的命題である。ゲーテの見解にとつては、それは分析的命題である。現象、卽ち個々の事實と理念間の媒介が實際行動の定義である。卽ち、ゲーテの意味では、次のやうに言つてよい。活動とは、人間が依つて以て、かの分離せる世界諸原理間の宇宙的、形而上的「中間位置」を生によつて示すその態度に附けた名目であると。ゲーテの省察法には體系の概念が用ゐられる事極めて少ないのではあるが、玆ではかくの如く活動の意義と評價とは、實踐に主位を與へる他の多數の場合よりも一層體系的立證を有する。一層有機的に大なる世界範疇の總體へ挿入された位置を得たと言はねばならぬ。

ゲーテは、彼の晩年の諸見に於て、色々に名附けられる存在の分極、卽ち世界と神性、理念と經驗、價値と現實等の間に罅隙が口を開いて居るのを見たが、かくの如き罅隙を上に述べたやうにつないだ架橋の上を今一度最高の思想が飛び越える。彼の五十八歳頃の文に次の如きものがある。「理念から見れば同一であるものが經驗の形で現はれるときは、同一の場合もあり、類似の場合もあり、否、甚しきは全く不同で似もつかぬこともある。ここにこそ、眞に、自然の動的生が存する。」卽ち、此の文では理念上の規範から逸脫すること、此の規範と無關係な自在な現實活動そのものが謂はば一つの理念になつてゐる。眞に絕對な要求に對する對立も、眞に一般的な法則の除外例も、結局は此の法則と一緒に一つの最高の規範に包攝さるゝといふ事は、吾々がゲーテの偉大な思想構成の一つとして已に再三知り得た處である。彼は消極的なるものを、徹頭徹尾消極的なるものたらしめない樣にと警戒して居る。卽ち、消極的なるものは、寧ろ積極的なるものの異種と見做されねばならぬといひ、法則と例外は融合し難く對立するものではなく、たとひそれ等の層の內部では微弱な協調の如きはその對立の鋭さを鈍からしめ得ないにしても、高次の層の法則が兩者の上に立つのであると言つてゐる。それ故、彼は「自然」を自己に露骨に對立せしめ得るにしても、その對立は矛盾ではない。蓋し、自然は廣狹二つの意味を持つ。卽ち、彼は晩年に、「男色は人類の歷史と同樣に古い。それ故、たとひ自然の道に反してゐても、自然のうちに存してゐると言ひ得ると言つた。最も原理的な吾々の場合では、「動的生命」の概念は理念と實際間の杆格の上に建てられる。卽ち、動的生命は絕對的規定者として現れる結果、經驗が或る時は理念に近づき、或る時は理念から遠ざかる極めて不規則な作用すらも、そこに

示現せられる動的生命の故にあくまで自然の究竟の意味に立脚するのである。ゲーテは曾て、自然の生は「永遠なる動的法則に從つて」行はれると言つた。而も法則は運動の規範を定めるもの故、常恒不動のものであるのが普通である。さればこそ彼も曾て現象中の不確定なるもの、錯誤的なるものに關して自己を慰めて、「安んぜよ、移ろはざるものこそ永遠の法則である――薔薇と百合の花咲くも此の法則に依る」と言つたのである。然るに今法則自ら可動的であると主張するとは何の事だらう。それは、此の可動性の意味は、その法則から逸脱した現象も此の法則そのものの内に包含されてゐるといふ、無量の深意、逆説に外ならぬ。例外は規則を確證するといふ、常套語中最も誤用さるゝ常套語は茲に驚くべき正しさを獲得する。而して彼が曾て、「最大の困難」と言つた事、即ち、「自然に於て常に動いてゐるもの」を認識に於ては「靜止し、確立せるものとして取扱はねばならぬ」と言つたことは此處に解かれる。即ち、認識作用本來の目的に於て認識作用は此の「確立」に達するが、かかる認識本來の目的、即ち法則がその不斷に動く對境、即ち自然の中に踏み込むと共に、自然と認識との間の異質性が除去せられる。異質性は前述の命題に於ては「最大の困難」として、擡頭して居るのである。茲で更に又、予の見る限りでは、最も深い根柢から解明さるるのは、現象の活動區域、その自由、無法則性、例外性に關して先に吾々を驚かしたゲーテの表現である。即ち、法則自身は「可動的であるといふ表現である。而して法則の概念に從へば、法則とは固定的であつて、唯、現象の流動性、可變性に對してのみ理念的規範に過ぎないと言はれてゐるが、かくの如き法則の概念の正體は假りそめの分析であつて、これも亦最後の範疇的統一に依つて融解統合されるのである。自然は「可動的の生」を持ちながら、決して自然の法則から逸脱する事がないから、この自然の法則それ自體も可動的である。自然はその法則の範圍内では運動の自由を所有するが、此の運動の自由に就いて問題と思はれる色々の考への歸趨もここに初めて到達される。彼は曾てかう表現してゐる。自然は「その法則の表現から脱出する事なくして動き得る一つの大なる活動區域を有する」と。此の個所の言葉ではまだ法則といふものは、實際は單に境界を決定する圍繞壁であつて、個々の現象は、その圍繞壁に氣をつけながらも、恣意的な劇を演ずる。そして個々性そのものを無法則のままに放置する。此の個所の法則はそんな意味であるけれども――ここで法則は、可動的なるものとして凝固性を打破つたのである。蓋し、此の凝固性こそ、個物全部を統卒する力を法則から奪ひ取つたものであつた。即ち、動的法則は「局限」と「活動區域」の綜合である。恐らく機械的世界觀にたよつて歩んで居る吾々の論理學にとつては、此の永遠で而も可動的な法則の概念は、はつきりとは考へ出されないのであらう。けれども、此の概念は、かの法則と除外例、類型と自由との間の擬人的に思はれる分離が、自然法則の近

代的概念に移つて行く仕方を極めて朧げにではあるが、暗示してゐる。蓋し、自然の法則の概念ははつきりした形や結果を目指さず、從つて除外例に對しては全然意味を與へない。ゲーテの「法則」は最小部分の法則ではなくして、その本來の要因として「形象」「類型」を含んでゐる。併し此の類型は實際は必ずしも實現されない。否、恐らく、絶對に實現されることはない。從つて現象といふ點では「例外」が生ずるが故に、可動的なものと考へられる法則が類型に追隨する。そして此の法則から逃がれるやうに思はれた現象を再び取り戻すかの如くである。斯くして法則と現象とは理念と現實との回復された統一中に相互に融會するのである。法則の直觀性の側面と考へられ得る類型の確定性も結局やはり一種の運動をなすことになるならば、これを予は同樣な最後的思想意圖と考へ度い。ゲーテの最も深遠な世界解明の此の層に於て次の如き表現がある。「自己の種類内で完全なものはすべて、その種類を超越せねばならぬ。卽ち、それは異類のもの、比疇なきものと成らねばならぬ。鶯はその多くの音調に於てはまだ鳥の域を脱しない。鶯はその種屬を超えて歌ふことの眞意義を凡ゆる鳥類に暗示せんと欲する樣に見える。――完全な人間も亦、人間以上の標的への投影ではないとは誰が言へよう。」つまり此の表現に於ては、運動は少くとも一側面の方向に於ては、類型自體内に入れられる。卽ち類型は自らに於て完成することによつて自己を超越する。類型内の最高段階は同時に類型の彼方の段階でもある。法則の可動性は、ゲーテの意味する形態の動機と機械論の自然法則との間の形而上的統一を暗示する如く、類型の可動性は、ゲーテの意味する形態の動機と近代の進化論との間の形而上的統一を暗示するのであるといふ驚くべき思想を以て類型概念はその凝固性の克服を自體内に採り入れた如くに、法則のうちに、自然現象の自由な本性、卽ち凝定せる規範をめぐる自然的現象の本性が殘りなく採り入れられてある。此の法則は永劫の相の下に見れば、その圓轉滑脱性、卽ち「形成と變成」、換言すれば、あらゆる現實的固定化からの自由を包含する。而してゲーテが依つて以て理念と實在間の杆格を融和せんと試みた他の一切の概念も、正にこれ等概念の要石たる此の法則に到達せんと努力する樣に考へられる。

第五章　個　性　觀

個性の精神史的發展は二つの動機に端緒を得る。一箇の石、一本の樹、一箇の星、一人の人間、これ等いづれの存在も、先づ個體であるのはそれ等が何らかのまとまりのある範圍を有し、その範圍の内でこれ等の存在は獨立的なもの、統一的なものであるからである。此の場合では、そのものの他者と區別される性情が考察に上らず、唯考察に上る事は、此の存在個物が自體内に集中せるもの――その程度の如何を問はず――獨立に存在するものたる點であつて、此の獨存が次に種々のつながり、團體内に編成される事の如何は問題でない。若し世界が全く絶對同種の原子のみから成立すると假定せば、いづれの原子も、質的には他の原子と區別し得ないが、而も此の意味で個體たるを失はない。けれども、別種の存在を持つといふ事が、存在する主體の性質に延長されると同時に、以上の概念は謂はば一つの高進を經驗する。そこで――これを人間に適用するに――他の一人である事は最早問題ではなくして、他人と異れる性情者たる點が重大である。他人と區別するのに、存在に於てのみならず特殊の存在に於てする點が重大である。

これ等の範疇は、從來、或る程度迄は實際の力として世界と生との内容を構成した。處が、近代精神

の發展の波に乘つてこれ等の範疇はその實際的なはたらきを超える意識を持つに至つた。而もそれは二重の形式を以てする。卽ち、一つは認識が現實の構造を解釋するに用ゐる純抽象的概念としてであり、他は、色々の理想としてである。人間はこれ等の理想を益々完全に彫り上げる爲めに、自他の現實相を發展せしむべき任にある。十八世紀の思想界の主勢をなしたものは、人間の差別的存在である。換言すれば、自我の獨立點に於ける集中、卽ち自己の責務に任ずる存在が、すべてを混和し、結合し、强制する歷史と社會とから脫落することであつた。人間は、道德上、政治上、學問上、宗教上、自由たるべきものであるが、それと同樣に絕對的個體的存在たる人間はそのものとして形而上的にも絕對自由である。人間は斯く自己本來の性情を證明することによつて、人間自然一般の根源へ溯るのである。歷史的、社會的諸勢力は、そのむかし、人間を此の自然の根源から引き離した。何故なれば歷史的社會的諸勢力は獨自の範圍內にのみ住居する個體的獨立存在の自由を人間から褫奪したからである。併し自然は、法則の前に絕對平等の舞臺である。さう云ふ譯であるから一切の個體はその最後の存在根柢に於ては、最も徹底した原子論の原子と同樣、平等である。性情の差別は、個性の決定點にまでは及ばない。恐らく絕對獨存の個體、卽ち自己の存在の力を以てのみ養はれる個體がその孤獨と責任とに耐え得ないといふ感情がもとで、個體はその據り所を自然一般への歸屬關係、又一切の個體相互間の平等關係に求めるやうになつたのである。

個性觀の今一つの形式、これは十八世紀の末葉、殊に浪漫派の人々に於て純粹な發達を遂げたものであるが、これは獨立的自我を中心として個性的存在圈があるとか、或はそれだけでまとまつた世界があるといふ點に個性の意義を見ずに、此の世界の內容、換言すれば、本質の力の性質や、本質の表現の性質が、個體每に差別があるといふ點に見てゐる。此の個性觀は前者の形式的なるに對して質的個性觀と呼べるだらう。此の個性觀にとつて宇宙、就中人間世界の最も深刻な現實でもあり、理想的要求でもあるものは、原理的に同質のものが獨立的に存在するといふことではなく、原理的に異質のものの、とりかへ得ざる特殊存在といふことである。前者にあつて重要なのは、生活過程である。この生活過程の形式——換言すれば、相互孤立して自由であるが、而も同種の諸中心をめぐつての生活過程の推移——が問題である。後者にあつて重要なのは、生活過程の內容である。生活過程の內容は、その擔ひ手の何者もこれを他と共有せぬし、又共有を容されないのである。

個性觀の此のやうな大發展は、ゲーテの生時、極め純粹に表現されたが、此の個性觀の大發展に對して、ゲーテは決して一方にだけ偏した關係を持たない。一般に黨派的な、從つて粗笨なお題目のいづれかで表はさうとすれば、彼の人生觀は一種の個性觀的人生觀と呼ばれねばならぬ。彼の時代精神を

導いたものは上來述べ來つた傾向であつた事は拒まれない。彼は生涯の終り近くにかう言つてゐる。「予といふものが一般獨逸人殊に若い詩人に對して何者であつたかを明言せよといふならば、予を彼等の解放者と呼んでも差支へなからう。その故は、彼等が予に師事して悟り得た處は、人間が內發的に生きねばならぬ如く、藝術家は內發的に活動せねばならぬといふことである。藝術家は、どう振舞うと常に彼の個性をあかるみに持ち出すだけに過ぎないからである。」個性的生活として現れるものは、その最後の根柢を個體そのもののうちに有する。生活に對する此の關係はそれと異る可能の三樣の場合に對立する。

或る種の神學的考へ方にとつては、個體のエネルギーはそれ〴〵の程度と方向とに準じて、或る超越的な力から個體に注がれる。個體の存在の內容は、此の存在自身と全く同樣に、本來自己以外にある世界企圖の單純な部分として個體に與へられたものである。次に、極端な社會主義は個體を目して、社會が彼の以前に、又彼と並べて編んだ糸の單なる交叉點、卽ち社會的影響の容器となした。そしてその社會的影響の混淆からして、個人の存在の內容とニュアンスが殘る隈なく說明しつくされるとなす。最後に、自然主義的世界は、個體の社會的起源を說く代りに、個體が宇宙的に因緣的に起つたものであることを說く。玆でも個體は謂はば幻覺である。個體の恐らく比較を許さぬ形式は、星辰や砂粒を構成すると同一の材料や同一のエネルギーが交流する處に生ずるに過ぎず、而も個體の形式は、個體の生活の內容と活動の獨自なる根源ではないのである。これ等三つの場合に於ては、人間は「內發的に生活し」得ない。その故は、彼の「內面的なもの」は、それだけでは決して何等生產力を展開しないからである。彼が「あかるみへ持ち出す」ものは、彼の「個體」ではない。その故は、此の個體は決して實體ではなくして、それと異れるものであるからである。卽ち形而上的なものであり、社會的なものであり、自然的なものであつて、これ等がその個人性の偶然な形式を通過したのに過ぎない。此の形式そのものは何等生產的のものであり得ない。從つて本然獨自のもの、謂はば己自身を創り出す事は出來ない人生觀の主要問題、卽ち、個體が世界生成の最後の源泉であるか、個體は個體としての其の本質上創造的であるか、それとも又超個體的の力と流れとに對する通過點であるか、個體は精神的存在の諸形成が流れ出づるその源の實體であるか、或は個體は此の精神的存在の他の諸實體が採る形成であるか——此の問題はゲーテには前者の意味で解決された。これがゲーテの形而上學的根本感情である。勿論此の根本感情は個性問題に對する彼の關係を決して盡してゐるのではないが、此の感情を以て彼は個性觀の前者の形式を是認したのである。

扨て併し個體の此の獨自生產は更に、二重性を含んで居て、これが今爲した決定を何一度分化する。

個體の獨自生産に反對の上述の理論の一切は、個體に對する力學的影響の意味で考へられた。個體の生活は實際上の種々の力によつて決定せられるか、乃至構成さへもなされた。これ等の力は、個體の外にある根據から流れ出て、此の個體の生活は過ぎ行く過程として、此の根據に方向授與の原因性を見出した。從つて此の實際上の力なるものが生活過程の內容をも決定したのは避け難いのである。扨て併し此の過程が所謂自己のうちから內發的に流れ出でるとするならば、換言すれば、生の過程が創造的であるとしても――それだけの理由でその內容が決して唯一、獨創的で無比であるを要しない譯である。その內容は寧ろ全く類型的な、規範的な一般妥當のものであつても差支へない。ゲーテの個性觀問題に對するこみ入つた關係に於ける少くとも一つの方向は上述の言葉によつて表されてゐる樣に思へる。どの生活の過程も獨自の力學で創り出される。此の過程には、眞に個人的なものがいつでも殘つて居り、而も此の個人的なものは超越的、機械的、歷史的な根據から發祥したものでは決してない。從つて此の過程の所產は、どこまでも此の人格の眞の表現である。此の事は先づもつとはつきりさせて置く必要がある。詩的內容は自己の生の內容であるといふ類の言葉は此の意味である。次の樣な重要な言葉も此の意味である。「人は、詩人は生れるものだといふ事を承認する。凡ての藝術に於ても此の事を承認する。何故ならば、承認せざるを得ないからである。併し仔細に觀察すると、如何

なる能力、どんなささやかな能力でも、吾々に生れついてゐる。そして輪廓のはつきりしない能力などは絕對に存在しない。唯吾々の曖昧散漫な敎育のみが人間を不確實にする。かかる敎育は本能を澁剌たらしめすして、種々の願望を催起する。そしてかかる敎育は、實際の素質の向上を助ける事はせずして、その努力を次のやうな對象に向けるのである。卽ち、此の對象は、これを求めて止まない人間の資性とは合致せざるものである。」生の唯一正當な源泉たる個性は此の言葉以上に明瞭に說明はされ得ないし、個性には、表面的な、從つて偶在的なものとして吾々を圍むものからする生の構成が、これ以上はつきりと拒否さるゝ事は不可能である。此の事は動物の「不均衡な」諸機關、卽ち角、長い尾、鬣などに關する、直接には全く方面の異る表現の一般的意味にも關係がある。人間は、これ等の不均衡な機關とは正反對に、凡てを自らの形體の正確な調和內にまとめて、「彼の有する一切が、やがて彼である。」精神的なものに於ても無緣のものとして人間に隨伴するものはない。從つて此の句をゲーテの意味のまゝで、次のやうに變へ得る。人間は彼が作り出す一切でもあると。謂はば斯く靜的に表現された事を完全な動性形式で示すのはゲーテ自らの生である。彼と親交ある人々が、彼の意見が如何に柔軟であるか、彼の生氣の發展、轉變と共に彼の意見が如何に絕えず改變さるゝかを述べたのは彼の既に成熟した時代の事である。これ等の人々の一人の言葉に、「常に一切が完成してゐた

シルレル」とは異つて、ゲーテにあつては一切は對話の間に生れるといふのがあり、又他の者は言ふ。ゲーテの見解は決して安定したものではなく、彼の眞相を摑んだと思つても、次の瞬間には又「異つた氣分のうちに」異つた意見を發表したと。彼の生活の內容は正さしく生の過程に卽してゐた。恰も極めて正確に身體の內面的作用に依つて常に變化する皮膚が、生きた肉體に卽する樣である。恐らく玆から次のことも說明されよう。卽ち、彼が屢活動の事實と必然性、小息みなき活動に就いて語り、人格の「單子」Monas は此の活動の狀態に於て保持されねばならぬと言ひ、而も何の爲めに働くべきか、此の活動の向ふ所はどこであるかを示さない點も說明されるといふものである。吾々は殆んど斯う信じ度い位である。卽ち、生は只生きるだけであり、生くべきものであること、生の動きの形式的な發揮が生の存在の價値であること、凡ての內容と目的とは究局、生の動性を高める限りに於てのみ價値を有すると。何故なれば、實にゲーテは卒直に次のやうに明言したからである。「生の目的は生そのものである」と。併し彼はこれをそのまゝ彼の眞意であるとは信じない。寧ろ彼には、生が益〻生であり、益〻動性を增大するにつれて、價値ある內容の生產が全く自明のものであるといふ事のみ予は信ずる。それ故、ゲーテは、活動する單子 Monas の對象と目的價が何であるかを言ふ必要は勿論無い。最後の要求たる活動に就いて、又小息みなき働きの必然性に就いてゲーテの述べた言葉に對して、吾人は屢凡て空を把む樣な困惑に近い感情を抱く。何故と言ふに、價値ある內容がゲーテに於て提示されて居ないからである。かの凡ての活動と自我實證も內容を有して初めて價値となるのであつて、然らずんば、價値の肯定否定の二面に均しく開かれる單なる圖式に過ぎないのである。けれども、ゲーテは過程と內容間の關係を如何に有機的に考へたか、卽ち、生は原理的に自己に緣のない價値、卽ち、それに代うるに無價値をも認容し得るといふ如き價値を內容として採る事はせず、寧ろ、生がその眞意義を充す場合には、その過程が行はれるにつれて過程に相應する內容を己の裏から生み出すものである事を理解するならば、事態は異つてくる。此の內容は生の外部の對象目的として存するのではない。此の內容は生の生產性である。これは生とは區別出來ない事は恰度、言葉を話すのと話された言葉を區別出來ないと同じである。正しきもの、價値あるものを得るのではなく、却つて動きながら自ら生產する生の力こそは、前にあげた言葉を實踐的に解釋せしめる。卽ち、吾々は須く「本能を生動せしむべきであり、」「願望を催起せし」めてはならぬと言ひ、生の本質は生の「所有する」處のもので「ある」事だといふのである。

生はその內容を斯く直接にその個人的過程に接合するが、此のことと並んで立つものは前に暗示した次のやうな可能性である。卽ち、此の內容はその論理的な、表現可能な意味に於ては決して單一では

ない。即ち、此の個體にのみ妥當ではなく、多數の者と相分ち、多數の者に妥當であるといふ可能性である。少くともゲーテの所信中の一つの方向が斯樣に言はれる。彼の意見はかうである。即ち、素晴しいことは悉く既にその昔考へられたのである。唯それをもう一度考へる事が大切であると。――此の言葉で彼は過程の個人性と內容の超個人性とを明瞭に說いてゐる。彼は警告して「古き眞理、それを掴むがよい！」と。――彼の所信では大體に於て生の內容は常に反復するといふのである。併し一層重大意義のあるのは人間相互の差別のつまらぬことに就いて述べた箇處で、此の箇處はそれだけを切り離して考へれば、左程明瞭でない。即ち、天才と凡庸人の間でさへも彼は眞に本質的な溝渠を見てゐない。「吾々は均しく皆アダムの子孫である。」――此の言葉で彼は、時々見られる不快な言葉を大目に見るやうに勸告してゐる。――そして「凡ての特殊的なことのうちに」「人間を通して普遍的なものが益ゝ現れ來る」のを見るのである。その際彼は、彼らの力學性、即ち自らの活力量に依る生の過程の差別をはつきりと是認してゐる。實に彼は此の差別に基いて靈魂不滅の種々なる程度をすらも豫定してゐる位である。――此の消息を下の如く言ひ表はしてもよからう――種々の生活程度から生み出されるが故に、それに照應する生活內容は、異れる立場から觀れば、決して大なる差別を示さない。否、恐らく全く差別がないと云つてもよいであらう。即ち、倫理的立場、美學的立場乃至如何なる立場よりするも、その內容は極めて類似のものか、或は全く普遍的のものであり得る。生の內容をかくの如くに觀察するか、或は吾々が大概の場合、或は又不可避的にそれを評價する時にやる樣に、直接的な生そのものからひきはなして、或る程度孤立的に觀察すれば、個性の特質は妻を消す。此の個性の特質なるものは、生活內容が個々の生の强度の直接表出としてのみ當然有するものである。

かく解釋して初めて、先に擧げたゲーテの數々の言葉の間に起る矛盾が除去される樣に思はれる。人間が思惟し、仕遂げ、提示するものは、これを純內容的性質として客觀的順列に編入するにあたつては、創造的生自體の內部に於けると全く異れるものとなる――虹の色彩乃至瀑布のしぶきのたわむれに現れる色彩は、單純な光學上の現象や色彩理論の配列と論議の內に現るゝものとは趣を異にしてゐる。生の內容は此の兩範疇のもとに立つ。即ち、生の內容は謂はば生の過程の結晶、個性的動性の形成としては全然個性的である。その際、所謂外部に反映する獨立の內容として見るときは、此の生の內容は全く普遍的であり、全く一般的の內容であり得る。此の內容が正さしく純眞の生からうまれると同時に、普遍的となり、又さうであらねばならぬ。それ故に、詩的內容は自己の生活の內容であること、又各人は、その個性のみを示現すべしといふ前述の言葉と並べてゲーテは斯う宣言してゐる。

「詩人は個々的なもの――茲でいふ意味は個々の自己體驗――を普遍的なものに高揚し、その結果、

聽手が更にそれを自らの個性の持質に同化する事を得せしめねばならぬ。」――つまり聽手にあつては、個性的所產のもつ普遍的意味が再びその普遍性から姿を消して個性的なものとして體驗されるのである。斯く解釋すると共に十八世紀の典型的個性觀が特殊の構成を獲る事になる。此の個性觀に於ては、個體は全く獨立のもので、個體の力は、絕體的自發性の解き難い點から導き出され、各人の生は全く彼自らの發展であつた。併しその際人類は原子化した碎片と化し終らないし、又化し終るべきでないといふことを上述の思想が證明し得るのは、個々體はその本來の核心と本質に於てはみな同じであることを主張することのみによる。即ち、自由は平等に由つて補充される。ゲーテの言葉の基底は、此の問題を一層深く一層生き生きと把握したものとして解釋される。即ち、生の生み出す內容の二重の意味に依つて解釋される。彼が曾て精神的本質の「特性」に就いて語り、又その現象が「外部に向ふのが誤りで、內部に向ふのが眞實である」由を述べてゐるが、よし玆で問題となつてゐる方向とは異れる方向に於てゞはあるにしても、ゲーテはこの言葉によつて二重性の此の原理を啓示してゐる。個々人が獨自の根抵を持つこと、即ち、個々人の個性的創造的生はゲーテにとつてはその形而上的平等性と結合してない。寧ろ一種の局限なき差別が個々人の生の强度をわかち、その存在の意味を區別するのである。けれども、此の存在の過程が直接に、自己の衷からのみ生み出す內容、即ち此の存在過程の中に集中して比較を絕した時折の姿を示す此の內容は、同時に「外部に對して」一つの意味を持つ。即ち、此の內容は客觀的な秩序と人類の總體生活とに嵌め込まれてゐる。而して玆で、全く異つた價値標識、秩序標識に編入されると共に、これ等の內容は原理的なつながり、或は同一性を示し得る。此の原理的なつながり、或は同一性は、內容が個性的、創造的生とつながつてゐる間は全く問題とならない。これ等の內容が「內部に向うのが眞で外部に向うのが誤りである」と同じく、內部に向つては個性的で外部に向つては普遍的である。

之迄問題になつた個體間の差別は、彼の多くの言葉に依れば、本來、性質的ニュアンスには基かずに、却つてその生の强度の量に基いてゐる樣に思はれる。即ち、動性の濃度、自己實現、自己主張の力、即ちある程度量的差別に基いてゐる。彼は六十二歲の時に、此の方向に於て「偉い人間はたゞ凡俗を拔く容積を有するばかりで、彼等は德行と缺點はつまらぬ人々と共有するが、唯異る所はその量が遙かに大である」と言つてゐる。而して量的差別はもつとも手つ取り早く個々存在を區別するにききめがある。而も個々存在の持つ內容の普遍性を取り除く必要はないのである。彼は八十歲近くなつて、斷乎として次の如く述べてゐる。　世人は絕えず獨創といふ事を言ふが、一體何を意味する積りだらう。若し自分が偉大な先輩乃至同時代の人々に負ふ處の一切を擧げる事が出來るとすれば、殘る處抑ゞ

幾何だらう。――エネルギー、力、意欲を除いて何を自分のものと名附け得るだらう。」此の事は、人間の本質を理解する爲めの原理的可能性の一つである。そして偉大な肖像畫家中で、先づヴェラスケスはこれを體得してゐる樣に思へる。ヴェラスケスの畫ける人物を見て、何よりも吾々の感ずることは、人物畫の持つ生氣、存在力學のはつきりした個性的分量である。恰も單純な生の强度の目盛りが彼の描いたオリヴァレス伯、又ドレスデンの獵兵隊長の不斷に生活力に充溢してゐる樣な人物から、生に生彩なく一種の圖式だけな、あく拔きのハープスブルク家の人々に至るまで、まるでむき出しの生の强度の目盛りが一貫してゐて、その人物の一人一人が此の生の量の目盛の上でヴェラスケスの見解に據つて確定された明確な位置を守つてゐるかの如くである。併しゲーテに於て見られる個性觀のかくの如き形成と並んで、彼に於ては又後年の個性觀の形成が展開した。予はこれを質的個性觀と名附けたものである。而して此の形成にとつては、人間の本質と價値とは、人間の本具性、卽ち人間の資性の特殊性と唯一性に存する。ゲーテは十八歲の時に眞に熱狂的に斯う書いてゐる。「若し自分に子供があると假定して、それがだれそれに似てゐるなどと言ふ者があり、事實それが當つてゐるならば、自分は子供を捨てゝ了う。」そしてそれから間もなく、此の絕對特有性に對するかくの如き熱情、無類なるものの此のやうな尊重は、個人生活の個々の契機となつて續く。「自分のこれまで感じなかつた事を感じさして呉れ、自分のこれまで考へなかつた事を考へさして呉れ！」と言ひ、次には「マイステル」の中で、僧院長をして明かに自分自身の意見を述べさせ、「子供であれ、若者であれ、彼等自らの道を踐み迷ふ者は、他人の道を間違ひなく辿る多くの者よりも、私の意に適ふ」と言はせた。浪漫派に於てその頂點に達した個性觀の此の完全な典型並にその精神史的意義にとつては、恐らく「徒弟時代」全篇がその消息を傳へるものである。先づシェークスピヤを除けば、玆に初めて文學に於て一つの世界が示される。（よし一定の社會圈の小さい「世界」ではあるにしても。）此の世界は全くその要素の個性的特質の上に基礎を置いて居り、正さしく此の特質に據つて、特有に組織され、展開される。ここで自然に聯想されるのは犀利に個性化した個々現象から成る世界相の最も偉大な詩的例證、卽ち神曲 Divina Comedia である。「マイステル」に於ける諸人物は、その存在の强度と輪廓の力に於てはダンテの人物に比疇し難いにしても、「マイステル」の人物の個性成立に初めて眞の刻印を與へる問題、卽ち人物相互の働きから一の生活世界を發生せしめるといふ問題はダンテの人物に存しない。ダンテの人物は孤立並存して、唯詩人の超越的な旅程の上に排列されて居るにすぎない。その統一を見出すのに、獨自な關係によるのではなくして、超越的包含的な神的な秩序に據る。此の秩序は、かの個性化をその內面的要件としては全く必要としないものである。

シェークスピヤの個性觀に對比するとゲーテの個性觀は更に全く趣の異つた範疇内に這入る。此の範疇は彼等の對立せる制作法の究極の基礎に屬する。シェークスピヤの制作はその純理念の點では、神的創作性に象徴される。構成された世界に於ては、それを構成する「或物」、卽ち渾沌乃至は口に出して云へぬ存在が全く姿を沒して、個々の形體の總量の中に融けこんでゐる。これを他の一面から見れば、創造者自らはこれ等の個々の形體から全く退去し、これ等をそれ自らとそれ等に刻印された法則とに委ねて、自分はもはや、正體のつかめる、一目瞭然たるものとして形態の背後に立つ事をしない。シェークスピヤの描く人物は此の絶對者、形而上的なるものに對して藝術的類推を示してゐる。シェークスピヤの人物の「自然さ」は、すべて一般的統一的「全自然」が個々の人物の裡に感ぜられるといふ風な事を意味しない。かかる自然が共通の根柢として個々の人物を結合するのではなく、各人物は存在をその最後の一滴までも飲みつくしてこれを悉く己が個性的形式内に移し盛るのである。他の方面から言へば、創作者自らは自己の制作の背後にかくれて自己の姿を示さない。彼の個々の所產は、その補足、解明として、又は背景とか理念的焦點として作者の存在する事を暗示しない。吾々がシェークスピヤの人物に就いては、二三の皮相的な點を除いて何事も知らないのは、少くとも、極めて象徴的な偶然である。彼の制作、彼の描く人物は彼から離れてゐる。それで――正當な理解から言へば――彼の制作がそれぞれ作者を異にしても、その爲めに彼の作のどれもその理解、その妙味を減少する事があるまい。彼の悲劇的人物の各々が表示する存在は、個人的存在として、その人物の最後の根柢末梢までも、一切事物の客觀的相關性から、並にそれ等の背後にあつてそれ等を結合し得べき詩人の主觀への依存性からその人物を釋き放して無比なる獨立性と渾然たる彫刻性を賦與する。ゲーテの作及びゲーテの描く個々の人物は上述の二點に於てこれと異つた方向を指してゐる。ゲーテの詩的創作は彼の理論的世界像を基礎づけるのと同一の自然の感情の上に立脚する。世界は彼にとつては一個の宇宙的統一的存在の構成であり、此の存在は諸種の人物をその懷から解放し、その懷に收容する。（「生誕と墳墓。永遠の海原」。）けれども此の宇宙的統一的存在は如何なる瞬間と雖も、此の物質的にして形而上學的な根本實體からはこれ等の人物を全然解き放たしめない。（「永遠なものは一切者の裡に動き續ける」）一切の人物の血緣關係は、シェークスピヤにあつては、せいぜい、その人物の藝術的形式が多少同じたといふこと、人物の樣式、人物の輪廓の大きさが多少似て居るといふ處にあるが、ゲーテにあつては、人物の血緣關係は自然統一に根を下ろすことによつてあたへられ、恰も一波一波が、決して反復する事のない形で海原からもりあがるやうに、個々の人物は此の自然統一からもり上るのである。ゲーテは諸現象を自然の形相のもとに或は自然のつくりなすものとして見た

が、此の「自然」はシェークスピヤ的現象を生み出し來る「自然」よりは遙かに廣く、遙かに形而上的で、而も個體相關の根柢を造るに遙かに間隙がない。しかし、その爲めにゲーテの自然はシェークスピヤ程個々の人物に集中せず、シェークスピヤ程噴火山的迸出力を以て個々の人物を創造しない。シェークスピヤにあつては、個々現象の自然が問題であり、ゲーテにあつては常に同一なるものとして個々の人物の根抵をなす一般自然が問題である。「汝等愛する者よ、予は汝らに予を分ち與へる。而も予は常に唯一のものである」とゲーテが自らに就いて述べた言葉はやはり自然並にその個體的現象にも當て嵌る。吾々は凡て同一の神的自然の子供で、此の自然の「天才」は「最も粗野な俗臭」の中にも生き、斯くして此の自然は個性の一切の唯一性を、言葉では表せないが、唯一の根本法則の如きものに根を据ゑさせる。文藝復興期の典型的偉大さの様にシェークスピヤの個性は謂はば神から引き離れた。彼等の生存の形而上的なるものは、彼等の頭と蹠との間で席を見出してゐるが、ゲーテの個性は、形而上的有機體の部分として又一本の樹木の果實としてはたらく、――尤も或る仕方でこれ等の個性の中に固執して、それ等を再び自らの中に收容する「自然」は、それ等の間に質的同種性を造り出すことはないのである。而してこれ等の人物は、他の半面からすれば、詩人の人格の統一と相卽不離に融合して居るので、これ等の人物は唯一の創造的主觀性の表現として相互に結びつけられる――此の事は決してそれ等人物の本具性の唯一性を變ずるものでない。シェークスピヤにあつては、彼の人物の生活線が逢合する詩的にして創造的な人格といふ焦點は、謂はば無限なものの中にある。それが、ゲーテに於ては、此の詩的にして創造的な人格焦點は視野の外に出ることはない。さういふ意味は、これ等人物の凡てが記述し得る現象として、その作者と同族的類似性を有してゐるといふのでもなく、孰れの人物にもゲーテ的本性の特質が明示し得るといふのでもない。又彼の掌中にある、彼自らの完成せる諸部分たる此の諸特性から繼ぎ合されてゐるといふのでもない。勿論、此の自己をモデルとする事、已に描き得るばかりに構成された自らの存在を、想像影裡に構圖する事はゲーテにあつては屢見られる事であり、反復指摘された處である。しかし、茲で彼の意味するものは、此の多少の自然主義的機械的のものではなくして、もつと純粹に機能的なもの、一層深い層に屬するものの謂である。卽ち、内容を移植することではなく、動的に擔はれること、詳しく言へば、構成者、創造者によつて人物が述べられることが問題である。人物は、シェークスピヤに於けると同じ意味では、ひとりで存在しない。それは詩人に由つて提示された作品である。勿論シェークスピヤのそれと同様、「生長した」ものではあるが、それ自らの中から生長したのではなく。ゲーテの活き活きした心境、卽ち彼の世界意志、藝術意志から生長したのである。それでメフィストとオッティリー、グレートヒェ

ンとタッソー、オレストとマカーリエといふ風にその質的な個有性、差別性があるにも拘らず、皆詩人の創造的生活圏内に止まつて居り、これ等の人物を統一的源泉から水飼う生命の滋液は凡ての人物のうちに感得される。――それは被造物の創造者に對する復歸關係である。但し内容に立脚せずして、創造者から被造物への連續を解き放す事のない生きた創造過程に立脚してゐるものである。これを最も明白に示現するのは彼の小說である。「ウェルテル」に於ては、かの體驗と創作との内容的一致があるに依つて此のことは初手から覆ひ包まれてゐる。併し「マイステル」や「親和力」になると、藝術的樣式は、吾々が隨處に作者を感ずる事に依つて全く決定される。玆で見られないのは、形式的藝術的寫實主義である、（これは内容上の自然主義と樣式化との間の決裁に全く關係がない。）此の主義は事件と人間とを獨り立ちさせる結果、此の事件と人間は、恰度舞臺からの樣に唯單に直接的存在として讀者に働きかけるに過ぎない。然るにゲーテの事件と人間は、事實その背後に立つて讀者に感ぜられる話者に依つて運ばれる「物語」である。「遍歷時代」の如きが示す樣に、その人物が如何に獨立性を具へ、その結構（コンポクション）が碎斷的であるにも拘らず、而も詩人はどこまでも「統覺の統一」である。勿論此の「統覺の統一」なる意味は玆では特有の意味がある。卽ち、カントに於ては統覺の統一は心的生活過程を排除しつゝ、認識内容の理念的、客觀的關係を意味するが、ここで言ふのはかかるカントの意味ではない。又個々の意識内容が單に一定の主觀の生活表現としてのみ重大であるとする主觀的意味でもない。ここで言ふ統覺の統一とは物語と作者との間にのみ存する特殊の意味に於て用ゐられる。物語は客觀的統一を持つて居る。卽ち、物語の諸要素のそれだけで理解し得る關聯を持つ。語り手は、自身内に自らの人格的統一を有する。此の統一は彼の思想、彼の創作の心理的關聯を意味するか、或は支持する。然るに創造的活動をなして居る此の主觀が、かの客觀的形象のうちに、或はその背後に感得されるならば、物語りの統一は語り手の統一内に滑り込む。（而してこれこそ、此の「感得の可能」を意味する。）此の形象は新しい統一的創造焦點を得るのである。此の創造焦點が物語の客觀的統一と不卽不離である消息は、いつも空間的に方向づけられた獨逸の概念的な言葉を以ては適確に表現する事全く不可能である。併し、表現可能の如何に拘らず、ゲーテの小說は「語り手」の範疇の内部で進行し、斯くして客觀になりつゝ此の客觀性に委を沒しない主觀性の注意すべき範疇を示現する。かかる主觀性はゲーテの精神性に一貫する特徵である。

玆から尙一度シェークスピヤを顧るとゲーテはイフィゲーニエ以後の戲曲に於ても、謂はば報告者、語り手として現れる。マクベス、オセロー、コルデリア乃至ボルジアが物を言ふ場合、その事件と說話の觀念世界に於ては、彼等以外絕對に何者も存在せず、又何者も感得されない。彼等の隱れた

る統治者として彼等を動かすシェークスピヤなるものは存在しない。シェークスピヤは全く彼等の獨自の生活中に融け去つてゐる。然るにアントニオと王女、ファウストとワグネル、ビラデスとオレストとの科白の間には、それぞれニュアンスが色々と異るにも拘らず、シェークスピヤの人物に對比すると、これ等の人物は略同一な根本韻律を持つ。それは、彼等をして語らしむるものは結局常にゲーテであるからである。ゲーテの人物がその生命をゲーテ自らより得來る此の直接關係、卽ち恰も臍帶の解けざるが如く、彼等の間には不斷の血液の流通關係がある。これが、恐らく、ゲーテが「眞の悲劇」に手を伸ける事に逡巡して、「その試みさへも自分を擾き亂すだらう」と言つた理由であらう。上に述べた事から見れば、主觀と客觀間の對立はシェークスピヤに對してはゲーテに對してとは全く趣を異にせるものである。卽ち、シェークスピヤにあつては此の對立は一般には存在しないとも言へる。主觀と客觀との對立は問題にされない。ゲーテにあつては此の對立は克服され、對極が感受され、兩極間の距離も測定し得られる。而も、生きた作用が此の兩極を統一的に結合する事に依つて測定し得られるのである。シェークスピヤはゲーテの樣に彼の創造活動を「對象的」と云ふ言葉で表はさうとは思ひも及ばなかつたであらう。然るにゲーテは明かに對象的といふ表現で自己が救はれる樣に感じた。シェークスピヤの豐かな生命は、その噴湧の刹那に於て、彼の主觀のそばを素通りするやうにして、一人立ちの輪廓をもつた作中の人物の中へ流れ込む。これ等の人物は對象的である、これは言葉の絕對的意味に於てさうなのであつて、主觀の反對といふ關係によつては表はされないのである。最後に、此のやうな構造關係を持つたゲーテの人物と一つの契機が關聯せねばならぬ。此の契機は最初に提起した個性觀の問題に立ち還らしめるものである。ゲーテの大作中の殆んど凡ての人物は、世界を直觀する可能性を表はす。換言すれば、その人物の特殊の存在から見て、一の內面的世界像を建設する可能性である。ここでいふ世界は、如何程小くとも、而も一つの「世界」といふ性格を持つてゐる。一つの世界の性格といふのは或る種の見方、感じ方を意味する。それは描き出される存在內容に着色するばかりでなく、その間に介在する一切のものに對してもはつきりと構成の力を揮ふであらう。換言すれば、これは中心的な本質性であつて、これを中心に、構造と色調の點で、此の本質性によつて規定された隙のない存在總體の姿が生起するであらう。彼の見る處では、これは、シェークスピヤの凡ての人物中でハムレットにのみ異論なく適用される。ロメオに依るも、リアに依るも、將又オセロ、アントニウスに依るも、一つの世界を建設し得ない。けれどもファウスト風、メフィズト風、タッソー風、アントニオ風或はシアロッテ風、オッティリー風の世界は建設し得る。「ウィルヘルム・マイステル」は此の意味では多數の世界から成る一つの世界である。シェークスピヤの人物は世界構

成の力を全くその人物の生活内に包み籠めてゐるけれども、ゲーテの描く、以上述べた主要人物の各は一つの世界――それは直觀の世界、或は生活構成の世界を問はず――に對するアプリオリである。成程、これ等の人物の周圍には、生活の雰圍氣、彼等の個性的生活の雰圍氣があるが、併しそれ等の人物の運命と意志とを離れた場合、尙且つ此の雰圍氣は客觀化されて此の雰圍氣にのみ表現される存在の相となるといふほどではないのである。各人物が個性的精神世界の中心をなすが、これ等の多數の人物から一藝術品の小宇宙を發生せしめるといふ仕上方に於てゲーテはラファエルを第一の先蹤とする。予の考へに誤がなければ、各人物がそれぞれの世界交響樂に對する特殊の音調を提示する爲に、多數の人物を、精神界一般の象徴として藝術的にまとめ上げた最初のものはアテンの學園である。ゲーテにとつては、多數の人物の述べる言葉が彼等の綜合存在に對して有する關係はこれと同曲に決定される。此の關係は凡ての藝術樣式にとつて非常に重大な意義を有する。一定の行爲と受苦の擔ひ手、換言すれば、一定の運命とそれを忍受する仕方の擔ひ手を綿密に書きしるしたものが戯曲の人物である事は、希臘の生活原理並に藝術原理と飽くまで聯關がある。一切の性情と力とを具へた人間が藝術品の主題に依つて與へられた形式内に這入つて行く、――恰もパルテノンの彫刻が藝術的契機の對象と構成との欲求する生命を嚴密に有するが如きがそれである。生命は嚴密に此の形式を充す。而して此の生命は決してその形式の下をくぐつて、恐らく藝術の領域を超躍する遙かに廣い流れとなつて注ぎ込むものではない。希臘思想に於て初めて、提示された契機が、人格の廣い流動の生命から掬ひ上げたものであること、或は凝集する生命であることを吾々は感ずる。何故といふに、生命は此の刹那のうちに姿を沒せずして、却つて此の刹那からのみその姿が見られるからである。凡ての偉大な人間叙述家の書き上げた人物の特色は次のことである。――よし彼等の異れる樣式が如何に區々の形式を用ゐて、此のことを述べるにせよ――卽ちそれ等の人物の言行の一切は、どんにでも表現出來る全體的な完成された人格の部分として現れてゐるだけのことで、此の部分が偶然に照明を受け、言葉となり、そして觀照者に向けられたのだ。シルレルの人物を見て屢我慢のならぬ程に芝居じみて弄筆的に吾々に思はれる點はそれ等の人物が、その役割の科白の形で陳べること以外に、心的内面性もなく生命も持たぬといふことである。これ等の人物の心的範圍の限界は嚴密に彼等の俳優的現實の限界と一致する。シルレルの人物は俳優の如きものである。俳優といふものは、舞臺に姿を現す前後にはつまらぬ存在であり、存在しないと云つてもよく、彼が舞臺で言ふ事を除いては、表現される人物の生命の片影をすらも留めぬものである。シルレルの凡ての人物中で、恐らくワルレンシュタインのみは凡ての個々の表現を超躍する神秘な圏域を自己の周圍に持つ。換言すれば、一切の表現を生

む人格焦點のエネルギーを持つてゐる。此のエネルギーは此の場以上のどんな表現にも應じ得ることを感ぜしめる。それがゲーテの人物になると、その現れる人生のいづれの場合に於ても、「此の場以上の表現に應じ得る」力に充されてゐる。イフィゲーニェと言ひ、タッソーと言ひ、或はファウストと言ひ、ナターリェと言ひ、彼等から聞かれる言葉以上の存在でないものはない。彼等の言ふ所は、いつでも、無限に豐富な内的生活全體の閃光に過ぎない。然るにシルレルの人物は常に此の當面の閃光からのみ成立する。ゲーテの成熟期の人物は次のやうな獨自性を有する。即ち、これ等の人物は豐かな古典的な圓味を有し、而も同時にその提示する一切は測り難き生命總體の集中的、決定的斷節であり、又換言すれば、それは光彩陸離たる反照で、吾々はそこにそれ等人物の生命を見るのである。ゲーテの人物は、直接には言ひ表はされず、或は言ひ表し得ない統一的生命の統體をどんな客觀的、或は偶然的な表出とも和唱せしめるといふこれ以上分析されない性質に於て彼自らに似てゐる。――けれども彼の人物の此の生命が、これ等人物の個々の言葉の基礎をなし且つ個々の言葉を包括しつゝ、それぞれ「世界觀」に客觀化され、或はされ得る事は、シェークスピヤに比しては、どうしても遙かに知的な彼の本質と關聯する樣に思はれる。試みに上に擧げた彼の人物を前述のシェークスピヤの人物と比較すると、凡て自然的存在を踰えた理論的なもの、精神的なものの息吹を有する。而して自然的存在は、それだけで纏つてゐるか、それとも實際的な作用を以てまるで光線の形で環境に廣がるのに、理論的人間の理念的な創造性は、一の完全なる世界圖を自己の内部から放射する。或は個性的に決定されてゐる「世界」の發生と個體の中心に於けるその理論的性格との間の關係を一層深い層に於て把握すると、理論的人物の内面的諸要素は最初から、少くとも可能的には論理的な構造を有する。此の諸要素の形成の仕方は、個々の要素から容易に他の要素が現れると云ふ風である。即ち、發表された要素から發表されない、否、考へさへもせられぬ要素の關聯が簡明に推論されるといふ風である。それに反してシェークスピヤの在るがまゝの性格に於ては、在るがまゝの存在は論理的のものでなく、又論理的に構成されない事が目立つて居る。概念的に相互から展開され得るかもしれぬのはたゞ存在の質的規定だけである。存在そのものは根源的設定を要求する。存在は經驗と體驗の仕事である。それで、或るものに於て、その存在の非論理的事實が支配的であればある程、所與のものを所與ならざるものから、又逆に所與ならざるものから所與のものを推定しつゝ擴げて行つて一つの世界觀の全體に到達するといふやうなことは益々容されなくなる。此のことは恐らくはシェークスピヤの人物は意志的性格であり、それ故これ等の人物に不可測性と自發性があることを心理的に言ひ表はしたものに過ぎない。蓋し聯關的なもの、次から次へと豫測的に連續生産するものに向はんとする知的傾向と意志との差異は

意志が上述の不可測性と自發性をもつて居る所にあるのである。その本質性が一つの世界觀に構成法則と個性的色調とを與へ得る全く唯一のシェークスピヤの人物、卽ちハムレットは正さしく意志の人でなくして知的性格であるのも偶然でない。

ゲーテの人物の此の特徴、卽ち、吾々が彼等を呼ぶに世界像を以てし得る事、彼等の個々の表現は理念上纏つた全體直觀、全體感情の斷片に過ぎない事――は今初めて、ゲーテの人物構成が先に質的個性觀と名附けたかの第二の個性觀の形式に屬する完全な意味を示すものである。蓋し此の第二の形式は人間間の異れる存在が決定的價値として考へられる事を意味したからである。然るにフィヒテは個性觀の第一の形式を定義して、「理性を具へた者は一樣に個性と言ふべきで、これとか、あれとかいふきまつた者が個性ではない」とあるが、第二の場合では强調點は正さしくきまつた個性に移る。卽ち各個體は他のものに對して交換し難い唯一者である點に移るのである。個々の人物が類型として考へられるか、現實の諸偶然が一つのもの、或は全く同一な多數のものをつくるかの如何に關係無く、各人物の意味は、その人物が他と差別される事、その人物は彼固有の方法に於てのみその存在を表現する事、乃至世界內容の關聯中に於ては此の人物は彼のみが充し得る地位に立つ事である。併し個性の形而上的解釋がその完全な直觀的充實と發刺たる構成に到達するのは、個體の唯一性を構成する根本色調が個體を圍む存在の統體に滲通し、その統體が此の根本色調と和唱する樣になつて可能である。人間の本質が事實、全く個體たるのは、人間が世界の一點であるのみならず、それ自體一つの世界である時に初めて人間が眞に完全な意味で個人である。そして人間が世界であることを人間は何によつて證明し得るか、それはたゞ次のことのみによる。卽ち、人間の性質が或る可能的世界像の決定者として、換言すれば、或る精神的宇宙の核心として現れ、而して彼の一切の個々表出は此の精神宇宙の理念的總體の全く部分的實現に過ぎないといふことのみによる。而してこれを他の側面から見ると、若しゲーテの人物の意味する如くに、人間が一の世界の根源として、謂はゞ一世界觀　名目として解釋されるならば、各個人は深い根柢に於て、他の個人と個性的差別がなければならぬ。これ等一切の諸世界が同一性のものであるなどといふことは無意味であらう。その故は、その場合には、唯一の世界が存在するだけで各人はその世界內で一の整然たる生存を提示して事足りるだらうからである。可能的世界像が無際限で、各人がその一々の世界像の中心點であり、法則である事に意味があるのは、たゞ次の場合だけである、卽ち、それ等世界像の如何なるものも他のものに依つて補充し得ず、又精神が存在全體を移入し得る音調の種類の豐かさをその世界像が增大する場合だけである。ゲーテの主なる人物の各は、個々の運命或は問題のみならず、一つの世界が理解され、體驗され、構成され得る樣

な性質を提示することによつて、初めて、何者にも「似てゐ」ない質的唯一者として彼の個體の解釋が全き姿を現し來るのである。

扨てゲーテの「一般人間性」の尊重は、此の個性觀に對して分離と結合の特有關係をなす――而も二重の意味に於て、即ち、此の一般性は個性的なものの本來の最深な實相でもある（從つて完成された洞察眼ならば、此の一般性が「國民性と人格を通して益々輝き出づるのを」見るであらう）といふことと――此の一般性は同時に諸生存の價値であり、此の價値はそれと對立する諸根據を貫いてその實現が助成さるゝものである（老齢に到つてのゲーテの言葉に「予の著述の意義は純人間性の勝利にある」とある）といふこの二重の意味である。先づゲーテの言ふ一般人間性は個性的な現象の共通の特徴を意味し得ないことは確かである。此のやうな共通な特徴ならば、時に應じて特殊な、或は獨特な個性現象からひきはなされて、「一般的人間」といふ抽象的概念に總括されるであらう。かうした行き方、即ち、完結せる現象をあとから機械的に分解してその現象諸要素を同じく機械的に綜合することは、唯理論的啓蒙思想の行き方である。ゲーテはそれと正反對に、諸現象をその一切の多樣な姿に生産し、且つ支持するその根抵のみを意味するに止まる。彼には個性は或類型又は理念の示現として現れ、その類型なり理念なりの生命は、無限の特殊な形式に分化する處に存する。統一と多樣とは、その現實性から見ても、その價値から見ても、矛盾はしない。何故ならば、多樣は統一の存在態であるからである。殊に存在の最も多岐な階梯に於ては、自然一般の統一と一般諸現象の雜多とは矛盾しない。又有機的類型の統一と個體の特殊化とは矛盾しない。人格の統一とその差別的、對立的表現の豐かさとは矛盾しない。此の統一が現象の內部に於ては一般者として、即ち或る特徴の共有者として現れるのは、謂はゞ偶然的のこと、少くとも皮相的のことであつて、本質的な事は此の統一が個性を擔ひ、個性の特殊な構成のうちに生きることである。即ち、此の統一が眞實の根源、或は形而上的理念として、個性に於て完全に自己を表現するか、それとも偶然的に不完全と分岐のうちに生くる事である。茲で彼は人間よりも低級の生物に就いて典型的に述べてゐるが、その事は偶々人間の個性に就いても當嵌るのである。例へば、全く變つた形をして居るにも拘らず、或る主要なる特性が同一であることを示してゐる二つの貝の種類に就いては、研究し、認知し、享受する自分のやり方に從つて、予は象徴にのみ固執して居ればよいのであるから、此の生物は、次のやうな聖なるものの一部である。即ち無規定的なものを求めて精進しつゝ、絶えず自己を規定する自然、而して、最大から極微に及ぶまであくまで神及び人間に類似する自然をまのあたり示してくれる聖なるものの一部である」と。實に、現象複合體の部分が同一であるといふことは、本來的、原理的には、此の現象複合體

が共通的一般者に屬すべき爲めの條件ではない。即ち

永遠に一なるもの
示現して種々の相をなす、
大なるものは小に、小なるは大に、
一切は自らの道に從ふ。

「自然及び藝術の最高にして唯一なる作用は形成である。そして形成の中には特殊化の働きがある。その目的とする所は各事物が特殊者、重要者となり、それであり、その性を貫くことである。」理念としての道徳上の要求は唯一のもの、絶對に一般的のものである事をゲーテは一刹那も疑はず、且つ此の道徳的要求は絶對に一般的に形成せられ、各人に對してその人以外の何人にも通用しない態度を負課するものである事をゲーテは確信する。それと同じく一般人間性が、その存在の仕方が任意に現れる諸現象であり、否、分極對立する諸現象に分離する性質のものであるからとて、此の一般人間性はゲーテにとつてその統一基本的同一性を失ふ事は絶對にない。玆に一つの點がくつきりと浮び出る。この一點から見れば、「歴史」に對するゲーテの謂はゞ消極的な態度に於て全然無意味な空論でないものが明かにされる。ゲーテは個性を一般人間性の態様なりと理會した。此の一般人間性は個體間の同不同性と全く無關係に、謂はゞ個性の實質、或は生活動力として各個性内に存在するのである。かく個性が一般人間性の存在根柢から隆起するのに對して、個性を歴史的偶然的所産と見るのはゲーテの興味を減殺した事は言ふ迄もない。唯理論が一切人間の形式的自由と獨立及びその自然的平等を論理的に展開したかの個性觀の第一の形式を思ひ返すならば、「歴史」が諸現象の構成に對して單に皮相的因果關係を擧げ得るに過ぎないのに對し、ゲーテが唯理論から受けた深い感銘は、諸現象の構成は一つの内的必然から湧き上るといふことであつた。尤も唯理論は此の原理の獨立性を、まだ小心翼々として同種的内容に結びつけ、個々の現象を發生せしめる内的な自然根原を、個々現象一切の本質的同一性に即してのみ説明し得たのである。然るに唯理論を克服したゲーテにとつては、此の共通な根原は現象の差異性に於ても依然として現れたのである。此の根原の力は斯くして唯理論が歴史的偶然に歸する以外爲す事を知らなかつた此の差異性の中へも生々と創造的に蔓びて行つたのである。

最後に、統一から發生する多様、即ち統一の生を提示する個性的多様といふ動機は、ひろがつて個々の人格にまで及ぶのである。ゲーテは類型人間の統一性と個々の人間の統一とを見損ふ事は一度もなかつた。けれども此の統一は、その自體内で分化すると云ふ考へ、即ち統一は人格の諸性質乃至諸

方面の分極の形で現れると云ふ考へ、人間は謂はゞ偉大にして同時に弱小、善にして同時に惡、嘆美すべくして同時に輕蔑すべきものであるとの考へが、已に彼の廿代に構成された事は明白である。卽ち、プロメートイスは彼の極めて不充分な人間に就いて言ふ、

我が兒よ、お前達は墮落してゐない、」
お前達は勤勉で而も怠惰
殘忍で優しく
寛大で貪婪である
獸に似て而も神に似てゐる。

又明かにこれと同樣で、人間にのみ關係する意味で、「永遠の猶太人」中では

おゝ不思議な混亂に充ちた世界、
秩序精神と遲鈍な迷蒙とに充ちた世界よ
汝、怡樂と苦患の連鎖よ、

此の見解の原理的な點は彼自らの生活感情に支持されて居らねばならぬ。その故は、ゲーテ程に自己を統一あるものと感じ、ゲーテ程に疑ふ處なく、自己を持續的自我と感じたものはない。又かくばかり多くの矛盾と對立的傾向に分裂し、客觀的にはかくばかり多くの全く異れる素質と活動とに分裂したことを自ら意識し、而もどの素質と活動をも存在の權能あるものとして、又その特殊性に住して本來の面目を示すものと感じた樣な人を吾々は外に殆んど知らないからである。類型人間のかの基本的統一に於て――此の基本的統一が觀念的補助概念としてか、生物學的實在としてか乃至は形而上的信條として理會せらるべきかは未解決のまゝであるが――「一般人間性」が存在する。從つて謂はゞ無數の多樣を極めたる現象に分岐し、その個々の裡に常に同一者として固執する生そのものに一般人間性は存在するので、これ等現象自體內に於て分解と抽象に由つて確定し得る樣な個々の同類者に一般人間性が存在するのではない。

併し此の一般人間性は存在であるのみならず、存在當爲的なものである。換言すれば、一切の個性に於ける眞に生動するものであるのみならず、個性に於ける價値であるが故に、此の一般人間性はゲーテの世界觀の概念世界に於ける、最も深い最も基礎的形式中の一に屬する。抑ゝ絕對に一般的なものが如何にして價値あるものたり得るか。たとひ一般的なものは絕對の價値を持つとしても、從つて、その概念上或る條件及び價値を超えた或る目的に依存する事のない樣な價値を持つにしても、尙容易に理解し難いのは、どうして、かうした價値で裝はれた存在部分は、あらゆる他の各部分が同一程度に

同一價値を所有する場合にも、尙且つその價値を保有する事のあり得べきかといふ點である。若しさうなると、此の價値の性質は勿論存在一般と合致する。從つて「價値のある」といふ賓辭に由つてかの價値で裝はれた存在部分に與へられた强調力說も、他の一切の部分と絕對的に均等化されるとなると、帳消しになつてしまふ。價値自體が如何なる意識を持つにしても、價値の保持者は、自らが價値あるものとして感じ得らるる爲めには、その價値の所有に依つて他者と何らかの相違がなければならぬ。吾々の精神的諸機能は、その內容の諸差別に結びついてゐる、かうした吾々の精神には、價値の主體たり得る樣に思はれるものは凡ての差別相を絕したものではなく、その程度乃至種類上何らか個性的のものに限る。吾々の感官知覺や吾々の思惟と均しく、吾々の價値判斷は上述の如き心理的相對性に結びつけられて居るが、かくの如き相對性がカントの思惟に——たとひ此のやうな言葉に於てではないにしても——その方向を規定したのである。理性的意志が幸福主義的に規定された意志と異つてゐる事がカントにとつては此の理性的意志にその特殊の價値を與へる。經驗を構成する精神のエネルギーは、思辨的理性に比して遙かに高き價値を有するのみならず、全く別種の價値を有する。美的享受はその本質と價値上、官能的享樂と區別される事に依つて規定される——といふ風である。カントの精神研究の完遂した「限界設定」は價値の定立を區別と對立とに接合することに依つて廣汎な領土を征服したのである。此の限界設定のうちには、次のやうな世界觀が顯現せられる。それはあらゆるものの意味と內容とを他方のものと區別することなくしては考へる事が出來ない世界觀である。斯くして「差別に對する敏感」といふ心理的經驗が、價値の世界一般に對してその形式を與へたが、此の價値問題に對するゲーテの精神態度は、遙かに形而上的な態度であると言つてよい。何となれば、彼は實際に於て存在の統一と全體とを價値として感ずる。卽ち、此の性質には何らの比較も要しない絕對價値として感じてゐるからである。玆には異同とか多少の差とかは存在しない。それに伴うて、難點が現れることは確である。それは汎神論がその根本概念を離れて發展するどんな場合にもこれに警告をあたへるものであつて、かかる難點を吾々の此の研究が色々な所で擧げねばならぬのである。如何にして存在の絕對的統一が事物の現象する雜多、或は外觀的雜多に至るべきか、如何にして此の統一が變化する諸狀態を自體內から生み出すべきかは容易に理解されない。何故なれば、吾々の悟性が產出と變化とを理解し得るのは唯一要素が他要素へ働きかける爲めであり、そのやうにしてのみ理解し得るのが吾々人間の悟性の本領なのである。他者の並存を許さない絕對の一者に於ては、何故に此の絕對の一者がその一旦與へられた形式と狀態から脫け出でなければならぬかと云ふ根據がわからない。その一者は永遠の凝結狀態を保つて自體內に跼蹐する。何故ならば、一者が依つて以て或る變化

に動機付けられ得る何ものも存在せぬからである。已に述べた如く、ゲーテの汎神論は此の難點を克服する。何故ならば、存在はゲーテにとつてはその全體性に於ては最初から一の生活過程であるからである。換言すれば、存在は統一から生れ來る永遠の發芽と生誕、死亡と生成であるからである。或は寧ろこれ等の現象は存在そのものの此の統一の生存形式としてあるからである。併し、かかる存在の價値は汎神論と同じ道を辿つたのでは可能ではない。存在の價値の可能なるが爲めには吾々の經驗的價値判斷の方法と絶緣する一層端的な言ひ廻しが必要である。蓋し、價値判斷を下される事物の彼岸には他の事物は他の價値を有するとか、或は程度を異にする價値を有するとか、又は何らの價値をも有しないなどの事實に吾々の經驗的な價値判斷の方法は繫がれてゐるからである。從つて、論理的には全く立證し得ない全く新しい根本感情から出發してのみ、全存在は、一切の並存者と一切の比較を除外する統一狀態に於て、その沒價値の狀態から救はれる。かくの如き根本感情から出發してのみ存在は全體として價値の强調を獲得するのである。此の價値は他の場合ならば、その諸部分相互の關係からのみ生ずるに過ぎないのである。總體存在の價値は謂はゞ證明も反駁も存在せぬ心の指令である。總體存在の價値は生命の氣分のあらはれである。生命の氣分はそれ自ら存在であつて、存在としては、正でも不正でもない。恐らく、かう言へるであらう。ゲーテの藝術的素質が彼をして此のやうな

價値感情に傾かしめたと。主知的素質は世界統一の思想、卽ち、個々體の一切の差別がそこに委を沒する hen Kai Pan 一卽一切の考へに到達し得るだらう――が、此のやうな主知的素質は此の全體の絶對價値の感情にまでは迫進せぬだらう。又他面に於ては道德的素質は、カントの「善なる意志」の如き或る絶體的價値の感情に達し得るだらう。けれどもかかる道德的素質は價値の差別を缺く事が出來ない。否、かの絶對價値はかかる素質にとつては實在といふよりも理想であり、從つて此の絶對價値が本質的意義を持つのは、實在の相對的な諸價値がその差別相に於て標記せられる標準としてある場合である。唯、美的性情のみは、道德的性情に比して、もつと大きな幅を持つて居る。或はもつとひろい寬大さを持つて居る。此の美的性情は知的性情に比ぶれば價値評價の熱情を有してゐるが、かくの如き美的性情は價値評價の熱情を存在全體に對しても實證するであらう。此の美的性情は凡ゆる印象に對して、價値と意義の感情を以て反應する――然るに倫理的性情の價値領域は常に現實の一截片と合致するだけに過ぎない。――而して此の美的性情が、ゲーテに於て見る如く、世界總體に對するかの神秘な關係、卽ち全體を全體として自己に作用せしめる能力を所有する場合、此の美的性情は、謂はゞその天資の言語なる價値を以て反應し、又此の全體に答へるだらう。幾度ならず表現されたのは此の包括的な價値概念である。換言すれば、經驗的世界の內部に於ては包括的な價値概念をその黨

派の一つに所屬せしめるやうな相對的な接合を拒否することである。

「人生は、その如何なるものにもあれ、善なり。」

「汝等惠まれたる眼よ、
　汝等の曾て見たるもの
　そは如何なるものにもあれ
　げにいみじくも美しかりし哉」

恐らく此の言葉の裡にはゲーテに於ける最も深い宗教的なもの、彼の宗教性一般の特色が表現されてゐる。その宗教的なものとは、絶對者はゲーテにとつては價値であり、價値は差別に結びつけられて居らぬことを示す。俗衆の宗教はすべて何らかの形で、差別感といふ心理的經驗的事實に依つて制約されてゐる。これ等俗衆には神が如何程絶對者、至上實在者（ens realissimum）、又存在者と善の唯一源泉或は所在として考へられようとも、而もこれ等俗衆は神に對する對者を要する。彼等は、救濟を必要とする人間と救濟を下す神との間、罪障の醜惡と聖者の至福との間、神に棄てられた存在部分と神に充たされた部分間に於ける二元論を超脱する事が出來ない。ゲーテの宗教的な「自然」――概念に於ては永遠の萬法者、存在の絶對者は已にそれ自體に於て尊崇すべきものであり、絶對善、絶對圓滿なるもの、絶對美であるが、――かくの如きゲーテの宗教的な自然概念はその形式的原理から見れば一切の寺院的宗教から排除されてゐることは明白である。全存在「そは如何なるものにもあれ」、教會的宗教の是認し得ない所である。凡てこれ等宗教の二元論は、（少くとも苦惱と救濟とが絶對的二律背反をなす佛教のそれさへ）ゲーテの宗教性と氷炭相容れざるものである。蓋しゲーテの宗教性に於てはそれが所有する宗教的意義を藝術的生活氣分が最も明白に展開してゐるからである。總體存在の統一を直接に、而もそれ自體内に於て價値あるものなりと理解せんとする壯大無比な試み、これがゲーテの世界觀の特色と言へる。ゲーテが自然の及ぶ處に神を到らしめ、神の及ぶ處に自然を到らしめ、かくして兩者を相混融抱合せしめてゐる上は、彼にとつては神とは、その實在契機たる自然と一體に生きる存在の價値的契機を表はす名目である。藝術家の生産的人生觀に於ては、汎神論と個體觀とは最早互ひに排除し合ふ對立ではなくして、同一價値關係の兩面である。藝術家は最も鋭敏な差別感の持主であり、各存在部分の唯一性とその比較不能の意義とに關する最も確實な知識を有する者である。彼は、各人を自己目的と見做す倫理的原理を――美的價値判斷の領域内で――凡ゆる事物に適用する。而して正に此の事に依つて彼の世界像は汎神論的になる。各個々性の個性的價値、即ち個々のものに根を置くと共に個々のものを超脱する美的意義を各個々性から誘導する事の可能は、

統一的源泉から乃至統一的源泉として、全存在を浸潤する美の種々相として解釋される。

ゲーテの質的個體觀とは、各個人が、唯一にして他人と異るものを熱情を以て尊重することであるが、これと彼が「一般人間性」に對して感じた同じく熱情を以てする尊重との間に在つた矛盾を除く形式原理はかくして畢に與へられた。此の「一般人間性」は、それが、價値たらんが爲めに、他者に對して何等の差別を要しない根柢的諸統一の範疇の一つである。その人間個體に對する關係は、神卽自然一般と一切存在個々體間に於ける關係を小規模に反復する。併しその爲めに個體的なものの價値が平均されるのではない。個體的なものの價値それ自體はどこまでも存在を保つ。その故は、果てしなき特殊化は破られざる一者、卽ち典型の生きる仕方であるからである。從つて個性の尊重と一般者の尊重は同一生の過程の尊重である。唯機械的見解のみが兩者を分離する。その故は、此の機械的見解にとつては一般者は、類似の諸特徴を分離する事によつて得たる一の抽象體であるからである――つまりこれ等の類似特徴は原子的な、分割し得るものとして並存するかの如くに考へるからである。上述の事こそ、特殊者のうちに一般者を見よとのゲーテの常に反復した要求の眞實の意味を開示するものである。「一箇の場合が屢數千の場合に値し、それ等一切を自己の裡に包攝する事を把握し得ない者は、自己の幸福と利益の爲めにも、他人の幸福と利益の爲めにも曾て何ものをも促進する處がないだらう。」 玆で重大な事は、皮相的特徴を共有する多くの諸現象がその中の一現象に依つて代表される事ではなく、彼等凡てに流るる生命の同一といふことである。換言すれば、各のものを全體の象徴となす創造的統一、從つて又各のものを他のものの象徴となす創造的統一といふことである。吾々がおそまきに觀察して分類したり、同不同を整頓したりする個々の特質が大事なのではない。而して上述の事の可能なる所以は、ゲーテが存在を生の範疇のもとに理會し、客觀的なる此の見方に依つて、個性的なものと一般的なものとの間の關係を擬人觀を用ひずに彼自らの生存公式に從つて解明するの權利を得たからである。ここに言はれた彼自らの生存公式とは、「汝等愛するものよ、予はかく自らを分與す――而も予は常に一者である」といふ言葉に現れてゐる。

第六章　辯明と克服

ゲーテはセルロに就いて言ふ、「彼は獨逸人である。而して獨逸國民は自己の爲す處に就いて辯明するを好む」と。この言葉は聽て彼自らの生活の決定的傾向に關する經驗を表明する。輪廓の大きい創造的な人物中で、自己を相手に決算し、その生活を一定の週期を以て明識し、その週期の明瞭な展望は、生活內容の何ものをも洩らさぬのが本然の探求であつた第一人者は恐らくゲーテであつたらう。此の事は極めて多樣な表現を取つて現れる。青年時代に於て彼はその作品に對し往々極刑を執行し、猛烈な自己批評を以て無數のその時までの制作を破棄した。更に此の極刑は精神的分類の形式で行はれた。彼は自己の生活內容の依存する諸範疇を搜し求めた。「予が心情を往來する新舊の事象は、いつか再び圖式樣に整頓せねばならぬ」とシルレルに宛てゝ書いてゐる。彼の生涯の一切の一身上の重要動機を總括する概念に於て自己の努力を述べて、「決して完了することなく反復圓成を期す」とある。此の言葉は、彼がその日記を更に編年紀 Annalen に纏めたといふ如何にも特殊の事實に象徵されてゐる。同樣な傾向で彼は青年時代から藝術作品を記述解剖する事を好んだ。彼は彼に印象を與へ、彼の發展に對して何らかの意義を有する一切に關して辯明せずにはおかなかつた。その注

目すべき例は Des Knaben Wunderhorn（註、ブレンターノとアルニムの蒐集編纂した獨逸民謠集）の中から採つた二百篇以上の詩を一々その特性を擧げ、その思想上の意義、その一般美的概念への依存關係を述べ、而も常に、彼の個人的印象の明暗に關して解明を試むる者の樣式を以てしてゐる。畢に晩年に於ては、これ迄の發展を總觀し、撰拔、整頓、刪除を以て此の發展に關する價値の決算を完結する爲めの停止點の役をなしたのは反復行はれた彼の全集出版であつた。――然らば此の傾向が明白に適入されてある一層廣く深い本質性との關係はどうだらう。

予にして誤なくんば、此の傾向に於ても亦かの唯一の偉大な理念がものを言つてゐる。此の理念は謂はゞゲーテの創造的存在を構成し、予が「主觀の客觀化」と名附けたものである。勿論いづれの藝術的創作作用も結局此の形式の下に齎される。けれどもゲーテの如く豐富な主觀生活を不斷に客觀的如實として客觀的範疇のもとに生活し構成した者のあるを知らない。彼以外の場合にあつては普通は强調が主觀の側面に籠つて、贏ち得た藝術上の收得も自我の直接な流露で、謂はゞ創作者には內面的體驗の境地を脫出しないものである。それとも、その反對にその收得が恰も單純な跳躍板の樣に主觀を越えて跳躍し、恰も內面的體驗と緣の無いものゝ如くに、その意義と內容とを獨存的客觀から採り來るのである。造形美術、文學、音樂、否一切の生活表現に於て專ら抒情的な性質と、專ら劇的な性質とが區別される。全體として觀察したゲーテの生活は他の生活に比して一層此の對立を克服した。而もその克服は、諸要素の最初から確立してゐる關係に由るのではなく、彼の青年時代の魔力的主觀から出發して、彼の老年期の均しく魔力的客觀に到る生きた發展のうちに行はれたのである。併し注目に値するのは、彼の內面の充實と動性とが唯一の直接性と直進性とを以て表現と生活形式のうちに流露した青年期に於て已に主觀の客觀化が提示されてゐる事である。絕對的な主觀が一の客觀的形像に構成さるゝ事に由つて主觀から釋放されるウェルテルの形式は、實にベーリシュに宛てたライプツィヒ時代の手紙の激越な調子のうちに著しく表れてゐる。最も激しい戀愛熱狂の最中に彼はベーリシュに宛てゝ「此の激しい慾望と、同じ樣に激しい此の嫌惡、此の狂暴と嗜慾は君に此の青年の眞相を傳へるだらう」と言ひ、又「予の大なる莫迦者であるは眞實である。併し又善良なる青年たる事も眞實である」と言つてゐる。それから稍後れて、廿歲の時に「予の情熱が好んで冗辯に流れる點は凡ての悲劇の主人公と共通してゐる」と言つてゐる。凡てかゝる若々しい大業な自己反映の裡にも遙に已に窺はれるのは、次の如き偉大なる格律である。卽ち、存在の全主觀性を超主觀界の範疇內に序列さるゝ客觀的實在として直觀し體驗する格律である。彼の最も情熱の激しい時でさへ、その本質と道程とを唯一正當なるものと考へる樣な、青年の典型的缺陷を有しなかつた。彼が何人をも獨自のものとして

その特有の方向を採る事を是認した點は、彼をして眞底から常に虚榮と嫉妬から遠ざからしめた特性である。廿一歳の時如何にも强く「己自らの感情と愛好に對する偏愛、自らの好む處に强ひて他人を忍從せしめんとする虚榮」を非難してゐる。他人の自我を自己の自我と均しき判定圈内に見た客觀性は、不斷の自己辯明の結果であると同時に因由でもある。

斯くして彼は、人類がこれ迄斷片的には勿論屢實現した事のある形式から、輪廓の大きい完全にして統一ある生活を可能たらしめる方法を造り出し、明白ならしめたのみならず、同時に理論文化と藝術文化とに新しき領土を開いたのである。吾々はゲーテを通して――少くとも獨逸に於て――初めて究竟の心的昵近事象(インティマーテン)を、抽象的及び詩的一般性乃至客觀性に高揚する事を學んだ。勿論、或る程度の微妙、錯雜、差別を提示する心的過程は、正さしくその性質によつて永遠に主觀の圈内に監禁されてゐるといふ考へは以前から存し、現在も尙幾分主張されてゐる。その考へに依ると、心的過程は唯體驗され得るに過ぎず、結局純個人的に表現され得るもので、客觀化せる精神への構成に堪えるには餘りに纖細なる性質を有するといふのである。然るにゲーテはかうして提說の可能圈を越えて深く上述の客觀領域内に突き進んだ。「汝何故に深きを見る眼を吾等に與へし」のやうな詩篇は、人間の表現の歷史に於ける絶對的な新事象である。感情の斯の如き究竟的昵近性が、詩的に、從つて羞恥心を毫も傷ける事なく表示される事實は、そのまゝ、これ迄主觀的に可能とのみ考へた事の客觀化が案外に可能なる事を示すものである。ウェルテルから始まつて彼の手に成る作を貫いてゐる一聯の深き内面生活に關する文章は正に此の消息を傳へてゐる。尤も此の點では佛蘭西の道義論者、殊にラロッシュフコーがゲーテの先驅者である樣に見える。けれども、委細に視察すると、これ等の道義論者は博識の域に止まつて、該切な眞理を含むにも拘らず、著しい實在性を有しない。その故は、思想家の本來の中心興味を構成するものは、彼等の言葉の源泉たる深みと廣さでなく、その言葉の齎すおちであるから。これとは極端に反對に、ゲーテに對して重要なのは、只管體驗内容のみである。而して此の内容が文章形式に結晶する事は、心裡の過程の有機的生長に依つて謂はゞ自ら行はるゝのである。併し、主要事項は、かの佛蘭西人に於ては一切は唯、心理的な意味を含むもので、結局左程深くない倫理的な評價を受くる位のものたる事である。然るにゲーテに於て感ぜらるゝは常に偉大なる相關關係である。心的事象は此の相關關係を心理的、卽ち意識内容の結合として有するのみならず、一切の存在生起と共に存在し共に生起する者として、卽ち世界と共存する世界要素として有する。彼が最も複雜な、最も微妙な心的事象に關して一般的事象を述べる際でも、それが心理的概括であるに止まらずに、生活一般を目指して居り、心的事象を抱攝するか乃至その裡に顯現する一層深い、宇宙的或は形而上的意

義を目指してゐた。彼以前に於て偶々箇々の類似の場合が見出されるかも知らない。併し彼以前には何人もこのたましひに最も昵近な微妙さと深さとに、この一般妥當な表現形式を與へなかつた。吾々が心的に價値豐な體驗を超個體的眞理と叡智との完全な宇宙（コスモス）に發展させる事は彼以來初めて吾々の精神的態度の一特色となつた。玆では、主觀の客觀化は精神的形成に關係するのみならず、主觀的心的事象は吾々の生存の規定として、存在として、世界意義を持ち、一般生活の一部、一運命乃至一負擔として、或は理念的な而も常に客觀的な全存在に嵌入さるゝ事に依つて客觀事象となるのである。そこで、此の一般化、客觀化に於ては、吾々の最も身近な最も個人的な事象に對してさへ、如何に崇高な「辯明」が含まれてゐるかは解說する要を見ない。その故は、吾々の身近な個人的事象は、かくして一つの法則を自己の上に置いたといふもので、此の法則が此の事象自體から流出したものであればあるだけ、又此の法則が此の事象自身並に、存在及び理念の總體に對する此の事象の關係にのみ妥當するものであるだけ、此の事象は、愈々嚴密に此の法則に對して責を有する事になる。ゲーテの生涯は隨分屢「藝術品」と言はれて來た。此の言葉で彼の生涯に最高の價値を附與したといふ考へは近代藝術家氣質の誇大狂に屬する。生は獨自の根源から生長し、その規範は自治的であつて、恐らく此生から初めて發生する如き他の構成の規範から導かれ得べきでない。卽ち、生は論理上の推理乃至數學上の計算であり得ず、又あつてはならぬと同程度に、藝術品であり得ず、又あつてはならない。一八二五年頃の彼自らの言葉に、自分は生活を美化するに過ぎない藝術よりも生活を高く考へるとある。此の「美化する」といふ言葉は多少突差に話頭に上つた表現であるにしても、要するに包括的理想としての藝術品の理想內へ生活を挿入することは斷乎として拒否される。尤も或る種の規範的形式は生活と藝術とに共通であり得よう。さうした時に限つてかの表現に局部的の正しさがある。卽ち、最も個人的生活に於て生み出される內面的過程が、藝術品に於て明瞭な存在の形式を得て、恰も此の過程現象が、事物の法則と理念とにのみ順じて、客觀的規範通りに生成したかの如き場合が、ゲーテの生涯に類似する。この主觀の客觀化に於てゲーテ自身の「錬成」の仕事が遂行される。ゲーテの全發展は「自己錬成」の不斷の過程であつたといふ事は屢言はれた事である。彼は晩年に於て告白して言ふ、「予は自らを教育する爲めに、本來常に主我的にのみ自然と藝術とを研究して來た。又それ等に關して予が書いたのも、自らの錬成を進める爲めに過ぎない。人々がそれをどう考へようとも、予にはどうでもよい事である。」此の言葉から已に四十八年も以前彼は此の消息に關して全く明瞭な考へを持つてゐた。卽ち彼はシュタイン夫人に宛てゝかう書いてゐる、「私の仕事ははかばかしく都合よく運んでゐます。勿論何ら重大な事も困難な事もありません。それに御承知の如く、私は萬

事を修練と心得て處理して居りますから、それが又私には充分な興味であるのです。」彼は、存在の一切の内容に觸れて自我の錬成を進める爲めに、此の内容を一切自己の内部に導き入れた。併し上述の如き「主我主義」には、何ら道義上問題とすべきものが附着してゐない。その故は、彼には、彼自身の完成は、恰度他人に對して要望された完成と同樣に客觀的な道德的任務であつたからである。自己錬成は彼にとつては決して、知識と能力の材料の取り入れを增大するだけの意味ではなく、それ等のものゝ扶けに由つて自己が益々「構成物」になる事、つまり、他人に對すると同樣、自己に對しても客觀的世界要求として對立する存在となる事を意味した。自己に依據する主觀的生體たる人間が、自己を世界要素として知る此の客觀的重要意義に到達するには、自己内部から謂はゞ自力ではなし得ない事を彼は充分知つてゐた。さうするには人間は寧ろ、先づ受容し施與する世界容器たらねばならぬ事をも知つてゐた。それ故に彼は、息みなく學び、息みなくいそしまねばならなかつた。又存在の客觀性に關與する爲めに、存在をして謂はゞ自己の中を通り拔けさせねばならなかつた。彼の主觀が世界材料で充さるゝ事の多ければ多いだけ、卽ち存在が彼の裏に反映する事の豐富にして忠實であればある程、此の主觀は益々客觀となり、此の客觀的存在そのものゝ血緣となつて配合されるやうになる。玆に「錬成」の二重の意味がその眞相を示す。卽ち、彼は修學、研鑽、制作しつゝ自己を錬成する事に依つて、所謂自己「敎化」をなした。換言せば、彼の主觀を一つの客觀的構成に形成した。此の構成は彼であるのみならず、形成された内容として自己に對立するものと見たのである。この崇高な意識は、先に彼が「主我的」修學に就いて述べたと同一つの意味で、彼の作を單なる一身上の告白と呼ぶ事を彼に許したのである。「予の作品は常に予の生活の苦樂を保管してゐるに過ぎない」と廿六歳の時に書いてゐる。――それから四十年後に、「予の誠實な觀察は予の生活痕跡の最新版で、それに名をつける必要から、人にはこれを著作と呼び慣らはしてゐる。」彼の主觀を客觀的なものと知る者のみ彼の客觀的成果を主觀的のものと呼べるだらう。それ故に、彼がやはり老齡に於て、外觀上以上の二葉と正反對の事を述べて、「予自らは抑ゝ何者だ、予は何事を爲したか、予は予が見聞し、觀察した一切を蒐集し利用した。予の事業は數千の異れる個性に依つて養はれた。無學者、賢者、有能の士、愚鈍の者、小兒、壯者、老人など予に彼等の思想、能力、希望、生活法を提供した。予は他人が種蒔ける收穫を屢集めた。予の事業は蒐集事業であつて、ゲーテといふ呼稱を持つてゐるのである」と言つてゐるのも上述の言葉とは毫も矛盾する事がないのである。

主觀と客觀の統一に生き、これを宣揚する事が彼の存在の形而上的意義を成すのであるが、此の主

觀と客觀の統一は彼の晩年に於て最高至純の圓熟境に達した。凡ての彼の思惟、態度に於て强調が全く方程式の客觀的側面に移つた後で、今やそこから更に主觀が最も包括的な意義を受け取り、又一般に知らるゝ如くに、最も客觀的な自然科學の研究に關する報告でさへも自叙傳的形式を採り來るのである。青年期にあつてはそれは一種の主觀化であつたらう。けれども今はその事がない。彼の主觀は客觀事象の焦點に過ぎない。彼は、自身にとつて一切の內容、一切の運命、一切の經驗を含めて、客觀的觀察體驗の對象であり――從つて又客觀的評價の對象でもある。例へば彼は、「人間の生れながらの」性向、卽ち諸現象をその實際の類似以上に似寄りのものと考へたがる性向に就いて、「予は自らの身に顧みて、屢この過失を犯した。」と言つた。又或る時は、全體の印象から出發して部分の觀察に進む自然觀察の傾向に就いて、「かかる自然觀察法は、それと正反對の方法と同樣、或る種の特殊の我流、否偏見を脫しない事を予は充分によく知つてゐる」と言つた。斯くして老齡に於ては、彼はその認識の主觀性を自發的に是認した――彼の認識の主觀性も亦彼には客觀的現象となつたのである。ゲーテ晚年のかの自叙傳的な調子は一般藝術家がその老齡に於て傾き易い告白の特殊の形式である。偉大な藝術家達の晚年の作が如何に屢告白であり、最も主觀的な心的中核の露出であり、その周圍には最早被覆も羞恥も存在せぬ所以は、主觀がその主觀性を脫却して、より高く豫感された、或は內部に觀照された秩序に屬する事を感ずるが爲めで、此の消息に對する例を擧げる必要を見ない。ゲーテは曾て言ふ、「老齡とは一段一段現象から退去する謂である」と。――而して此の言葉は、本質が外皮を剝落するとも解し得るし、同樣に本質が一切のあかるみから究極の秘密へ退去するとも解釋し得る。而して恐らく後の場合が眞であるからには前の場合も眞實であり得る。ゲーテはその一身上の存在を事物の自然並に理念と極めて深い統一に於て感じ、そして年と共にその深さを增す統一として感じた結果、凡ゆる自然科學並に藝術論上の報告が、一身上の體驗を物語るといふ風な樣式と調子とを取つて、恰度彼に新に開かれる凡ての關係事項が彼の內奧の發展の新しい階梯の觀がある。彼は此の晚年期に於て言つてゐる。「人間は世界を自己內部に於てのみ認知し、自己を世界に於てのみ認知する。熟れの新しい對象も委細に觀照せば吾等の衷に新しい機官を開く」と。而して唯、他の側面から見て、ゲーテが晚年自己の生活に向つて立つたその仕方が吾々の知れる最大な主觀の客觀化であるといふ點に此の最高の統一が示現される。その故は、彼が完結したと見做し得た過去が彼に純粹の像となつたのみならず、現在體驗されてゐる日も同樣のものであり、尙進んでは體驗の瞬間自體が彼には客觀的出來事であつた――それは同時的自己觀察、意識分裂の意味だけに止らない。此の意識分裂は彼に於ては屢全く成立せず、少くとも他の多數の人々より多くは成立せざるものである。寧ろ體驗の

内面的調子、卽ち體驗が主觀的に直接に行はれたその仕方が客觀相の性格を有したのである。彼が考へ且つ感じた事は、恰も日の出乃至果實の熟するのと均しき出來事であつた。彼は自我を、知る主體として、知らるゝ對象たる體驗に對立せしめたばかりでなく、最初から體驗作用が宇宙的出來事内に配置されてあつた。此の消息はマカーリエン（註「ウィルヘルム・マイステルの遍歷時代」に出る人物）の人物が恐らく絕對的な完成を以て象徵してゐる。ゲーテには、個々の生活内容が客觀的となつたのみならず、所謂生活過程自體がそれである。――彼は此の客觀相の爲めに最早對者の形式を要しなかつた。かうした嚴しい對立は、彼の自己の體驗の依所たる範疇から取り除かれた。此の範疇は、正さしく宇宙の出來事が悠々として輪轉す依所となる範疇と同一のものである。

併し此の統一は一見その根柢の深さと矛盾する要素乃至前提を含んでゐる。ゲーテの生涯を一貫して極めて早くから諦念の特質が終始してゐる。彼はそれに屢表現を與へ强調してゐる。存在全體が實在と理念へ配備整頓されてゐること、生が端的に献身し、自らを布施し、それによつて實際的秩序の規範が充足さるゝ事を確信すること、――かうしたゲーテの存在の根本公式は、止を得ない不斷の諦念、抑制及び克己の感情に依つて遮斷さるゝ樣に見える。彼の卅三歲の時の言葉は、直接にではないにしても、恐らく此の矛盾解決を暗示する。曰く「予はこれだけの事を君に確め得る、卽ち予は幸福の眞只中にも絕えざる諦念のうちに生き、日々一切の努力と勞作にも拘らず、予の見ることは、予の意志の行はるゝのでなく、一つのより高き力の意志が行はれ、その力の思想は予の思想ではないといふ事である。」茲では勿論諸要素は未だ解かれざる問題性のうちに雜居してゐる、卽ち自己の彼方に横る客觀的により高き秩序への隨順に促されるのを覺え、而もそれに達するには唯諦念の形式を以てするだけであるといふことを主觀的に意欲し感ずる狀態である。けれども、最も一般的な、彼の生涯を貫く意味での此の諦念の意味は、彼が此の方法を採つてのみ彼の主觀の客觀化に成功したといふ事に外ならぬ樣に思はれる。彼の生の强度、彼の生の直接な、祥不祥の流が對象化され得る爲めに、彼は不斷に自己を克服せねばならなかつた。自己克服と對象化とは二つの作用の並行ではなく、二つの側面から見た同一作用であつた。彼のたましひの一切の灼熱と急迫には、それが形式となり得る爲めに、夙に自己克服が與へられてゐた。彼の心にとつては、それが單純な主觀的生動を超踰して、自らに對して客觀となり、進んでは謂はゞそれがそのまゝ客觀となる事が完成であつた。而して彼の心がこれを達成するに不斷の自己克服、自覺を深める克己の形式に於てした。此の事は彼の生の分裂ではなくして生の完全に統一的な性格である。彼は、先に觸れた「錬成」「構成物への生成」を獲得するのに、客觀的な世界材料をいや增しに彼の一身の發展にこなし込む事に由つてなしたが、此の事が如何に嚴格な

る局限を要求したかを彼は後で充分知る樣になる。錬成は、有機體が自己に、その生長と同時に、その形式則限界を與へんとする有機體の秘密の精神的反射である。彼は七十歳でかう言つてゐる。「何れの錬成も一の牢獄で、その鐵の格子の傍を横ぎるものは立腹するだらうし、その牆壁に不快を覺えるであらう。又錬成の當事者、つまりその牢獄に幽閉さるゝ者も、窮屈な思ひがする。けれども結果は、實際に獲得さるゝ自由である。」彼の自然に對する關係も、彼の眞面目な熱心、ひたむきな迫進、同時に最後の秘密の前での停立、吾々に拒まれた不可測のものの存在に就いての確信等を伴つた献身と諦念との生活統一である。彼は自己脱落を以て自身の客觀存在を獲たのであるが、此の自己脱落は同時に自己除外である。即ち、主觀がそこに跼蹐する限り、自己を固執し、享樂を欲求する、さうしたものに對する棄權である。恐らくは、併しこれ等の生活價値は、内面的には反對の方向に結合されて居よう。恐らく自己克服と諦念とは――但し此の事は遠くから暗示さるゝに止るが――彼には、その道義的人間性の根本現象であり、予が、彼の主觀の客觀化と名附けた一切はこれに對する一結果、一現象、明白なる積極相に過ぎない――それは、此の諦念が決して禁慾ではなかつたから、此の諦念の特殊の價値の種類が表現さるべきものは一つの積極相を持たねばならない譯である。吾々は諦念に於て普通强調し、痛感するのは何より先に受苦といふ要素である。けれども此の感情反應はゲーテにとつては全く重大のものではない。「諦念者　とはその主觀的存在に形式を與へる者の謂であつて、此の形式を以て此の存在は社會又は宇宙一般の客觀的秩序に嵌め込まれ得るのである。或は方向を換へて見るならば、人間がその存在の單純な放流を超えて、自己を客觀として、世界要素として觀察すべき一つの形式をわが身に與へようと欲するや否や、諦念を行じねばならぬ。何れの形式も限定であり、限定の彼方にあるものに對する棄權である。而して形成に依つてのみ凡ゆる確實な存在、世界に適順する存在が成立し、此の存在は主觀に對立し、又主觀は自己を構成して此の存在となるやうにせねばならない。一定の事象に關係するなく、又何等の受苦もなく、存在の一般規定としてゲーテの生活發展を貫透した自制と諦念とは、彼の發展の最も一般的な公式の倫理的基礎乃至倫理的側面として呈示される。

此の事は恐らく倫理的見地からするよりも一層廣い生活意義の一般的見地から表現される。ゲーテの生活理想構成の楯となつた「存在の調和」は、決して餘義を容れぬ明白のものではない。それは極めて屢行はれる見解よりすれば、實際的、宗教的、理論的、感情的種類の理念を前提とし、それに對して人格の箇々の勢力と内容とが順應、促進の態度を採り、かくて生活は全體として一の理念的乃至實際的調子に整調さるゝのである。それが自制と諦念とを必要とする。何となれば、個體のあらゆる方面に延びる力と欲求とは、その行くがまゝにまかして、それとは別の理念から要求される形式を

持ち得ないからである。が、このやうに吾々の爾余の本質を拒否し制限することは全き意味で有機的拒否、制限ではない。といふのは、かかる拒否制限は深奥獨自の生長要件から發生したのではなく、その構成は全然與へられた個性から由來した調和ではなくして、どことなく此の個性には皮相的な理念から由來したものであるからである――よしんば此の「皮相」といふ意味が、深い內的結合融和狀態を除外する事が少いにしても、事情は變らない。然るにゲーテの規範に依る人格の調和は明かに別種の基調を持つ。彼の形而上的樂天觀には人格の調和は個體の素質から決定される。卽ち、調和は素質の完全な發展狀態に與へられた名目で、不調和相は――人間の所與相から觀て――萎縮偏倚のもの、充分に發展せぬもの、Entelechie の不完全狀態であるといふ。併し、これとても色々な意味で限定を意味する。第一、前の場合の如くに自我の或種の限定ではないが、自我への限定である。その故は、自我は雜多なる欲求、幻覺、不必要物に依つて取圍まれて居り、これ等のものは、內部から由來する眞我とは謂はゞその圓周上にからみ合つてゐるからである。元來これ等一切に依つて自己を伸張する樣に見えた眞我は、往々先づ彼自らの範圍に自れを限定し、一切を把握することを思ひ止まり、斷念に依つて始めて自我に到達することを學ばねばならぬ。ゲーテは繰り返し、「大概の藝術家は」「自然が彼の才幹に設定した圈外に逸出し易い」と言ひ、人は彼の爲し能う事に自己を局限する」事の稀であるを述べてゐる。そしてはつきり次の如く言つてゐる。「凡てに亘らんとする者は何物にもなれない。局限は、自己を有爲のものに仕上げようとする何人にも必要であると同樣藝術家に必要である」と。ゲーテの如く生活の規範を生活自體から獲來る者は、此の規範と內的調和とが要求する限定線をも生活自體からのみ抽き出し得る。吾々がそのまゝ吾々自體であり、吾々の內から湧き上る事をのみ爲すことは、決して自明なことでも、初發的なことでもなく、此の事こそ限定と諦念とに依つてのみ可能となるのである。併しながら、個人存在の調和といふものは、一切の所與の力の完全なる發展と共に生ずるといふ要求は、決して凡ゆる本能の暴漫な發揮を意味する譯でない。寧ろ各人は、多數者の協調が、有機的自己發展の統一の爲めに彼に課した局限を自己の裏に具へてゐる。玆に再度、截然たるゲーテの生活形式と局限の動因との極めて深い關係が橫つてゐる。一定の業績を上げんが爲めに自己を敎育せんとする者は、それに必要な本能と力との限定を謂はゞ外部から遂行する。故は、要求は生活自體ではなくして、外部から臨む理念である、此の理念が如何に生活と等位のものでもその事實は動かない。然るに、ゲーテの如くに自己の存在を敎育せんとするものは、かの一切の力と本能とを、唯次の樣な限定と形式とに局限するに止まる。此の限度と形式とは、上述の力と本能が、人格の全體に占める位地と人格の中心に對する關係に依つて決定されるに際して、謂はゞひとりでに獲る

ものである。かうした場合、自己局限はその至純なる意味に到達する。凡ゆる精力（エネルギー）、凡ゆる傾向が、かの過度を斷念するのは、一の目的の爲めではなく、それ等を支持する全存在の統一と完成の爲め、つまりそれ等自體の爲めである。この精力なり傾向なりの謂はゞ我執ともいふべき性質はさうしたものゝ本來の意味に悖るものであるのに、それ等を誘惑して過度に陷し入れようとするのである。斯くしてかの精神傾向の局限は正さしく本質總體の力と集中性から由來するので、此の精力、傾向の生長もそこから來たのである。それ故、ゲーテは或る特定のものに「成らう」とせずして、唯自分だけの完全性、自分の持つてゐる實在性を以て豫め描かれてゐた完全性に到達せんと欲した爲めに、彼の自己局限は、純粹に內部から決定された有機的過程であり、彼の自己敎育は、熱情乃至創造力と全く同樣自然的に彼の自己發展に隨伴したのである。彼は言ふ、「制約を夙く經驗する者は容易に自由に達する。時機が遲れて制約を强要さるゝ者は苦い自由を獲るに過ぎない」と――その故は、制約、局限、斷念は、人間を純粹なる眞我生活、卽ち「自由」に導く生活發展に最初から內在するを要する。若し制約が「强要される」際に、已に有機體が完結してゐるならば、制約は最早此の有機體內に根を張り得ずして、その有機體に對して、疎遠、不調和、「苦味」の關係のまま殘るだけである。

扨て彼の自己克服も一つの極めて普通な對象を持つた樣に思はれる。此の對象は、やはり一定の內容として現れたのみならず、謂はゞ心そのものから發展し來つた一般的、方式的狀態として彼に感ぜられた對象卽憧憬がこれである。彼が恐らく第一に知つたのは、憧憬は吾々の本質一般と結合した機能で、吾々は「これから離れ難い運命にある」事であつたらう。彼自らの告白に依ると、彼の性質內には元來此の憧憬性が過量に存したので、彼は年齒を積むと共に「力强くこれを征服せん」と努力した。けれども彼が此の戰を行ふ仕方は彼の生活の總傾向と密接に關連してゐる。上に引用した箇處を全部擧げると、「人間は憧憬から離れ難い運命にあるから、若し此の憧憬が一定の目的物に向うならば好ましいことである」となる。彼が此の言葉で意味したのは、憧憬は到達可能の物象のみを目指せといふのではない。寧ろさうなると憧憬の本質が否定される事になり、やがては憧憬は單に一片の合意志的思慮に墮する事を彼は充分知つてゐた。「詩と眞實」の草案中に「何人も、たとひその所有する處如何に多くとも、憧憬無くして生存する事が出來ない。併し眞の憧憬は到達不可能の物象に向つてゐねばならぬ。予の憧憬は造形美術に向つてゐた」とある。卽ち彼が薦めてゐるのは憧憬を唯理論的に局限することではなくして、唯その時々に「一定の目的物」に結びつける事である。彼は此の憧憬を心の典型的方式的機能として發見したからには、それが凡ゆる物質的滿足以上に長い生命を有すべきが當然である。如何なる心的精力も純粹に、謂はゞ自體內で空廻りさせずに、その一々の心的精力に

對して聯關、相對像、支點を客觀世界に求むる彼の偉大な生活動因、卽ち存在一般に對する彼の主觀相の全均衡、調和的、有爲的全關係の基礎たる此の動因は、此處でも截然たるものになつた。憧憬の如き情緒が主觀の最深處から涌いて彼の生活の基本的機能として彼の內部にひそむ場合でも、若し客觀的存在から彼に向つて一の目標——よし到達不可能でも——が現れなかつたら、彼は此の主觀を自ら破壞したらう。彼はそれ故如何にも際立つた調子で、「誤つた官能的傾向も觀念的憧憬として表現される誤つた傾向よりはまだしも有利な一種の實際的憧憬である」と言つてゐる。眞實の憧憬は、よし世界が之を充足せしめる事が出來ぬにしても、尙且つ吾々を此の世界に結びつける。然るに觀念的な憧憬は吾々を世界から引き離す。それは此の憧憬が純主觀的狀態に留まり、從つて言ふ迄も無く此の狀態を、絕對への努力として感じ且つ描寫する。謂はゞ客觀的に與へられた世界を飛び越えて感じ且つ描寫するからである。

茲に恐らくゲーテの浪漫派に對する嫌厭の最も深い原因が存しよう。此の派に對する彼の關係を出來得るだけ積極的なものとして說明し、彼が浪漫派から決定的な影響を享けた樣にいふのが屢當今の行き方である。併し諸種の文獻は決して此の傾向を立證せぬ樣に思はれる。彼が浪漫派から享けたものは唯偶然に此の派と結びついてゐるに過ぎない。浪漫派は特殊な生の强調を以て精神史を豐富ならしめたが、此の特殊の生の强調はゲーテには全然「誤れる傾向」であらねばならぬ。予は此の强調の施されてゐるらしい點を、先づ極く一般的に且つ際立たぬ樣に言ひ表はして見る。卽ち、浪漫派は生とその全相、否體驗世界一般を心の上に置かうとする。浪漫派はカントの觀念論の抒情化である。從つて勿論ゲーテの傾向と相反する。浪漫的精神は物象の一切の個性的多樣の中へ謂はゞ潛り込まうとする。それによつて、現實からその特有權を掠奪する。その結果現實は一方では浪漫的精神の單なる手段となり——此の消息は享樂に向うその强い傾向に現れてゐる——他方ではその單なる對立者となる——此の事はその特殊の「イロニー」の本質を形成する。けれども茲で心が自體內で跳躍するその强さこそは、その運動を自體の外部へ導き、而も、或る確定的なものとしての個々物象へではなく、無限或は絕對へ導く事は容易に理解される。心自體は——それが一切有限者のアプリオリであるが故に——無限者であるといふ事は、心が無限者を宗敎的或はその他の仕方で理解するにしても、心の唯一の實在的對手を無限者に於て感ずる點に表現される。扨て浪漫的精神は此の無限者に對して直接の關係を求める。これが浪漫的精神の生活感情本來の核心である樣に予には考へられる。此の核心は二樣の結果を生み出す。その兩者共均しくゲーテの價値强調に反對する。先づ一方では眞に深い內面的無形式が姿を現す事である。抑〻一切の形式は限界であり、從つて有限である。形式は、それ自體無形

式の主觀と、主觀同樣形式を具へぬ無限者との間に立つ。それ故に、形式はその完全なる場合、卽ち偉大なる藝術、眞理となれる思惟、道義的に構成された行爲等に於て、主觀と絕對者との眞の仲介者である。ゲーテが生活に依つて敎示された事――或は少くとも古典藝術と科學の影響以來敎示されたと信じた事――は、かの兩者、卽ち主觀と絕對者との直接の關係は誤れる理想であり、有限有形のうちに生くる知と行とがこの兩者の中間に入り來らねばならぬ事であつた。浪漫的精神には表面的には完成した形式に如何程執着して居ようとも、それが生の中心に置く主宰的主觀性は、無限者に對してのみ最も密接な最後的關係一般を持ち得た。從つて限界のある、換言せば、形式を有する個々物象といふ中間階梯、それに對する尊敬とそれに就事する仕事とを跳び踰えねばならなかつた。浪慢的精神はゲーテが最後に彼の存在の決定的な價値意義を發見した範圍の恰度兩側に在る點に根據を据ゑたのである。

次は第二の結果の件である。これは吾々にとつて一層重大なものである。無限者或は絕對者に對するかの仲介なき關係は、宗敎上の神秘に於けると同樣、浪漫派には、獲得された所有を意味するのではなく、卽ち所有と絕對者無限者との渾然たる融合を意味するのではなく、謂はゞ憧憬の階次に低迷してゐるのである。而もその理由は單にかの目標は僅かに庶幾的に到達し得る爲めのみではなく、此の階次が固定的なものとして、卽ち逆說の觀があるが――自足的のもの、浪漫的精神の自然の持續狀態として感ぜられるからである。「憧憬」は浪漫派の特有の情緒と考へられる――殊に浪漫派の特殊の傾向の爲めに「觀念的憧憬」と考へられる。「憧憬」は浪漫派の特有の情緒と考へられる――殊に浪漫派の特殊在する知り、これを摑まんと欲する場合、憧憬は心の全豹の不可避的な中心的表現である。偉大な最後の浪漫派作曲家なるローベルト・シューマンは彼の音樂の樣式のうちに、恐らく最も純粹に最も優秀に、憧憬は浪漫的精神にとつて飽くまで情緒の一點である事を示してゐる。かかる雲を摑む樣な憧憬こそゲーテが永い勞作を以て克服した所であり、かかる憧憬こそは、若し知行が無限者に對してその架橋とならぬならば、心の澁滯する箇處となるのである。洵にゲーテは多くその比を見ぬ程に憧憬を悉知してゐる――伊太利へ旅立つ前にはこの憧憬の爲めに殆んど破滅に瀕した位である。が、此の場合伊太利こそは彼を救濟したのである。――此の伊太利が後になつて、浪漫的諸感情の育成地となつたのは感傷的な誤解に坐するに過ぎない。常春藤の生ひ纏はる山上の廢墟、ほの暗い扁柏の杜にある邸館、昔の榮華を語る荒址の如きがそれである。けれどもゲーテは、これ等一切には何等浪漫的なるものが存しない事を正しくも理解した。その故は、此の地には何の憧憬も息づかずして、理念或はその他のものを先づ「憧憬する」樣な事のない實在、形式、現存が事實決定的に存在するからであ

る。ゲーテの生涯の眞髓は大部分明かに憧憬の克服であり、對象を伊太利に求めて、憧憬から自己を脱却せしめた事であり、無形式と謎めいた絶對者への無益な凝視で吾々を脅威する此の恐るべき生活要素をさへも形式化する事であつた。彼が自己の憧憬を向はしめたと主張したかの「一定の目的物」は彼をかかる問題から解除し、此の情緒をも實行と認識とを目指す彼の生活發展法則に從屬せしめた——而もその爲めに此の情緒のうちにある力が痲痺され、失はれる事がなかつた。かうして憧憬は克服されると同時に有益なるものに變へられる——それ故にこそゲーテは、かの憧憬内に蹟躇してその結果これを有意義のものたらしむるを知らぬ浪漫派に慊らなかつた。心は決して自體内にのみ旋回すべきではない。自體内の旋回は心を直接に無形の絶對者に渡すものである——茲で吾々はゲーテ自身からは只仄かに暗示されてゐるに過ぎない深く闇い連絡に直面する。——憧憬は此の無形の絶對者の中へ沈潛する事は出來るが、扨てそこからは何ものをも贏ち得て歸る事は出來ない。それは結局加特力教のみが僅に浪漫派の人々に提供した境地である。彼等がそれに據る事の出來た所以は、加特力教が獨特の仕方で無限者に對する直接關係と媒介に由る關係とを結合したからである。勿論ゲーテは「何人も憧憬なしには立ち行けない」事を知つて居た。けれども憧憬はかの自然力に比すべきもので、此の自然力を人間が彼の價値の組織内に嵌入し得るには直接では不可能で、唯轉置を以てのみ可能である。それ故彼は臨終の間近に、明瞭に浪漫派に向けたのではないが、それに由つて教育された萎微憔悴せる青年を注目して、再び論駁を次の樣に纏めてゐる。即ちかかる青年からは「憧憬は飽くまで萬象の最後のものと賞讃される。」此の言葉は決定的のものである。憧憬は「最後のもの」であつてはならない。換言すれば、心は、正に絶對者に對する直接關係を知る爲めにのみ自體内で跳躍すべきでない。心は全體としての存在に屬するから、認識と實行を以て、此の存在に一つの關係を獲得せねばならぬ。心が、かかる限定し形成する「決定性」を以てのみ、自己並に無限者に到る眞實の途上にある事は心的生命の究竟の秘密である。茲にゲーテが實踐によつて生活問題を解決したその究竟の解決の一つがある。即ち、生活と共に與へられ、而もそれ自體では尙空虛な單なる力としての憧憬を克服し、此の憧憬を「決定」する事が肝要である。而して此の事は恐らく彼の生活の最も深い自己克服であると共に、此の克服は彼の生活の模範的な調和を示した。その故は、此の自己克服は物象と形式の世界を相手にする勞作に由り、又思想と業績に由つて完遂されたと共に彼の心は正さしくその爲めに絶えず自己に立ち還つたのである。

ゲーテの生活は最高の、寧ろ形而上の意味で「現在」であつた。彼は人間が「わが周圍を見廻はす」べき唯一場所である。「此處」に生活したと共に「今」に生きた。「此處」と「今」とは彼の沃土

である。以前に言つた事に對して矛盾が指摘された時、毎日毎日前日と同じ樣な事を言ふ爲めに、八十迄も年を重ねはせぬと答へた程に小息みなき發展そのものであつた人物が、現在を措いて如何なる點に住むべきか！　彼の未來に對する克服關係は憧憬を心的對象としてゐた樣に、過去に對する克服關係は追憶をその心的對象とした。ゲーテが大健忘家であつた事は一般の定論で、過ぎ去つた事とは絶緣し、吾々の行爲の結果が齎す一切の面倒を平然と剝ぎ棄て、一切の回顧、低回も、それが前方への展望と前進とを妨げる傾向があると見れば直ちにこれを避けるのが彼の態度である。世間でよくつまらぬ苦しみといつてゐるものからゲーテが完全に解放されてゐた事は――つまらないといふのは大概の人間の生活目的に取つてそんな苦しみはなくもがなであるから――一方では驚嘆の重なる要因であり、他方ではゲーテの「生活術」に見られる道德的冷靜の重なる要因である。けれどもゲーテに上滑りな一面があつたと强ひて解釋したものも此の事實によると思ふが、かかる解釋こそは寧ろ上滑りと目さるべきである。それは全く反對に、ゲーテは過去の事柄に極めて深く惱み、多くその比を見ぬ程、彼の行動の結果が彼を縛り、彼の重荷と感ぜられたと予は信ずる。一旦呼び出した以上は絶緣し難い靈のモティーフが不斷に彼の思想の世界を貫いてゐる。吾々は第一者を免れても第二のものの奴隷となる。デーモンは「容易に絶緣し難い」、卽ち「精神の强き絆は絶ち難いものである。」彼はローマから書いてゐる。「屢追憶の予を寸斷する事は恐ろしい」と、又四十餘年後に、「自分のものは、どんなに投げ棄てて見ても、手を切る譯に行かないものである」と云つた。「假裝行列」の或る場處で靈に就いて下の如き句がある。

「――彼等をば時を移さず逐ひやらずば
　去りは行けども、或者は
　何處かの隈に身を寄せて
　げにも靜かに構えはすれど
　あや憎の時を計りて現れ來る」

彼が曾て立證も推論もなく箴言めいた調子で次の如くに書いた言葉も同一の響を傳へてゐる。曰く「吾々は凡て過ぎ去つたことで生き、過ぎ去つたことの爲めに破滅する」と。從つて「好もしい生活を建設せんとするならば、過去を顧慮する勿れ」といふ「生活規律」は大概の生活規律と同樣、その反對の苦き經驗から發生したものである。ゲーテが自身の生存を手輕に「好ましい生活」と名附ける積りであつたと本氣で信じる者があらうか。此の樣な多くの表現は偶然ではあり得ない。それが詩作中に含まれてゐる場合でも、その周圍に分在して寧ろ特殊の性格を持つてゐる。それはベートーヴェン

に於て多數の階調乃至拍子に見らるゝ如き特殊の性格である。即ち各拍子は、完全に曲の所謂客觀的關聯に依存して、その曲の純音樂的理論に依て充分に理解され又必然的である――而も同時に、全く趣を異にせる他の面、即ち主觀の面を暗示してゐる。各拍子が唯その前後の音節の爲めにのみ存在する樣に見えつゝも、猶且つ恰も下と內からせり上る樣にたましひがその拍子の中で叫びを上げる。此の拍子は同時にそれを通して結ばれる純藝術的音樂的持續性へ一箇の孔を穿つ。その孔を通して吾人は直接にその下に生動してゐる藝術家の惱みを覗くのである。ゲーテに於てもかかる箇處は同樣の働をなす。即ちその各箇處は勿論藝術品全體に於て、その必要な役割を演じてゐるが、同時にそこには藝術以外の體驗が覗いてゐる。而して彼は、未來が憧憬の形式で彼を捕えんとした係蹄乃至搦釣に對して絕えず爭つたと共に、過去から脅威する類似の危險に對して爭つたのである。玆で彼のすばらしい天性が、何よりも過去を現在化することに依つて克服する樣に見える。彼は愛した女性と絕緣して久しい後で再會を欲する不思議な衝動を持つてゐた。ソリーデリケ然り、リリー然り、而して次の告白は此の事實に照應する、曰く「愛するもののわが前にある事は、どれほど、空想力からその破壞の力を取り去り、憧憬を靜かな觀照に變へることだらう。此のことに就いては予は極めて重要な例をいくつか持つものである」と。蓋し無類にはつきりした想像力を具へた此の人物には、その想像の限界が往々幻覺に沒入する觀があつて、過去の姿は「デイーモン」、「靈」の形で生き、その惱ましい現前から免れ得ないのである。併し靈に對しては現實を除いて外に手段が無い。幽靈の姿で吾々を脅すものから吾々を救濟するものは時にはやはり幽靈そのものであつて、それは、吾々が現實の形でそれに立ち向うと同時に出來る。彼は既に廿七歲で書いてゐる。「予は實際の事ならば大概は可成りに忍ぶ事が出來るが、夢想は容易に予を氣弱なものになし得る」と。ゲーテの生涯を貫く不斷の直觀慾は、彼の藝術性の表現に止まらない。此の藝術性は世界を直觀するに當りて再度世界との統一を謂はば官能的に完遂する。此の世界との統一は天才の形而上的本質を成すものである。彼の直觀慾は、同時に內面の暗き力に對する對抗力であり、過去の陰影を解體する現在の光であつた。現在に由つて追憶を癒やす此の特殊の方法を除いても、彼は勿論多くの場合、單純に力强く過去から面を背け、顧慮する事なく、又外觀上無感覺の態度で自己を過去から解放した。彼はこれを必要とした。齡を重ねるにつれて此の事は彼には、謂はゞ有機的機能となつた。かくして彼は高齡になつて、見た處輕い調子で次の如く述べ得た。即ち　吾々が歡びは適度に追想し、惱みは殆んど追憶せぬ樣に一呼吸每に大氣的レーテー(忘却の川)の流が吾々の全身を浸透するを思ふがよい。予は此の尊き神の賜物を、以前から尊重し、利用し高昇する事を知つてゐた。即ち運命、愛人、知友或は敵手が吾々を試す爲に與へた打擊に就いて云謂され

る時覺悟のよい善良な人物にあつては、かかる事の追憶は疾の昔に吹き消されてゐる」と。此の言葉を、冷淡な、快樂論的な利己と宣言するのは此の上なき皮相觀である。彼の體驗の激動は、此の體驗の追憶と將來への波動とを抑壓した。世人がこの壓迫を見脫したのは、唯異常な對抗力のみを注目した爲めである。此の對抗力は彼の創作に於て、卽ち鬪爭の明白な結着に於て勝利を獲得したのは勿論である。停止する事なく新しき客觀的活動、新しき主觀的自我構成に躍進した此の生涯は凡ゆる瞬間に於て全然生活自らであらねばならず、全然生活の現在であらねばならなかつた。彼が憧憬と追憶——恐らく吾人の大概の者に於けるよりも迫かに動搖激しく、誘慾的であつた——を離脫した事は最も偉大なる自己克服であり、未來及び過去の形に於ける自我に對する勝利であつた。此の勝利は又此の自我の本來の、最高にして創造的生活の形に於て自我の爲めとなつたものである。

彼の生存の自己限定、自己克服は、追憶と憧憬とに於てその最も持續的な問題を發見したのであるが、此の自己限定、自己克服は自身に關する彼の不斷の辯明と不可分離的に融合してゐる——此の事に關して一言を以て暗示すれば足りる。他の如何なる概念も、此の概念程に理論的客觀的形像を道義的評價と結合するものはない。自己辯明とは自知と自己批判の統一を實現する事であり、限界から自己を見る事である。その限界以內で吾々は滿足すべきでありその限界のかなたに斷念が橫はる。彼の主觀を一の客觀として觀照し體驗せんとする形而上的根本意志は、自身に關する辯明に於ける以上に深く完全に彼の倫理的緊張を反映する事は出來なかつた。自らの實存の意識、限界の意識——此の限界の嚴格な節度は生活に價値と形式とを決定したものである——は此の自身に關する辯明のうちに、一生を貫ぬく行爲を以て完遂された。」

第七章　愛

ゲーテは、その性質の根柢から女性と關係を有する男子の類型に屬して居る。併しそれはそのまゝ愛の熱情と經驗との特別な伸張を意味するのでない。女性に對する實際關係が體驗の前景にあるといふ樣な二つの類型、女性の奴隷型及びドンファン型からは、ゲーテは遠く隔つて居る。女性が彼の存在の織物の中へ結び着けた糸は、たとひ全然斷ち切られた事は曾て無かつたにしても常に只一筋に過ぎなかつた。併し彼は最も強く力を込めて、非難したのは、或る生涯が全く女性との關係で充たされる事である。此の事は戀て「吾々の氣根を消耗せしめる過度の紛糾と苦惱に導くか、或は完き空虛に到らしめる」と言つてゐる。斯くして、或る種の男子にあつては、かかる實際關係と係はりなしに、女性に就いての特殊の智識が成立する。彼等に對する女性の本質の形像と意義とは謂はゞ彼等自身の性質の一要素である。ニーチェは、一般に知られてゐる限りでは、曾て戀愛關係を有せず、又彼自身の告白によるも、「一度も女性を獲ようとして努力した事がなかつた」と言つてゐるが、同じ場所で言つてゐる、「私が女を知つて居るといふ想像を敢てする事が出來るならば、それは私のディオニソス的な天賦によるのだ。」又これと同一の根據から、ラファエルは、彼の凡ての美しい女性の姿のモデルを

一體何處から採つて來るのかといふ問に答へて、彼はそれを全くモデルからは採らず、「自分の精神に生起する一種の理念」を使用したのだと言つた。同樣にゲーテは頽齡に於て告白してゐる。「女性に關する私の理念は實在の現象から抽象されたのではなく、それは私に生れ着いたものであるか、或は、理由は分らないが、私の心に自ら生起したものである」と。彼が現實に於てまのあたりに接した女性に對して、實用心理學の意味で女性通であつたとは私には到底確實とは思はれない。彼が凡ゆる深みと目醒しい眞實とを以てその藝術的形相を描いたロッテ・ブッフに對して、決して「注意を拂つた事が」ないと告白してゐる——さうするには彼は餘りに彼女を愛してゐたのだ。又彼が四十餘年後にオッティリー・フォン・ポークウィシュを息子の嫁に選んだといふ事も、心理的眼光に著しく缺けてゐる事を暴露する樣に見える。此の最も愛に惠まれ、そして殆んど絶え間なく戀愛に動かされた人物が、それにも拘らず、戀愛に於て本當の幸福を享受する事が極めて少かつたとするならば——彼は八十年の生涯を回顧して、運命と「愛人とが吾々を試みた打擊」に就いて語つてゐる——さうしたならば、此の事は、吾々が後に檢討しようとする彼の本質の他の深みに基く外に、彼の女性知の此の實際的迷誤にも基いてゐる。此の種の人物は、實際に於ては女性に關して何らの著しい觀察眼を具へて居らぬ事を常とする。寧ろ女性の「理念」が彼等に「生れついて」ゐる。卽ち「根本形態」の知識が生れついてゐる。此の「根本形態」とはゲーテが凡ゆる有機體に於て洞見し、且つ「現象界に於ては單にその例外が示されるに過ぎない法則」と名附けたものである。

されば、個々の現象を越えて飛躍詩的表現には、女性に關する此の知識は或程度天與のものである。それ故にこそ、ゲーテは此の知識を以て、彼の女性人物は「總べて現實に於て見らるゝよりも好い」といふ事を立證する事が出來た。勿論ゲーテの多數の女性に於ては一種の完成の型があつて、これは彼の男性人物には絶えて見ぬ處である。それは特殊の表現と性質との彼方なる實在的完成である。凡てのこれ等の女性、ロッテ、クレールヘン、イフィゲーニエ、王姫（註、タッソーに於ける）ドローテェア、ナターリエ、その他猶多數の女性に於て、吾々は此の分解し難い、又個々の點では全く理解し難いそれ自體に於ける完成の特性を感受する。此の特性は同時に永遠性に對する關係を意味し、且つ吾々を牽引する永遠の女性に於て謂はゞ概念的な表現を見出してゐる特性である。

それ故彼が常に女性を非難して、「何等理念に堪える能力がない」と言ひ、それと同時に女性の人物に於てのみ理念を盛る事が出來、女性は彼の理想を鑄込み得る「唯一の容器」であると言つたとしても、それは決して矛盾ではないのである。女性が何等の理念をも「持つて」居ないといふ事は、女性がゲーテにとつて理念で「ある」といふ事を妨げない。明かに彼は個々の經驗上の女性に於て理想

を見る事が出來なかつた。併し彼の内に生き、而して勿論又かの實際上の、不完全な女性の最後の意味と規範である類型女性は、彼が曾て言へるが如く、飽くまで、吾々が黄金の林檎を盛る白銀の盤であり得る。而して此の比喩は、女性に關する彼の直覺の中核であるやうに思はれるものを象徴してゐる、――卽ち女性は、かの特殊の興味に集中して、せいぜい自らの内にその全種屬の雜多性を反復する男性に比して、一層まとまりのあるもの、自らの内に一層統一のあるもの、謂はゞ一層統合的なものである。それ故、女性はその形式的構成上、かの「完成」に對してより一層強い性向がある。故に、彼は次の如く述べて、女性を最もよく賞讃したと考へてゐる。「お前達の愛向は常に生々として活動的であり、お前達は戀愛をなして怠慢であり得ない。」此の根本形式は、ゲッツの中の女性からイフィゲーニエ、ナターリエを經てマカーリエに至るまで、あらゆる彼の女性人物に對して、一樣に當嵌り、これ等の人物は此の根本形式を雜多を極めた内容で充たすのである。卽ち、此の形式は男性ならば分け隔て又は屢闘爭の中に於て示す諸要素の内面的和解及び本質の統一である。それ故、オッティリーは彼女を死の淵に齎した彼女の罪障を、その直接の内容を以てせず、たゞ「私は私の道からそれました」と述べるに過ぎない。而して此のことは、内容には非常な隔りがあるとは言へ、女性の嫉妬に就いてのゲーテの説明を立證して居る。曰く、「各女性はその性質上他の女性を排斥する。何となれば女性の全種屬に果す樣に負はされてゐる一切事が、一人一人の女性から要求されるからである」と。

かくして女性に對する彼の精神的態度は、彼のその時々の發展期が、女性存在の完成さるゝ統一形式に對して有する關係に應じて變化のある事が理解される。ゲーテが紛糾錯綜の流れをなしてゐる混渾たる諸努力を心に抱きながら明かに彼の力を組織立てて唯一の流れの方向に導かんと、明白に、熱情的な欲求を以てワイマルに來た時――フォン・シュタイン夫人に對する彼の關係の最後の深みが彼に提供した幸福と豐富とは實に正さしく彼女の性格の調和的統一と結び付き、又彼女が一切の偏倚不調の生存要素を調和せしめた落ち着きのあるしつかりした形式と結び付いてゐた。彼女は一切の異常にして不調音の生活要素を此の形式の中へ融和した。彼女が示したまとまりのある全體の此の形相は、彼の性質の一切の野性、分裂に解決の道を示した。彼は明瞭に此の事を述べて、獨立完全なる者となる爲めに彼女を要したと言つてゐる。ミケランゼロがビットリア・コロンナに於て見出しと同樣、シュタイン夫人は彼には完全、統一の象徴であつた。彼は彼女に宛てゝ書いてゐる、「あなたは、私が何事をも添へる事を要せずして而も一切を見出し得る唯一の方」と。それ故に、ゲーテが夫人から與へられた幸福として讃へたのは、「お前身に於て悉く響く中音が」他人に於て缺いてゐるの

で、彼女に對してのみ充分に胸襟を開き得る事であつた。シュタイン夫人に於ては、彼が女性の最深な本質性と感じたものが、他の場合に於ける斷片的な實現の彼岸にある完成の姿で彼に立ち現れた樣に考へられた。而もそれは、彼自らの發展が此の生活形式に於て支柱と模範とを要する時期に起つたのである。然るに彼の年齡は女性原理に對する此の內面的關係を變化させた。彼の壯年期に於ては一般に女性に關して種々批評的な非難の言葉に接する。此の非難を委細に觀察すると殆んど悉く所謂女性の客觀性の缺乏に歸着する。而して此の事は恐らく次の事と關係がある。卽ち、ゲーテの靑年期は——玆で予は前章の結論を豫め借用するが——感情的色調の理想に支配されてゐた。彼は、人格的存在の端的なる完成と自己の全體性の完成とに欲求を感じた樣に考へられる。而してこれ等のものの意識は知乃至行ではなく一の感情であつた。此の生活傾向は後で二方面に分離した。それが伊太利旅行後では全く截然たるものになつた。卽ち、科學的認識への沒頭と創作活動に於ける實證である。かうして彼の生活は主觀から客觀へ向けられた。此の事は普通ならば男子に特殊なる人格分裂を伴ひ、內的存在の中心と統一から個々の興味と作爲とを遊離する結果になるのであるが——ゲーテには、彼の思惟行動の一切の客觀相は全き個人相として止まり、統一的內奧の生活の脈搏たるを失はぬ運命にあつた。その完成狀態に於て唯一である存在形式から、彼の後年に於て凡ての單純なる主觀主義に對するかの激しい嫌惡が現れる。かうした嫌惡は吾々が屢自己の克服し了つた發展階次に向けるものである。彼の內面的生存の本源的で、而も漸く贏ち得たばかりの統一は、今や世界知と世界活動の具象的內容に充たされ、これに對しては、單純に主觀的で、自體內に旋回し、客觀的規範を拒否する存在は彼には謂はゞ惡原理と考へられた。類型女性は、それが彼になし得た事をなし了つた。殊に、シュタイン夫人の姿で、明白な純粹さを以て逢着した以降は左樣であつた。而して今や主觀的統一と全體性とは彼には自明の狀態となり、此の狀態から客觀に對する偉大なる轉向が、新しき內容と緊張とを以て充たさるゝ事を要求した。かうなると類型女性は最早彼を促進し得なくなつた。それ處か、踐み越え了つた時代の象徵たる此の類型から斷乎として離れねばならなかつた。それ故に、彼は反復して女性に對して客觀性の缺乏を非難した。此の客觀性は新しき時代が彼の爲に獲得したものである。例へば、女性には何物かが「氣に入りさへすれば」それで充分滿足なので、彼等はその快適の動因を區別し評價する事がない。彼等は他人を理解しようとはせず、そのくせ、自分だけが特別に理解される事を要望する。或は彼等は容易に一の立脚點から他の立脚點へ誘惑され、苦しむ場合には自分を責むるよりも、相手を非難する、而して此の主觀性の必然的補ひとして獨斷論者の犧牲となり、單純な因襲に身を賣渡す等々と非難してゐる。

彼の女性に對する精神的關係と評價は、その變遷の跡を辿れば、正確に彼の發展の偉大な線に附隨する。此の事は彼には、女性の姿が決して經驗的偶然の場合から抽象したものではなく、彼の最後の根本性質に附着した超個體的のものであつた事の原因であり、結果であらう。處で此の關係、評價は類型、卽ち女性の理念に關してゐるから、決して確定的に又一貫して、ゲーテの女性相手の一々の實際經驗とは關係がない。これ等の實際經驗は、予の想像する處では、女性原理に對するかの精神的先驗的關係から發生したのではなく、純粹に彼の惚れつぽい性質から發生したものである。此の實際經驗が此の惚れつぽい性質から由來したその程度は、多くの人々の目には、彼の生涯の精神性と殆んど一致せぬのは勿論である。

そんな譯で予は、これ迄再三、精神的に充分教養もあり、陳腐な野暮を脱してゐる人々の口から、ゲーテの生涯に於て戀愛要素の演じてゐる役割を嘆く聲を聞いてゐる。それは元來道德的非難の意味ではない。唯彼の中心理念が決定すべき筈の生活の均衡が戀愛的興味及び經驗の過度に依つて障害さるゝかの如き見方からである。かうした見方には、立派な統一を持つた創造的生活も悉く色情力の方面から脅威する危險に陷り易いといふ事が現れてゐる。といふのは、此の色情範圍に於ける憧憬と成就とは生活の最內奥の過程の中へ織り込まれるか、（その場合には生活に障害、逸出、壓迫の來る事は殆んど避け難い事で、殊に次の如き深き內面的形式對立に由つて避け難い。それは愛は息みなき過程であり、生活の脈搏つ力動であり、種屬保存の不斷の流へ卷き込まれる事であるのに、精神的存在は或る意味で時劫の外に立ち、生活過程の內容の上に立つて、過程そのものの上に立たぬのである。）それとも色情圈を一種特別な領域としてこれを他の生活範圍から區別するかの二つの一つであるからである。而して此の色情圈に身を委ねる場合には、謂はゞ「人が違ふ」といふ事になる。成程その論法で行けば、かの障害と激動とは除かれるが、併し生活の全體性がぎこちない二元論に宣告され、一切の力の統一の所在たるその交代が切斷され、少くとも一部は生命を失ふ。

かうした見方はゲーテに於ては一つも肯綮を得ないのは明白である。彼の作の偉大さに對しても、全體としての彼の生涯の比喩を見ざる性質に對しても、かの懷疑家の批評は根據を得ない。それでは、どうしてかの結果がゲーテに限つて現れなかつたかといふ點にこそ、彼の眞實相を確る爲めの問題がある。而してそれに對する解答は勿論ゲーテの一般生活の基礎的層から獲來らねばならぬ。

ゲーテに於て最も純粹な最も力强い歷史的實現を見出してゐる根本方式は常に次の如きものである。卽ち、全く獨自の法則に隨順して、恰も統一的自然的な本能の形で發展する生活は、正きしくその故にこそ事物の法則に照應するものである。換言すれば、彼の認識、彼の事業は、かの自己內から生

長した内面的必然の純粋表現で、而も客觀の要求と理念の要求から構成されたかの觀を有するのである。彼は獨自の法則を有する一々の客觀内容を自ら體驗したといふ事實に由つて、恰もその客觀内容が彼の生活其者の統一から生れた如く内部から形成した。彼の存在の戀愛的内容も此の彼の生活意義の總體に從つて發展する樣に考へられる。此の戀愛的内容も――彼の手紙、打ち解けた言葉、「詩と眞實」、及び彼の抒情詩の中に示さるゝ樣に――恰かも花が枝につくには、その特有の衝動力がそれを要求し發展せしめる瞬間と形式とに於てする樣に、彼の内部とその發展の必然とから決定されたかの如くに現れて來る。何處にも、ロッテ又はウルリケ・フォン・レベッツォウに對する熱情に於ける樣な極端な場合でさへも、戀愛經驗に「戀の魔藥」なる象徴を賦與せしめるに至つたかの惑溺の痕跡を見ない。そして往々獨自の生活表現といふよりは寧ろ吾々を相手に、或は吾々の傍に起る樣な感情の調子を見るのである。吾々の聞く處では、彼は彼の官能的沒頭を以てして、而も常に自制を失はなかつた。或る美しい婦人の印象が非常に彼を動かしたのでその婦人に就いてヘルデルに書き送つた言葉に、「予はかかる姿をはかない欲情の卑しい心で汚し度くない」と。その言葉に匹敵するは、就中、美しい女優に對する彼の自制に就いてエッケルマンに述べた言葉である。これ等の女優は彼の心を極度に牽き付け、所謂「彼の行く手に立ち塞がる者」であつた。けれども戀愛經驗を彼の意志に依つてかく決定し形成する事は、次の如き一層深い事實の表現に現れた現象に過ぎないので、決定的に重大な現象では決してない。その一層深い事實とは、此の戀愛的經驗を決定するものは彼の存在であり、發展の規定と意味とである。而して此の發展はひたすらにその特有なる源泉の流るゝがまゝに隨順するのである。それ故、彼が終生實行し、宣言した「諦念」は決して彼の生活の窮乏を意味せずして、その積極的形式原理であつたと同樣、戀愛事件に於ける此の抑制も何等の減量ではなくして、彼の愛情の個性的な生命の泉から發して、彼の愛情に賦與された形成であつたのだ。彼の稟性の幸運であつた事は、大體から見て世界の事物によつて彼の興味のそそられた程度と云へば、（最も高い意味で）彼の意志と理性とが彼に許す以上に出なかつた點である。此の事はこれ等一切の事物に對する彼の愛を了解せしめる。即ち、彼はこれ等の事物を恐るゝを要しなかつた。此の事は實際極めて自明である。彼の生涯、進んでは彼の作には如何に多數の主我相、刹那相、氣まぐれが發見されようとも、而も常に吾々の受ける感じは、彼の全生活が此の表皮に見らるる部分に對してその優越權を失はない事である。彼がいづれの瞬間に於ても全體として彼の表現中に生きてゐる事は、此の表現に不思議なる調和を與へる。彼の冷淡性として見做されてゐる事柄は、此の生活の全體に依つて個々の部分が權衡を保つ事に外ならぬ。（從つて此の權衡は彼の生活量の增加と共に增大せねばならなかつた）。彼の戀愛事件

も亦此の形式に整理される。愛は彼に於ては次の樣な無比の結合を生んだ。卽ち、全人が身を擧げて感情に沒頭し、而も彼が全人である理由から常に分在的感情の制御者であり、而して此の感情は、戀愛事件が往々男子に於て現るゝ樣な分離した實體としてではなく、此の有機體の生動的分節として働くので、此の分節はその全體の生命から力と規範とを――勿論、幸福をもとは言はない――獲來るといふ風である。少くとも彼は大體に於て此の人間的完成を所有した。卽ち、彼は全自己を擧げて沒頭し、全身を引きづり込まれて、而もその爲めに彼の中心からずれる事がなかつた。ゲーテ以外の人の場合には、分裂し相排擠する生活諸點、或は諸傾向がゲーテに於てかくも融和したのは、ゲーテの全生涯の獨自のものである。彼が「エピメニーデス」のうちに述べた實生活上の理想、「偉大なる意志の寬大」は人間に對する無數の關係に於て自ら實現したのである。沒我と同時に自省の能力、極度の精力と完全な寬容、――彼の最深の生命の絕對的不動性と絕對的な拘の確かさ、同時に日日變容する「プロートイス的性格」――これ等の綜合のもとに、吾々は、一個の包括的な、偉大な生活方式を感得する。かかる生活方式は、直接には把握する事は不可能で、唯かかる局部的或は偏在的表現を以てのみ理解されるばかりである。

生活過程としての感情のかかる性質は勿論その對象との關係に問題を起さしめる虞がある。一般に戀愛は、たとひ一個の心に於ける單なる內面的事件である場合でも、相互作用として感ぜられる。對手がその愛に報いようが片戀に了らうが、進んではその愛を知ると否とに論なく、愛に於ては對手方が活きた要素である。戀する者の心に愛情の成立するのは、たとひその者の空想であれ、やはり對手が彼の心に働きを共にするからである。然るにゲーテの戀愛はこれと反對に純內在的事件として又彼の內面生活が謂はゞその事件の費用を一手に引受けてゐるかの如く感ぜられる。而も不思議に堪えないのは、愛のかかる主我的經驗と常に結合する抑制、我慾、無遠慮等の振舞が彼に於てはその痕を止めないことである。彼は卅七歲の時に書いてゐる。「關係が意味のあるものになる爲めには、生存のどん底まで」關係を押しつめねばならぬ。「若し絕對的に愛するといふ事が許されぬなら、その愛は失敗と見てよい」と。六十二歲では、「己獨り愛して來り、何人も曾てこれ程に愛せし者なく將來も絕えて無いと考へる時、最もよく愛してゐるのだ。」愛は「取り戻す事の出來ない贈物である。而して曾て愛した事のある者を傷けたり、見て見ぬ振をするのは不可能である」と。ゲーテの生存をその根柢に於て決定したかの幸運な調和は今や竟に此の點に示現されてゐる。卽ち、それは謂はゞ自身をのみ知つて居り、自身の聲にのみ耳傾ける處の全然自由な本質的發展の調和であり、物象と思想から來る諸要求の調和である。「私が貴方を愛してゐるとて、それが貴方に何の關係がありますか」と言つ

たフィリーネ（註「ウィルヘルム・マイステル」に出る女性）の言葉のうちには、理想上の價値と個人にとつての價値の統一が最も完全に表現されてゐる。一方に於ては極度の情味と沒我の献身がある。これに比べると愛を所有と非所有の仲介者としたプラトーの考へさへも主我的な、皮相的なものの様に見える。ゲーテはフィリーネにかう言はしてゐる幾年か前に、此の至純な戀愛形成を行爲に由つて實證した。卽ち、彼が絶えず少しの包み匿す處もなくロッテに對する愛情を述べてゐるケストネルに宛てたフランクフルトからの手紙は、志操の純粹高潔、他に對する道義的に薩乎たる信頼に關して世界が有する最も完全なる證明の一つである。玆では愛の理念が人間にある一切の所有欲と偶然性から解放されて、その自からなる働のまにまに言葉に現れた觀がある。それ故彼は、スピノザが、「神を愛する者は、神が更に彼を愛する事を欲し得ない」と言つた沒我的な言葉をフィリーネの告白の根源となし得る。けれども一方に於ては、正さしく個人の獨自のもの、その絶對的自我存在から流れ出る愛が示現されてゐる。彼はその創作を、「好事家」として、そこから由來すべきものに對する目的的顧慮なく遂行したと同様、愛も亦彼には、生活の一機能で、生活の有機的韻律に規定されたものであつた。但し理念には規定さるゝ事なきも、而も深い根原的一元存在に依るが如くに愛と理念は調和したのである。

それに伴うて彼の愛の對象に對して特殊な色彩を持つた關係が生ずる。人間に對する彼の凡ての關係に於て、恐らく君主的情味とでも言ひ得る決定的特質がある――それは、人間の統一的全體性が彼の諸關係の一々に對して常に貫してその源泉、主宰者である處に成立する内面的態度である。その故は、斯くして、献身と間隔維持、相手への最も深い沒頭と、その爲めに自己の本性を失はない主觀的確かさ等は唯一の態度の兩側面に過ぎないからである。斯くして愛人に對する彼の關係に於て、かの情熱、忘我、騎士の態度が相交錯する――而もその愛人は本來、彼の内的發展の當面に必要な階次の據つて以て實現さるべき偶存的原因であるかの如く、又隨時の戀愛關係は彼自らの衝動力から咲いた花で、愛人は唯春の風、春の雨に過ぎないかの如き、特有の極印を持つてゐる。曾て、カール・アウグストが、ゲーテは常に一切事を婦人のうちに移置して、そこに彼の理念のみを愛したと言つたが、此の幾分ぎこちない表現には結局ケストネルに對する前述の告白と同一の事が基礎となつてゐる。卽ち、或人がロッテの姿を有利に描いた時、「ロッテにそんなものがあるとは私は實際皆目知らなかつた。實は私は以前から彼女を餘りに愛してゐるので、彼女の容姿をしみじみ氣をつけて見たこともない」と彼は言つた。決定的な點は、不幸なる戀愛に於てさへ愛する個性の内部に演ぜられる愛の主體と客體との間の相互作用が彼には影を潜めて、彼の愛は、その程度の高い場合には自體内に旋回する

感情であり、彼の個性發展に依つて隨時に設定された時代であつた事である。そして、此の事は、彼の存在形象内に於ける主觀的衝動と客觀的要求との不思議な統一に依つて、愛人をして毫も献身的情熱と忘我的温情の缺乏を嘆ぜしめないけれども――而も、彼の愛好の對象に屢變化ある事も以上の事から說明出來る。彼が彼の制作に關して色々な形で、色々な場合に言明した事は、吾々の活動の對境は何事であつてもそれは本來問題でない。要は力が實證さるゝ事、活動の最大限度が到達さるゝ事、の如何にあるといふ點である。逆說の觀あるが、彼の生存の此の根本格律は、彼の相手の婦人の複數關係にも繰り返される。彼には「壺を造らうが皿を造らうが」同樣であつた樣に、同じ意味で彼の愛する者がフリーデリケだらうが、リリーだらうが、シュタイン夫人だらうが乃至ウルリケだらうが一樣であつた。尤も、彼の愛はそのつど異るもので、粗野な肉情の男子に於ける如く、女性の個性に關せず、女性でさへあれば足りるといふのではなかつた。けれども愛がその各瞬間に現れ來つた事、愛が彼に於て此の各特殊の極印を有する事――は謂はゞかの戀愛上の相互作用から由來したのではなく、彼の發展の法則が恰度その時に齎らした週期的性格に依つて決定されたのである。彼が女性にまことを通じ得なかつたのは、彼が自己に誠實であつた故である。彼は曾て、「所謂女性のより大なるまこと」に就いて極めて注意に價する告白をした。それによると、女性のまことは「女性が自己を克服し得ない」處から起るに過ぎないし、又「自己を克服し得ないのは、男子よりも隷屬的であるから」といふのである。彼は實に此の言葉で、他人への隷屬に依つて成立し、個體の充分なる獨立から由來せぬまことから價値を拒まんとした。當面の愛着は、寧ろ自らの生活過程から流れ出でねばならぬ。此の生活過程は、彼の理會する處に依れば、不斷の自己克服であり、謂はゞ過去の廢墟の上により高く、より完全なる存在を建設するといふ事である。隷屬的なものは自己を克服する事が出來ない。言ひ換へると、かかる人間には、眞に自己に屬する秘奥の必然性が常に新しい內容と新しい轉向とを發展せしむる事がない。但し愛着がその執着せる以前の對象に深く根ざして、苦痛を以てのみ漸く此の對象から離れる事の如何は問題でない。卽ち、ゲーテがその愛する女性から自ら進んで別れる際でさへ感じた苦痛の數々の實證が存する。彼の不信行爲は自己克服であつた。換言すれば、益々高く發展して凡ゆる過去の上に建設する生活の法則への隨順であつた。吾々は此の戀愛の韻律を彼の最も驚嘆すべき告白の一つに結び付けると共に、此の戀愛の韻律が彼の最も深い生活感の奥底に沈潛するのを見る。その告白は宰相ミュラーの傳うる處で、ゲーテが七十五歲の時の言葉である。卽ち、「種々の乾盃が行はれたうちで一つの乾盃が追憶に捧げられた時、ゲーテは激しくそれを遮つて、『予は君達のいふ意味の追憶は一つも承認しない。吾々の出遭ふ偉大、美、重大事は、謂はゞ追獵の樣に外

から回想を促さるるものであつてはならぬ。寧ろ最初から吾々の内部に織り込まれ、吾々の内部と一となり、吾々の内部により善き新自己を生み、かくて永遠に創造しつゝ吾々の裡に生活を續け活動をなすものでなければならぬ。吾々の追慕を要する様な過去事は一も存在しない。存在するものは唯過去の擴大された要素から構成さるゝ永遠の新のみである』と言つた」とある。此の見解を以て生はその最後の硬化を克服した。斯くして、吾々の情熱的經驗も亦、吾々がその不可變のありしまゝの姿を再び探し求むる過去の一點に釘付けにされてゐるのではなく――從つて吾々もそれ等と一緒に釘付けにされてゐるのでなく、情熱的經驗は瞬間毎に新しく現れる生活構成の形成要素である。但し、此の生活構成が、かの經驗をそのまゝ持續せしめ、その内容に對して節操執持の外容を生み出す場合があつても差支はない。實際ゲーテの生活は、シュタイン夫人並にクリスティアーネに對する關係に於てこれを證明した。併し發展が截然たる轉向を要求する場合でも、無節操は生活に於ける單純な死せる中斷又は空虛な袋小路への迷走ではなく、生活過程の最も深き關聯は正さしくその内容のかかる中斷に依つて繼續する。以前の生活内容は、それがかの回想としてのみ存する様な過去である場合では、本來ならば否定されるのが當然であるが、彼の場合はその様に簡單に否定されない。否、それは奕々たる自我から決定されたのであるから、永遠に變形せられ、且つ變形を促しつゝ「新しいより善き自己を吾々のうちに生む事を」扶くるのである。ゲーテには女性はかの見かけだけの主我主義の對象であつた。此の見かけだけの主我主義の自我は實際は享樂主我ではなくして、有機的合法的な發展であり、從つてその價値に自信を持つ發展である。此の消息を彼が曾て短い箴言にまとめて、藝術家は「極度に自己本位に振舞ふべきである」と言つた。彼は常に創造的な自身の研鑽と制作とを「眞に只一筋に自己本位」と呼び、この研鑽、制作に依つて自己を鍊成せんと欲した旨を述べてゐる。かうして彼は「自己本位」といふ崇高な概念を提起した。ダヴィンチを除いては恐らく孰れの人物にも優れて世界の一切の領土が彼の糧食であつた。それにつれて思ひ浮ぶのはライブニッツではあるが――併し理會し得べき一切事を呑み盡し消化したライブニッツの知能はその材料と力とを知能自體の特殊榮養に役立てたに過ぎないので、完全なる綜合人格の建設に役立てたとは見えない。然るにゲーテの偉大な客觀性には、自らの自我は全存在に附着した一要素で、その完成が彼には義務であり、生活意義であつた。彼が研究者として、世界受容者として、乃至藝術家として、「極度に自己本位」であつたと同様、女性に對してもさうであつた。而して此の主我主義は一方では對象に對する充分なる忘我を含むと共に、他方では、ひたすらかの自己完成を目指してゐた。此の自己完成は客觀的價値であり、且つその價値の高進と共に一切卽一なる存在一般の價値も高揚するのであるが、彼の愛の主我主義も亦

さうであつた。

而も茲に一の差別が存する。人間といふ個體は、生活の流れを他と比較を許さぬ或る曲線を以て描き、自己を「自己目的」と感ずるので、非人間的存在の樣に他人の調和的存在へ自己を順應せしめんと欲しないし、第一それが出來ない。ゲーテは此の事に關しては――表現の仕方が全く異るが――原理的には飽まで明瞭であつた。即ち彼の言ふ處に依ると、彼は最も好んで自然と交つた。その故は人間との交渉では相手が絶えず變るので次々に錯誤が出て、その結果「何事も結着がつかない。」自己の法則にのみ隨順する彼の思惟と創作との發展が、同時に此の思惟、創作の對象の要求に照應するといふ彼の生存の根本方式は、此の對象が人間であつた場合には、無條件で妥當はしなかつた。人間は煎じつめると自分だけの存在を持ち、結局は如何にしても撓め難い彼の本質と運命との輪郭をそなへ、此の輪郭は、他人の有する調和性と調和力とが如何程異常であつても、他人の本質乃至運命の輪郭と一致しないものである。確にゲーテは彼の資性の內奥の衝動から、道德上の命令を必要とせずに一切の顧慮、一切の自己克服、一切の情味、献身的にして幸福を齎す一切の情熱を彼の戀愛關係へ賭けたのである。而もそれでも尙、結末は圓滿に終らなかつた。彼の愛した殆んど總ての女性には此の幸福は不結果と苦惱に終つた。エンヘン、フリーデリケ、ロッテ、リリー、シュタイン夫人等皆さうである。かかる結末になる原因は、その場合毎に特殊の色彩を持つてゐるけれども、次に述べる點は人間の運命の類型的形式に屬する樣に考へられる。即ち、內容上どこか類似の一聯の事件は常に類似の結果に終るものであるが、併し、いづれの場合でも一つの新しい原因、以前の場合とは全く獨立して、當面の場合を充分に說明する原因から出發してゐるのである。而もこれ等凡ての事件の基底には直接の因果關係を離れて、一層深い層から涌いた樣な一の共通な原因が横つてゐる――といふ點である。ゲーテが實にかの「極度に自己本位」の生活を生きた事は――よし如何に高い意味であれ、如何に偏執、放逸な享樂癖から遠去かつて居ようが、又存在の總體、事象、思想の法則と如何に獨自の調和を保たうが――實際生活で永續きする幸福の意味を敎へてゐる低い程度の意味でさへも、彼が女性に永續きする幸福を齎し得にかつた事の最も深い形而上的原因であつたのだ。彼がいみじくも自己を「神々の寵兒」と呼稱する資格のあつた比べるもののない恩寵、即ち外の一切の存在の法則と合一して而も獨自の法則に隨順した發展を爲し遂げるといふ恩寵は、人間個性の決定的獨存とは兩立しなかつた。これは謂はゞ方式的必然事である。

けれども上述の方式は、謂はゞ今一度內攻を始めて、その方式自らをも否定するばかりの力を示して來る。即ち、ゲーテ自身彼の愛人の苦痛に充ちた運命を共にしたのである。恐らく男子には珍らし

い程女性に愛慕された彼自身にさへ、陶酔のあはたゞしく過ぎ去る頂點を除いては、戀は何等の幸福をも齎さなかつた樣である。彼自ら曾て彼の内面の青年期の狀態を稱して「愛情の豐かな狀態」と言ひ、又「以前は、わが胸裡に恐らく餘りにも多くの憧憬の情を懷いたものである」と言つてゐる。然るに、壯齡に進むにつれて、それとは別に、「豐かな最後の滿足を求めた。」けれども此の滿足を求むるに明かにかの「愛情の豐かな狀態」の發展に於てせずに、先づ伊太利の風物に於て（上述の句は伊太利と關聯して述べられてある）、尙一般的には研究と活動とに於てした。だが、彼は異常な力を以て彼の天性の欲求を此の價値方向に導き入れはしたが、割り切れない餘剩の樣な或物が殘留して、それをば無理理體に忘れようと自分の心を壓へつけた消息は、彼の幾度か暗示してゐる處である。彼が次の樣に書いたのは七十歳の時である。「いづれの人も一個のアダムである。その故はいづれの人も一度は樂園――溫い感情の樂園から放逐されるから」と。シュタイン夫人に對する關係でさへ、若しその手紙を上滑りに讀むに止めぬものなら、眞實幸福な期間は驚く程短い事が解る。そして彼が彼女に感謝した幸福は、伊太利旅行からかけて、その後も彼女相手に嘗めた恐ろしい經驗に依つて充分相殺されて了ふ――此の場合所謂「罪責」が兩者に分割される事の如何は問題でない。此の苦しい經驗と結びついてゐる事は――かうした證明不可能の事柄で述べ得らるゝ範圍から言へば――彼の生涯の一轉向、否恐らく重大轉向である。此の事件と共に彼の心には、再び溶ける事のない或る物が凝結して了つた。クリスティアーネの全事件は、屢求めて而も決して獲られなかつた愛の幸福に對する倦怠と斷念との結果と考へられ、又適度の幸福といふ謙虛な完全への逃避と考へられる。次のことは一種獨特な社會的皮肉（イロニー）である。即ち、世俗人がゲーテの總ての戀愛經驗のうちでこのクリスティアーネとの關係が一番非難の的になつてゐるが、豈計らんや、此の關係の内面的構成から考へると、慥にゲーテのすべての戀愛關係中で最も世俗的であつたのである。扨ておあづけになつて死滅の一路を辿つてゐた愛情がマリエンバードの經驗で尙一度頭を擡げて彼に思ひ知らせる。マリエンバートの悲歌のあやしくも人の心をゆさぶる力は、恐らく世界文學中唯一の地位を此の作に與へるものであるが、此の悲歌がかくも人の心を動かすのは、次の事實にある。即ち、豐かな生動のうちに流れる、全く直接な感情が表現を得んとあせつて、而もそれに對して、有るものと云へば、もはや硬化して行きづまりの形式、即ちきまり文句の形式だけで、此の形式は長い全生涯から結晶して出來上つたものであり、從つてどうしても再び元の如く融解して、第一源泉から迸り出で、何らの固定形式にも隷屬せぬ生と愛との過程の流れへ牽きこまれる事を肯ぜぬのである。彼の前に現れた此の情熱的事件は、彼にだけまだ與へられてゐた超時劫的形式の中へ流れ込まなかつた。澄み渡つた、賢明になつた形式の背後には、恰も

己を窒息せしめんとする牢獄の壁を敲く囚人の樣な切なき情が鼓動するのを感ずる。恐らくはこれ以外の詩で、純粹にその詩形(スタイル)の中だけで、老齡と青年との悲壯な爭鬪を表現したものは曾てあるまい。彼の生命の一切の廣さと深さが集つた此の最高の詩形こそは、彼が眞實に經驗したその憂を表現する可能力を彼から奪ひ去つたものであるが、此の消息の表現の不運のうちに反映するものは、愛の幸福はゲーテの此の生活形式では永續の鄕土を見出し得なかつたといふ彼の現實生活の不運である。予は敢て言ふ、彼の存在の根本構成は、このウルリケの場合では、たとひ消極的平面に於てではあるが、彼の愛の幸運尠きを以て、自ら眞相を確證した。彼に許されたことは、彼が、その最も獨自な最奧の必然性から發展した一切の思惟と生活との爲めに、此の思惟と生活の對象そのものの上に、彼の所謂「應答する相似像」を見出したことである。彼の精神は偉大に幸福に圓成したのであるが、此の精神こそは宇宙の統一的全體の一味で相似像であり、且つ希臘人この方、吾人の最も深い豫感の前に彷彿する至福の一味で相似像であると共に、彼の愛がその對象に齎した苦惱は、彼自らの苦惱に「應答する相似像」に過ぎなかつた。恰も彼の生活と彼の世界との一切の明るみの樣に、彼の裡に潛む闇、彼を圍み彼に對持する闇が、互に手を携へて一切存在の形而上的統一から浮び上つたかの思がある。

第八章　發　展

個人の存在形式に現るゝその價値差別のうちで劈頭に立つと考へられるのは次の價値差別である。即ち、抑〻人間は、或る一定の事を成し遂ぐべきものであるか、彼の行動と存在とを以て個々の要求の一定量を果す使命、或は意圖があるものか、それとも、人間を全體から見て、その存在の總體を以て、或るものをなし、或は或るものであるべきかの點である。此の或るものは明記し得る目標、或は事業たるを要しない。唯、次のやうなものであるべきだ。即ち、生活統一が——恰も生體が統一體としてその個々の肢節に關係する樣に——これ等個々の目的事業の上に立つてそれを支持し、それだけ重要意義を有するものであり、全體として此の生活統一に課された理想に隨順して、一つの統一的な流れをなして流れ、その流れは一切の獨自の性質と行爲とを己のうちに吸引しそれ等を包攝する。そしてこれ等の性質なり行爲なりの總量を寄せ集めてもその眞相を成さない底のものであるを要する。所謂道德的價値判斷は玆に向けられて居らぬのが普通である。此の道德的價値判斷にとつては寧ろ個人の價値は彼の個々の特性と決意とから流れ出たものゝ一括である。然るに前述の人間にあつては、その反對に、恐らく名稱を附し難い意向と意義、彼等の生活統一の當爲が、各生活統一體の意義と任

務とを定めるのである。

ゲーテの存在像に對して苟も疑の餘地なき特性があるとすれば、彼の所屬は上述の二者擇一中の後者の側にある事である。彼の生涯は全體として、一定の存在當爲、一定の當爲的態度を己の上に戴き、そこから彼の最客觀的成果が出たと共に、此の最客觀的成果は又それに奉仕したのである。而して此の事は、彼の生活が苟も實現すべき任を負うてゐる樣な一定の內容が提示され得ないだけ、愈々完全に行はれる。その故は、專ら宗敎的、科學的、或は藝術的な人間に於て見る樣に、一定の內容が提示される場合には此の一事項への最も充分なる集中さへも多量のエネルギーを放置する慨みがある。吾々の本質は極めて多岐で、實際その凡ての方面を、たとひそれが中心で纏まる圓周的な面であつても、唯一の當爲に奉仕せしめる事は不可能である。唯此の本質が絕對當爲的に動く場合、謂はゞ「任務一般が」此の本質の上に臨んで居り、普通には、確定的な、實體的不動的なものとして生活に對峙する義務が、生活同樣に機能的な性質のものである場合にのみ、此の本質は無限の自在性を以て日々の任務に自己を注ぎ込む事が出來るし、その全體の孰れの部分も、嚴格な意味でその本質の當爲から離脫しない。それ故、はつきりとゲーテの存在の上に立つのが感ぜられる理想的要求に對して一定の內容を賦與し得ないのは、決してゲーテの存在の上述の構成を否定するものではなく、却つてそれの肯定的證明である。一切の「職業」に對する彼の激しい嫌惡の深奧の原因は恐らく玆にあらう。苟も生命が全體として或る當爲に動くとすれば、彼の生命こそはそれであつた。それは、劇作をするとか、自然科學を研鑽するとか、實際的活動をするとかいふ事でない——これ等凡ては彼の責性の個々の材幹の隨時の當爲である。要は、彼の生命がその根源からいかにも統一的に截然と綜合されてゐた結果、その結果性は、一つの明記する事の勿論不可能な當爲、卽ち生命完體の理想に依つて整調されてゐる樣に感ぜられる。而して此の當爲乃至理想が、かの個々要求に分岐するのは恰も彼の生活の實際上の成業に分岐したのと均しい。生活總體に對する此の要求が、彼の生涯の諸時代の傾向中に實現されるその仕方で此の諸時代に差別的特性が與へられる。

彼の青年時代は、彼自らには形を成す程明識されぬにしても、直接な形式で此の理想に隷屬して、それは伊太利の旅を了へる迄を絕頂とする。彼の創作、行動、研究は最初からどれ程眞劍で献身的であつたにしても、彼の存在の完成が一切事に於ける究竟の促動的動機である事は明に感得される。此の點では彼は主觀的抒情詩人で、此の詩人に對しては此の生活形式は現實であるのみならず、その中心理想であり、從つて又客觀事象たるは言ふ迄もない。此の時代の頂點に立つて、一七八〇年に彼の言つた言葉に、「予の存在の金字塔の基底は予に賦與設定されてゐるから、これを出來得るだけ高く

空中に聳え立たせんとする此の欲念は他の一切事を越え、刹那の忘却をも許さない。予は懈怠を許されない。予はもはや可なりの齢を重ねてゐるから、恐らく運命が中道で予の志を碎いて、バビロンの塔は未完のまゝ殘さるやも測り難い。が少くとも予の壯圖を世人の口に上らしめずには置くまい。予が幸にして生を長らへ、且つ神意に適ふならば、予の力はその頂巔を極めるであらう」とある。同年にシュタイン夫人に宛てゝ次の如く書いた（これは多くの點で同一の意味である。）曰く「御覽の如く私はいつも自己のみを語ります。他人に就いて何事をも存じません。その譯は私には內面的に多事であるからで、切れ切れに現れて來る事物に關して何事をも言ふ事が出來ません」と。而して彼が廿五歲の時、稀有に豐富な愛と友情、興味ある事象、實際的仕事への希望に取り圍まれながらも、「最善の歡びは自己の內部に安往する事である」と言つたのは、上と同樣な根據であるのは確である。これは、生活自體の力、生活過程の急奔する流れが、ありとあらゆる內容を、よしそれが人目につく處に置けば、彼にどれ程價値豐かで重要なものであつても、悉く自己のうちに呑み込んだ時代であつた。勿論これは、一般青年の典型的な氣分、傾向に過ぎない。故は、大きい生活範疇に當て嵌めて考へる場合、苟も青年と老年との間に分極的な對立があるとすれば、それは、青年では生活過程が、その內容よりも優勢であり、老年にあつては內容が過程に優つてゐる事である。青年は何事を措いてもその存在を實證し感受せんとする。而して彼の對象は――主眼とする處――只此の事が行はるゝ限りに於てのみ重要である。而して「青年の移り氣」と名附けられる事の意味は、彼にはまだ、生活內容が眞に自存價値を有せず、從つて、主宰的興味（例へば、迫進的な力の發表、生活過程の强張、世界を自己の裡に吸引し、又は自己を世界に犧牲とする場合、世界を平等に自己の材料とする主觀的存在の感情）の要求があり次第、容易に變るといふ事に過ぎない。老齢は此の流れを緩め、生活機制そのものを緩和すると共に、世界の實際的內容の超主觀的意義が增進する。恰も諸物象が自らの生活に顧慮せぬ樣に、老齢に一層確定的調子を得しむるものは――一つの發展である。此の發展は、その頂點に於ては發展の主體をも自己の方式の中に牽き込む。此のことは人間が認識並に實行上客觀的內容の規範に從つて自己の存在を生き、かうした生活自體を主觀的機能として意識と意向とから全く削除する場合にも見られ、或は又大藝術家の晩年の作品に於ても見らるゝのである。かうした作品に於ては、經驗生活の飄蕩裡を貫いて生長して來た、所謂超絕的な人格核心が、主觀客觀の分極の上に關を上げる全く新しい形式が表現されるのである。ゲーテ自身が青年と老齢との間の對立を斯樣に感じたといふ事は、「吾々は若い間は迷誤も詢に結構である。只これを老齢まで跡を引いてはならぬ」と言つた一見皮相にも見え、異樣にも思はれる後年の意見に初めてその立證的な深みを與へる。迷誤

が青年にとつて「結構」である理由は、一般に青年に問題なのは、認識の實際的價値ではなく、生成、成長、存在が問題であるからである。この生成、生長、存在に役立つものなら何でも善であり、それが客觀事象へ對比して判斷規準を見出す內容としての正否は問ふ處でない。然るに老齡は客觀相に向けられてゐる。從つて迷誤は、ゲーテの考へに依れば、生活過程が認識と實行とに分離する老年期の特殊的志向に悖る――然るに青年期は此の生活過程の力に臣從し、眞實も迷誤も均しくその材料とする。そして善惡の事情も眞僞の事情に均しい。ゲーテには青年時代に於て道德的格律も、自然の壓倒的な力に對して屢無力に見える。ゲーテを支配してゐる統一的、力動的生活の概念は一方に於ては善と惡とから獨立して居るが、他方に於ては此の善惡自體が一の存在であり、又此の存在の單純な質的規定である。彼の老齡に於ては、かうした規範に漸次意義の增大を加へる。而してたとひ彼が此の規範を歷史に現れた人類如實の生活中へ編入して、互にからみ合せ分岐させはしても、やはり此の規範は「德行と罪障」として截然と分離されてゐる。青年には善惡が屢同一と考へられるのは、彼に重大なのは內容ではなく、生活過程であるからで、此の生活過程は客觀的規範から由來する上述の分類とは何ら原理的な關係を有しないのである。畢竟「善惡」は吾々の實在性であるに反して老齡に於て見る「德行と罪障」なる概念は、吾々の所有するもの、生活基底から可なり觀念的に遊離したものである。――處でゲーテの生活事業は――たとひ爾後の發展が彼の裏に配置されてゐる諸强調點を如何程多樣に示さうとも――一方に於ては主觀の客觀化へ向つての努力を決して捨てず、他方に於ては自己のうちに集中して自我の完成を目指す自由な自我顯現の生活を決して棄てる事がない。予が彼の青年期の特徵となしたもの、卽ち人格的存在の理想によつて決定されることは、後に擧ぐべき轉向と分化とを以て彼の全生涯を貫き、最初から生活の內容を作り出し、之を仕上げる事に見當をつけてゐる人々の存在とは彼の生活を截然と區分する。カントは卓越した意味ではあるが、かかる存在の一つである。彼の遺稿に見出された一節にかういふのがある。「予は性向上から見ても研究者である。予は認識に對する滿幅の渴を感じ、又認識の步を進めんとする貪婪な不安を覺え、從つて又進步の度每に滿足を感ずる。曾て予は此の事が人類に名譽を齎すべきを信じた時代があつた。その時代には何事をも知る處なき賤民を輕蔑したものである。然るにルソーは予を正見に導いた。此の迷妄の孤高は消散した。予は人を尊敬する事を知り、而して若し此の省察が一人に人類の正義を樹立すべき價値を賦與し得ると信じなかつたら、予は自分を賤しい勞働者よりも遙かに無益なものと考へたらう。」此の認識の熱情はいかにも至純で基礎的であるが、それにつれて、主觀生活の價値は、此の生活に對して原理的には全く無關係な規準に依存してゐる。卽ち、カントの意圖は、認識がその觀念的存在から出で

て、彼に於て實現を見るやうな、さうした認識の容器となるにあつた。然るにルソーに動機を得た轉向は、「性向上から」來れる自己の天職に關する價値の强調を調整し、彼の行動を、全く自己の彼岸にある秩序に隷屬せしめた。彼の精神内奥の生活過程に形式、運動、價値を齎すものは常に此の生活過程の客觀的内容である。――然るにゲーテにあつては生活過程が第一のもので、その過程、過程の規範及び力から初めて内容が、方式、運命、意義に從つて決定される。かくして、過程と内容とに盡されてゐる存在の統一は、兩者に於ては相反せる方面から獲られた。併し已に述べた如く、青年期に於ては生活の過程が生活の内容よりも優勢で、老齢に於ては内容が過程を凌ぐ理由から、ゲーテには永遠の青春を忍ばしむるものがあるに反し、カントは最初から老成の面影があつた。

ゲーテの青年時代、此の特性を際立つて光らした特殊の絶對性と直接相の顯現してゐるのは、かかる傾向にある生活實相の心理的代表乃至意識ともいふべき心的精力、卽ち感情の主宰に於てである。彼の青年期は飽まで「感情は一切なり」といふ標識の下に立つ。予は彼の廿歳代の初めから二、三の引用をするに止めよう。ウェルテルは一人の友人に就いて次の如く書いてゐる。「彼は又予の悟性、材幹を此の心情にも增して尊重する。而も此の心情こそは予が唯一の誇であり、一切事の源泉、一切の力、至福、不幸の唯一源泉である。予の知る處は何人も知り得るのである。――予の心情こそは予のみこれを領有する」と。又彼に宗教的感化を與へんと企てた一友に宛てゝ詩的轉置も用ゐず、直接にかう書いてゐる。「君はいつでも證明で以て予をつかまえようとするのは可笑しい。何の爲めの證明だ。我在りといふのに證明が要るか。我感ずといふのに證明が要るか。唯、予を力づけ、强める事を予以前に幾千人乃至一人が感じたといふ消息を予に示して呉れる證明こそは予が尊重し、愛し、崇敬して息まぬものである」と。ゲッツが出て間もなく、此の作に就いて「凡てが頭で考へたに過ぎない。それが不快で堪らない――若し美と偉大がより多量に汝の（自分の意）感情内に編み込まれてあるなら、汝は何故とも知らずに善美を行じ、語り、且つ書くだらう」と書いてゐる。ケストネルは廿三歳の彼を批評して、「彼は眞理を求めて努力する。併し眞理の表示よりも眞理の感情を重んじる」と。感情のうちに表現される根原的な存在統一を分裂截斷する一切が當時彼の憎む處であつた。その結果、彼に向けられた或る批評に就いて自己の意見を發表して、作者はその言へ得るだけの事を自己の感情に移し入れねばならぬ。かういふ風にして作られた感情から發してこそ彼は初めて變更改作もなし得るといふ主意を述べ、「予は個々の箇所、辭句に關する一切の特殊的批評を憎む。予の友人が予の作を改鑄、或は焚殺の爲めに火刑の宣告を下すのには甘んずるが、予は彼等が一句の移動、一字の改植をなすをも許し難い」と。彼は廿四歳の時、自己の制作を、謂はゞ客觀的諸動機を除き、

端的に生活と感情から導き來り、「予の理想は日に日にその美と大を增す。若し予の生氣と愛が予を見捨てぬなら、更に刮目すべきものあらん。」それから、七十歳近くになつて、將來の發展の支持者として委を現すべき對立に就いて次の如く截然と批判した。「予の初めて世間に發表した制作は、本來の意味では、情緒的な（卽ち、殉情的な）才能の强激な爆發であつた。而も此の才能は自ら處する方策もなく、自ら切り拔けて行く事も出來なかつたのである」と。吾々は此の點が肝要である事を知るが――彼は斯くして、情緒を理論的事象と實際的事象とに對立せしめる。吾々が事に處する「方策」を知るは此の理論的事象を以てであり、「切り拔ける」事を知るは此の實際的事象を以てである。

彼の青年時代の生活が感情の主宰に照準を合はせてゐる事は、それがウェルテルのうちに齎す悲劇的結末に於てもやはり證明される。此の青年の不思議な美しさと特性、限りなく豐かな感情から生れる存在がここに示される。これは眞の悲劇であつて、此の悲劇は、此の青年が正に絕對的なるものを欲する刹那に現るゝ自己矛盾と自殺の必然性のかたちで現れるのである。ウェルテルの感情は儘に生活の極度の昇高である。けれども感情がそれ自體のうちに跼蹐し、われとわが身を蝕むことによつて、自滅せねばならなくなる――恰も後にアウレリーとミニョンが同一の原因から破滅するに均しい。卽ち此の原因といふのは、絕對的感情生活であつて、それは、その內在的無限性に拘らず、而も生活を袋街へ迷ひ込ましめ、「予の衷なる他の一切の力を利用せざるまゝに朽ち果てしめる」ものである。ウェルテルはかう書いてゐる。「予は眞に幸福であり、靜かな存在の感情に完全に沈潛し切つてゐる爲めに予の藝術はその重壓下に惱む――予は此の儘で破滅する、予は此の現象の目醒しさの力に壓倒される」と。此のことも亦恐らく次の事と關係するだらう。卽ち、たとひ感情が存在總體の心理的代表たるべき全權をどれだけ廣汎に持つてゐても、やはり主觀內に於ける存在總體の反射に過ぎないといふ事である。ゲーテの青年期の理想構成は存在自體の完成を期するにあつた。彼が考察し、實行した一切事に於て、彼の問題となつたのは一切を支持し促進する直接の人格生活の强張と內的完成であつた。けれどもそれに連れて感情が生活の主音となるのは避け難いので、吾々の實生活の主觀的反映と象徵化たるに過ぎない此の感情が、此の實生活から遊離して生活實體として浮び上るといふ危險が發生する。ウェルテルは此の危險に陷つて實際の生存を壞破した。然るにゲーテが此の結末から自己を救濟したのは、彼がウェルテルを書いた爲め、卽ち自體內に跳躍する單純な感情態に、客觀化と創作力が代つたからである。此事は吾々がやがて知らんとする彼の生活の偉大なる强調點の換置を暗示する。

予は先に、人格的生動的存在と感情とを理想とし、基礎とする此の存在が一般青年氣質の典型を特に純粹に際立たせた事を述べた。併し此の事の起るのはどうしても感情の系統發育的地位まで遡る。吾々の存在が總體狀態、總體意義、總體價値として、分化せずに映し出されようとすればする程、思考と意志の多岐にして仲介物を持つ形式に對立する感情形式に於てそれが愈々遂げ易い。心の最初の狀態は慥に感情である。而して「意志と表象」とは、第二次的のもので、恐らく同一歩調で發達したのだらう。併し生の深所から湧いた、統一的主觀的存在完成の此の理想、ファウストの最初の獨自では形而上的理想として述べられ、ワグネルとの散歩の場では謂はゞ生氣主義的理想として述べられ、一切の憧憬を體驗の充實感、完成感に集めてゐる此の理念は、若きゲーテの姿に魅力あらしめ、且つ人類的完成の豫感と未曾有の豫望とをそれに賦與するもので、これに對比すると彼の後年の存在、成業の一切の奇蹟は、たとひ單純な可能性に反して實在の力を有するにもせよ、些か色彩の褪せ行くを示してゐる。ここに人類の最高の典型に於てのみ特に明示される人類共通の運命がある。その故は、吾々が此の典型を名附けて「最高」となすのは、成業を根柢としてゞあり、此の成業は、主として時間上から見てのことで、少くとも意味上からすれば青年の面影の彼岸に横るからである。その理由から、偉大な人間の青年時代の姿が屢吾々に與へる不思議な感銘も起つて來る。これ等偉大な人間が後年未曾有の創作乃至活動を爲すに至つたにしても、それは或る程度の損失、偏倚、低温を以て贖ひ得たのである。尤も彼等が失うたもの、自己の成業の爲めに失はねばならなかつたものは、元來現實として所有してゐたのでもなく、さればといつて單純な現象的な可能性としてゞもなく、かの論理的には極めて理解し難い範疇のもとに所有してゐたのである。潑剌たる本質は此の範疇のうちにその未來を既に現在として所有し、彼の不分離の、恐らく決して分離され得ない緊張力が特殊の現實として彼を立圍むのである。又青年時代の特殊の「愛らしさ」は此の全體存在の豫感に充ちた提示に基づく。此の提示に對比すると、後年の一切の具象的成業は分析、偏倚である。その故は、愛は正さしく人間の全體に向けらるゝもので、高々此の全體に對する關係を示す架橋の役をなし得るだけの個々の仕上げ、或は行爲が、如何程價値があつても愛の對象とはならぬものである。凡ての人の愛情を贏ち得たゲーテの青年時代の魅力は、彼の謂はゞ自體内に纏つてゐた人格の此の端的な顯現、啓示にあるやうに思はれる。彼の此の人格は、未だ多岐なる水路に分裂されない彼の存在である。

人格的存在の完成の理想は彼には行動（創作と實行として）の完成と認識の完成とに分れる。此の間の消息は已にワイマル前期に於て個々の端緒のうちに窺はれ、明白には伊太利旅行後に知られる。而して彼の人間像の他に比肩を見ない點は、此の事と共に起る彼の生の美と力との分離が謂はゞ全く

理論的に避け難い最小限に過ぎなかつた點である。それは殊に此の推移が純粹に內面的な發展運命であり、最初から彼の本質の有機的法則に豫定された週期であつたからである。力が青年の可能性としてのみ所有する集合の形式からその實證活動に移動し、自足の生活過程から個々の內容に導かるゝ場合には、此の力が正さしく此の形式に附着してゐる獨自の光彩と魅力を失ふは自然の成行きである。而して大概の人の生涯にあつては、それに伴うて力そのものの一部分も痲痺し、活力の流れは、その源泉の統一狀態に依つて促動されずに、多數の血管に分脈し、種々の特定な目標に依つて引かれる結果、威力と濃度を減ずる。ゲーテに於ては此の派生的遞減的結果が現れなかつた。彼が主觀的生動の理想主義から客觀的活動乃至認識の理想主義に移つた時、勿論特殊の價値を具へた青年時代が失はれた。併しそれ以上何ものも失はれない。かの力動的な强烈な存在は分れて理論となり、又實踐となり、それ等の本質となつて保存され、かかる發展の多數に見る樣に、此の兩者の間で沒落するとか、我は兩者間に分割さるゝなどの事がない。ゲーテは此の兩者を常に相關關係に於て眺めるが　此の兩者に流れ入つて生きた根本の生活衝動の統一から、此の相關關係が理解される。彼が自己の活動を生かさぬ知識の一切を憎み、彼の創作活動を促さない印象を是認せず、理論上眞實なるものの標識を實踐にありと見たのであるが、これ等一切の事實には、共通な根源が働いて居り、此の根源は最初から彼の生命の根源であつた。此の根源が認識と實踐とに分岐したあとで、此の共通根源の結果と象徵として、認識、實踐の兩者の依存的關係が殘つたのである。

此の決定的轉向の明瞭な原理的意識は例へば一八〇五年の言葉に現れてゐる。その中で彼は重要な對象の思出、特に特徵のある自然の風景の思出を長い期間を置いて、それ等のものの印象と比較して言ふ。「斯くして吾々の氣のつくことは、對象がいや增しに際立つて來、以前には物に觸れて情を動かし、苦樂、明朗、混亂を悉く物に轉嫁したのに、自己本位の心を制肘した今では、これ等物象にその當然の權利を許容して、その特性を認知し得るやうになつたことである」と。此の言葉に添へて記憶すべきは、實踐的態度そのものゝ價値に關する凡ての言葉である。此の種の言葉はこれ迄述べた關聯中に現れ、又彼の年齡の增加と共に益々截然たる形式を取る樣になつたものである。彼が、晩年に於ては唯語と行のみが己に存し、所謂雄辯の沈默をことゝしたのは昔戀愛三昧に日を送り暮した懷しい青年のことである――といふ風なことを彼が云つた時は、まだ決して大した老人ではなかつた。此の言葉は理論的實踐的時代の肩を持つて主感的時代への絕緣狀であつた。尤も彼自らは此の理論的實踐的時代の對者として詩的創造の時代を建立してゐる。――それは一八〇五年の前出の言葉の續きにも出てゐるし、又それから廿年後にもはつきりと、もともと彼に具つてゐた藝術能力、美的能力が彼

を去つて自然研究がそれに代つたと云つた。然しこれは明かに、詩作の乏しかつた年月から生れた氣分である。事實の示す處では、老齢が決して彼から詩作能力を奪ひはしなかつた。併し勿論彼は此の能力にも客觀性の極印を捺した。此の能力を保有しつゝ今や彼は「物語作者」となつた。此の物語作者は、自己の生活とその内容とを分離し、更にこの二つを、恰度研究の形式と實踐の形式に於ける如くに、藝術作品の形式に於て結合したのである。

「マイステル」兩部の關係はこれ迄記述した發展の縮圖である。「徒弟時代」は人格を錬成し、人格を生き拔く理想のもとにある。客觀的成業の獨自の價値はテレーゼを除いて殆ど問題になつてゐない。テレーゼとても此の方面では實際は已に「遍歴時代」に移るべきを示してゐる。「俳優」と「貴族」に限つて特別に力瘤を入れてあるのは非常に注意すべき事である。その故は、此の力瘤の入れ處は兩者に對して、その動因こそ全く異れ、決して彼等の存在の特殊の内容と實體的結果には存しないからである。前の者の成業は純流動的のもので、その超個人的活動の目指す處は更に看客の機能的教養と存在の向上に過ぎず、後者の成業は全然その實體を示さないのである。兩者にとつて肝要な事は、存在理想から由來する自我附屬の人格發展を實際的外的秩序のうちに縛ることもあり得る生活内容から解放される事であつた。かうした生活そのものに向けられた非實際的な分化しない存在と存在評價とに最初から女性は心を傾けるもので、此の特殊な女性の性向は、「徒弟時代」に現れる女性の實現し得る限りの殆んど凡ての類型に試みられてゐる。マリアンネ、ミニヨン、フィリーネ、伯爵夫人、アウレリー、ナターリエ皆然りである。而してナターリエに於ては最も純粋完全に現れてゐる。それ故、他の女性に對するウィルヘルムの戀愛關係が感情の主宰と、彼を導く總體存在の理想との間に成立する並行關係を示したあとで、彼女に於て彼の全憧憬の飽滿を見出した事はウィルヘルムの生活意向の最も深い意味を語るものである。此の生の價値方向の全幅に亘つて、正確な、否眞にあくどい程の對立をなすものは「遍歴時代」である。茲では凡ての調子が客觀的活動、社會的制度、超個體的理性に置かれる。此の作では、人物は内容で確定された一定の機能の無名の擔ひ手に過ぎない。彼等自らに關係し、彼等自らに有價値な修業の代りに、客觀的全體へ配置される活動の遂行の爲めの修業が現れる。「徒弟時代」の空氣は、生がその絶對性の爲めに求められ、存在がそれ自らの完成の爲めに求められる處にのみ行はれ得るといふ風に一貫して生の浪に滿されてゐるに反し、「歴遍時代」では稀薄な空氣が呼吸されるばかりである。といふのは、生活の光芒が個々の目標に固定し、謂はゞ線狀に分化してゐる爲め、生の光芒間には空虛な間隙が殘らねばならないからである。男女兩極間の雰圍氣の緊張は剝落し、男女は同一の客觀的法則に從屬し、此の法則は最早存在の法則ではなく

して活動と成業との法則であり、感情に代つて叡智が現れて來るのである。それは個性の或る種の概念を意味する。即ち、それは、以前の概念形成に對抗して頭を擡げ、人類の概念に準據してゐる概念である。ゲーテの齢が重れば重る程、益々人類が人間に代つて行つた。生活が彼に確證した事は、個々人といふものは、ゲーテの青年時代に描いた個體完成の實現にまで修養する事は出來ないといふ點である。即ち、完全を達成すべきは人類で、「世紀は進歩するが個人は依然として初歩から始める。」併し人類が此の完全を達成するのは同質的完全に依つてでなく、その諸聯節の最も多岐なる分業的發達に依るのである――即ち、ゲーテは此の現象にも有機體の原理を保持してゐる。「遍歴時代」の中に言ふ。「卿等の一般教養とその施設は茶番である。肝要なのは、人間が或る事に徹底的に通曉し、近隣の何人も追隨を許さぬ程にすばらしく仕事を仕上げる點にある」と。「待弟時代」では個人生活其者だけで分化し、各個人が一つの世界であるから從つて各個體がそれぞれ分化せる世界であるのに反して、「遍歴時代」で求められるのは一箇の統一的世界で、從つて此の世界内では當然分化すべきものは、個人個人ではなく、唯成業、即ち此の世界の客觀的成素のみであらねばならぬ。ゲーテの老齢に於ける實踐の理想の最も深い關係と立證の一つは玆に存する。行動が客觀的社會的世界の一部分として、その中に挿入されるのは、それがその内容に依つて確定せられ、その結果に依つて測知される限りである。此の意味に於ける人類は、ゲーテにとつては、自己の完成を求める自足的人間の分化を要求せず、又その存在も、その感情も要求せずして、求める處はその行業であり、實際に即した活動である。人間から人類への轉向は同時に個人的存在の擔ひ手たる個人から個人的成業の擔ひ手たる個人への轉向を意味し、且つ個人生活の價値から生活の客觀的内容價値へのゲーテの偉大な轉向を確證したのである。

ゲーテの生活志向の「理念」を公式化し、彼の統一的全體的當爲に内容を與へて見るならば、それは主觀の客觀化といふ事になる。彼は殆んどその際限を知らない位な仕事のうちに、吾々の知れる恐らく最も豐富な、濃厚な、最も動的な主觀生活を客觀的精神産物に構成した。それは此の小息みなき内面的生成、即ち常に躍動し、受容し、産出する自我機能の全範圍と無數の振幅極とを、隙間もおかない程に時代を分たず擴がつてゐる制作から悟る事が出來る。ゲーテの樣に自己の作を一つの告白と名附けてゐる者の陷り易い二箇の危險、即ち、自然主義的奔放に陷るか、乃至は生活内容と主觀との結合が最早感知されない位此の生活内容を歪める危險はゲーテには存立しなかつた。彼が「親和力」に就て、そこには自己の體驗しない一行もないが、又自己の體驗した儘の一行もないと言つたのは、たとひ消極的で多少表面的な嫌ひはあるにしても、決定的な事を表現してゐる。即ち、彼がその作に籠めた純粋主觀と此の作に於て成立した純粋客觀とを表現してゐるのである。その作がゲーテと均しく主觀の

客觀化と感ぜられる他の偉大な藝術家、即ちミケランゼロ、レンブラント、ベートーヴェン等も、言語的手段に比して、彼等の藝術の一層特殊的表現可能性を以ては、智力、感情、德性等の內面的存在をゲーテの如く空隙なき範圍に擴げ得なかつた。ゲーテの此の偉大な人類的業績は、本書で屢繰り返される次の言葉で表現される。これはたゞ言ひ廻し方が前と異るだけである。即ち、ゲーテは、彼の個體的實在性が宇宙的なるもの、理念的なるものに深く根ざしてゐるので、客觀的に正しく深いもの、藝術的に完成せるもの、倫理上要求せられるものを仕遂げる爲めには、只自己の衷から生成する彼の主觀生活の過程、即ち本能性に從ひさへすればよいのであつた。此の統一が極めて包括的であつた爲め、以上の結果を生み出す爲めに必要である一切の自制、自己教育、諦念は彼の直接なる主觀生活の性格と旋律とに屬してゐた。けれども此の主客の統一は、彼の異れる諸時代に於て、異れる實現の道を行つた。彼の青年時代に於ては生活の理想を生活そのものの上に集合して、中心的衝動力を個人的存在の完成に向けたので、此の統一は一種の單純なる純粹さで示される。此の階次を越えた發展は分化、或は客觀化と名附け得よう。此の發展は極めて明瞭に統一と分化の二概念の交代意義を示す。主觀生活の統一が特殊の諸活動、興味に分裂する處では、常に統一的人格焦點から半徑が延び、此の半徑が身外の客觀的領域にまで達するか、或は此の客觀的領域に依つてかの統一的人格焦點から誘き出されるのである。人類の全精神史、社會史が――大體法則的に說明され得る僅少の特質の一つとして――示すのは、いづれの分業も興味と制度の客觀化に至る一歩であるといふ事である。或社會が分化すればする程益々即物的、非人格的規範を作り出す。機能が分裂すればする程最後の結果は益々一個の純客觀的全體となり、此の全體は主觀の局部的寄與を謂はば自體內に呑み込み、更にこれ等の寄與の各に對して一個の新しい外來者として臨むのである。その故は、此の最後の結果なるものが生成上最早統一的な一個の人に結集されてないからである。從つてかの統一的生活完成がゲーテの理想構成に於けるその地位を行と認識に讓る程度だけ、彼の思惟と存在志向が客觀的になり、その程度は畢に彼自身の體驗の直接性が一つ一つ彼にとつて客觀的に記錄され、理解され得る事件となるまでになつた。彼が自身內で自己を分化すると共に、自己と世界とを分離した。かの自己と世界間の直接な感情的統一は、實踐的に料理され、理論的に認識される客觀世界像に席を讓つた――勿論同時に此の統一は或る仕方で保存され、且つ依然として此の分岐せる道程を經て達成さるべき目標であつた。從つて彼はその青年時代に於て存在の全體を彼の主觀の全體中に感じたのが、後には主觀が多數の腕に分れ、この多數の腕を以て、一つの對者、即ち世界を掴んだ。ファウストは第一の意味でかう叫んでゐる。「全人類に與へらるゝものをわれはわが衷なる自我にて享受しよう。」――已に「待弟時代」の終りでこれと反對な事を宣言する注意すべき

句がある。人間が雜多な享樂を要求する樣になると同時に雜多な機關をそれぞれ、謂はゞ相互獨立に發達させる能力がなければならぬ。有る限りの一切を自己の全人間能力をを以て享受せんと欲するもの、自己以外の一切を此の種の享樂に結合せんと欲するものは自己の時を永久に滿されざる努力を以てのみ送るだらう。」と。かのファウストの言葉は謂はゞ汎人間主義（パンアントロピスムス）の形式に汎神觀を籠めてゐる。而してゲーテが八十歳に垂として彼の青年時代の道程からの離反を說明するのに恰度此の形式を利用してゐる。乃ち彼は言ふ。フウアストは「一個の人間精神の發展期を掴んでゐる。此の人間精神は人類を惱ます一切事に依つて自分も惱まされ、人類を不安にする一切事に依つて動かされ、人類の嫌惡するものに人類同樣促へられ、人類の希望なるものに依つて自分も歡ばされたのである。かかる狀態は現在ではその作者から去る事極めて遠い」と。彼が數十年を通して、かの個々獨立してゐる諸機關を以て解決し得べき問題として見て來たものは彼の青年時代に所有してゐると信じてゐたものであつた。而して此の事實こそは彼の生活の大轉向が何等の損失ではなく、唯一の變態（メタモルフォーゼ）に過ぎない事を意味し、且つ、青年期の生活全體の形式、青年期の感情の形式に於てのみ存在し得ると思はれた多數のものが老齡には客觀の形式で保存されてゐた事を意味する。後年彼はかう書いてゐる。「若し著作並に行爲に關して云謂する場合に、溫い共感、一種の偏頗的熱情を以てせぬなら、云謂の結果は誠に言ふに足らぬものだらう。唯一眞實なるものは、事物に對する快感、歡喜、共感であり、更に眞實相を生むものである。その他の一切は空虛であり、空しき結果を生むに過ぎない」と。彼がその青年時代を說明したかの「愛の豐かな狀態」は、以上の句に依つて謂はば客觀的となつた樣に思はれる。吾々は「世界はわが表象なり」といふ原理の對像として、「世界はわが愛なり」といふ命題をば此の狀態に從屬せしめ得る。但し此の命題は彼の青年期と老熟期とに性格上異れる意味を持つだらう。謂はゞ己自身のみを感じ、自己の愛の力をのみ發展せしめんと欲した青年期の心情には、その目的を達するのに全存在が充分の廣さがあつた。此の心情が全存在を包攬したと共に自己を全存在に委ねた。それは、ガニメートに於て如何にも鮮かに言ひ表はされてゐる一種の愛の汎神觀である。併し此の統一が主觀と客觀とに益々明確に分化すると共に、愛は愈々生產的に感ぜられ、存在は、愛が主觀內の力であるといふ意味で愛の客體となり、存在一般が主觀に對して存在する所以は主觀內の此の力に由る。それは、恰もかのカント、ショーペンハウエルの命題に於て世界が吾々に對する客體たるは吾々の表象がこれを生み出すに由るといふのに等しい。今や「愛の豐かな共感が眞實相を生み出す唯一のもの」である。これ無くんば一切は空虛である。卽ち、彼の青年期の主觀的統一的狀態を主觀客觀の雜多なる形成分化に推移せしめ、此の分化を前提としつゝ更に一段高き階次にある如き統一に向つて生長する

發展は、此の最も深奥なる情緒に於ても示される。

けれども一層鋭く時代の轉移を說明するのは、愛と共感との內向的方面に關する此の深い意味と並んで、全く正反對の價値判斷が（獨り客觀化的の價値判斷のみならず、）付き纏うてゐる事である。試みに彼の青年時代の忌憚なく打ち委せ行く態度、感情そのものに於ける至福、「地上の悲哀と地上の福祉とを負ふ」熱情を思ひ浮べて、更に之を一八一〇年に由來する一聯の言葉と比較するがよい。彼はクネーベルに言ふ。「予は不滅の神々の如くに生きて、歎びも惱みもない。」又「何ものにもまして予に尊く思はれるものは、予がその爲めに此の身を捧げ行く對象である。」更に「愛するは惱む所以である。愛せんと心を決し得るは唯强ひらるゝからである。卽ち、止むに止まれぬからで、これを意欲するからではない」と。彼の若い頃の表現によると、彼には樂しみも苦しみも本來同一事であり、質的に同一事、同一價であるといふが、かうした表現は悉く、內面的動搖、生活力の脈搏、炎上としての感情が彼に唯一本質的のものであつたことに基く。而してそれが如何なる特殊の內容を以て充されてゐるかは、後に最高位に据えられる實踐が如何なる內容を含むかを問題とせぬと同樣、否それにもまして問題とせぬのである。已に吾々の見た通り、彼には德行と罪障が鋭く分離されると同樣に、苦樂も分離される。愛が苦惱を齎すから、彼には愛は强制的にのみ忍受さるゝものと見えた。彼は纔に此の對立の彼岸に身を置いた。恰度以前には此の對立の謂はゞ此岸に在つた如くである。而して玆でも亦分化せる統一が分離を貫いて此の分化の克服に到達せんとする發展問題を反復する。彼が今對立するものは物である。從つて彼の献身は、感情を基調とせる主客の根本的統一に單にその自明的經驗的表出のみで足りた當時に比べると、一層長い一層犧牲の多い、且つ一層熟慮を費した道程を通過せねばならぬ。而して最後に愛の强制的性格に關する告白は感情と存在理想とを彼の晩年に見る意志的なるもの、悟性的なるものを以て置き換へた事を再び暴露してゐる。生活は今や意識された意志を基本としてゐるから、青年時代では統一的流露であつたものが强制と思はれるのも無理はない。蓋し一切の强制は二元的對立に基くからである。而して苦惱と結合せられたものを纔に不本意に我が身に受け取る事は老齡の唯理觀であり、一切の論理的幸福主義的對立關係を彼の存在の統一に融解した青年期とは全く隔絕した概念的推論である。

彼の現實と彼の理想とが此の樣に異つたものになつた點では、同一の勢力量が變形したばかりでなく、其處には如何程內容上の對立があらうとも、未曾有の統一をなせる生活の有機的に必然な、或る程度理念的に豫備的に形成される階次が存在してゐる事——而して此の生活は、生活自體として、機能として、發展として極めて統一的である故に、特殊の內容の統一的を全く必要としなかつた事——は彼

自身には勿論必ずしも自覺されてゐなかつた。彼は七十代で、明瞭に自己に關係させてかう言つてゐる。「たとひ最大の材幹と雖も、自己錬成を二樣に、而も對立する方面に亘つてこれを行ふ機關と衝動とを見出すと共にその錬成に於て矛盾を經驗せる者は、此の矛盾を全く調和せしめて對立を安全に結合する事は殆んど不可能である」と。これは充分理解が出來る。或る期間の直接體驗に於て吾人の意識を充すものは此の期間の內容である事は勿論である。從つてその事が正さしく此の期間を他の諸期間に對立せしむる所以となる。ゲーテの老齡期は、彼の青年期の旋律と確信に關しては何事をもはや知らんと欲しなかつた。時には明白に青年期を否定した。若しさうでなかつたとするならば、青年期の力が擧げて老齡期に推移した事が嘘になる。かく彼の生涯の個々の期間の自己保存は彼の充分に知つてゐる處である。けれども、彼の生活の特殊性、卽ち彼の統一をその期間期間の志向へ完全に誘ひ込むのは此の自己保存に依存する事の大なるを知つてゐるから愈々力强くこれを固執するのである。彼は曾てボアズレーの蒐集である古代獨逸の繪畫を知つた時、力强くもかう述べた。「これ迄吾々は自己存立の爲めに、老人を押倒さうとしてやつて來る青年を避けて辛くもその老の日へ自己を閉ぢ込めて來た。そして自己の平衡を失はざらんが爲めに、新しい攪亂的な一切の印象から自己を護らんと試みた。然るに玆に突如として予の目前に現れたものはこれ迄予には全く未知な全然新しい色彩と形態の世界で、之が予を予の直觀と感情との老いたる軌道から引き摺り出した——此の世界こそ新しき、永遠なる青春である。玆では予が何事かを言はうとするものなら、繪の中から孰れかの手が延びて予の頬桁を毆りつけるだらう。又毆られても文句はあるまい」と。精神過程がその存在基礎から分離して、謂はゞ一種の自然的生活を營み、個體の生命の特性へ何らの推論をも容さぬ樣な人々の發展とは異り、ゲーテの意識は常に直接にその存在から培はれて居り、彼の意識せられた理想上の傾向が轉換する場合には、それがいつでも全本質的な人格生活の發展を意味した。それ故此の發展は一方に於ては極めて根本的であるが、一方に於ては極めて深い統一及び切斷し得ない持續性に依り、又これ等統一及び持續性に向つて綜合される。それ故に彼はそれぞれの時代をそれ以前の一切事に全く顧慮する處無き献身の裡に體驗した。而も吾々の綜覽的な觀望は到る處で、此の變換形式を一貫して生きる特質——決して固定せず常に活動的な特質を發見する。

斯く青年期の構成が、深奥の本質核心を保持しつゝも、全く反對の老齡期の形式に變態した事が傳記的意味を持つ限り、此の變態は意識さるゝ事の稀なる前提の上に座してゐる。吾々は極めて屢かゝる持續的なものを直接且つ純粹には殆んど表現する事が出來ない。その故は、吾々は唯或る種の年齡範疇のもとにのみ個人の生涯を知るのみで——恰度存在の理念、卽ち純粹內容を常に理論的か實踐的、藝術

的か宗教的、體驗か思惟された内容としての形成に於て理解し得ると同様であるからである。此の獨自に存在する内容性の形を採る純粋内容の眞相は、特殊な、決して最後まで押し通されない抽象でのみ豫知し得るに過ぎない。その故は、かの範疇のみ謂はゞ手といふ風なものであり、この手で吾々は存在の純粋内容を掴む事が出來る。その際避け難い事は、かく掴む事に依つて此の純粋内容に形式を與へる事で、又若しこれをなさぬとすれば、此の内容に對する一切の關係は吾々から奪はれるのである。此の事は生活の觀察に於ても繰り返される。吾々は、苟も生活過程、實現を見た生活内容にして、一定の年齢的契機に屬せず、又その制約のもとに立たぬものを見ない。勿論吾々は斯る内容を體驗可能の範疇から全く拔き採つて、單に卽物的範疇、詩の範疇乃至無時間的範疇等のもとに觀察する事も出來る。併し此の内容が體驗されたものとして考へられる以上は、同時に、着色、部分と全體間の關係、移動形式に制肘されるを免れない。又此の内容は、その體驗の結合さるゝ年齢期の特性を現すものである。此の内容が現れる場合の着色たる絶對的統一性を單純な内容の要素、當該年齢期の極めて困難で、從つて同一の心的狀態、目的、内容が異れる生活階次の曲折ある總體現象を一貫して持續する事を主張するのが困難となる。此の困難は個人の生涯のいづれの歴史的叙述へも深く喰入つてゐる。併し吾々の事實上の取扱ひ方は此の困難に打克つ。但し證明可能の方法を以てするのではなく、

一種の衝動に依るのである。此の衝動は經過する生活の極めて雜多な、而して各それ自らに於て統一のある諸現象に於て同一のもの、一貫するものを識別し得ると信ずる。此の可能があつて次の事が言へる。卽ち、吾々はゲーテに於て、彼の青年期の現象と、それとは非常に異れる老齢期の現象とに於て不變要素として固執し、青年期と老齢期の背反せる生活形成を正さしく此の不變要素に於て純粋に且つ明瞭に示現する或る種の生活特性と生活志向を云謂し得る——恰も實體の固執が實體形式の變化に於て認知され、更に此の變化は實體の固執に於て認知される樣なものである。卽ち、以上の前提のもとに予はゲーテの生活階次内に於ける轉替の性質を更に最後の例を以て說明する。予は先に彼の青年期の氣質が彼を異れる氣分の間に急轉せしめたその氣分間の異常な背反性を述べた。歡喜が天に沖するかと思へば、忽ち奈落に沈むかと思はれるばかりの悲哀がある——これが彼自らの告白と、人々の證明とに據る彼の青年期の方式であつた。此の現象は、勿論弱者の氣紛れではない。弱者は或る内的方向に固執する力が缺けてゐる理由と、一々の刺戟及び生活一般を感受する爲めに、刺戟の不斷の變化並にその極端な對立を必要とする理由とで、一の内的方向から他の方向へ跳び替るのである。ゲーテにあつては、これと全く反對で强大な活力、生存の迫進的動性がその活動に餘地を作る爲め、又そのエネルギーの宿るべき處を造る爲めに、その内容の分極をかく廣く伸長し、かく小止みな

く此の分極間を搖動せねばならなかつた。放射せんとする單純な力としての生の分量が彼の青年期に於ては極めて異常であつた結果、絶えず、隔絶せる背反氣分の間を跳び替へて纔に轉勃たる氣分を逸散し得たのである。勿論かかる背反氣分に捉へられた彼の理性內容に對しては、かうした生の分量は屢手の施すべき樣もない、矛盾に充ちた愚かしいものであつた。けれども正さしく此處から愛情、善惡、快福は元來同一事であるといふ、當時屢述べられた感情が再び理解される。事實彼にとつてはそれに相違なかつた。といふのは、論理的には相反撥するこれ等一切の感情は正さしくその背反性あるが爲めにゲーテの生活機能の力强く統一せる河流に充分に廣い河床を提供するに役立つたのであるから。彼の青年期の此の活力定型が後年に於ては特殊の智力定型に變形された樣に思はれる。卽ち、此の變化は論理的にも事實的にも著しい矛盾で、彼の言辭は此の矛盾のうちに始終した。斯くて彼の若き生活はかの機能的分極は無時間的理論的內容性と姿が變り、搖動生活のかの感情を主とせる緊張間隔は相互に排擠し合ふ原則間の緊張に結晶した。彼も亦此の矛盾の事實に就いては明瞭であつた。此の矛盾を「遍歷時代」の中で客觀的に可なり詳細に辯明せんと努め、此の矛盾に注意されては、已に引用した如く、每日每日、昨日言つた事を繰り返す爲めに八十歲までは生きてゐるのではないと答へた。彼と深く交際した或る人が驚いて言つた事であるが、事物の一觀察に彼を固着させる事は到底不可能で、一の觀察に住したかと思ふと、已に早や全く異れる觀察に移つてゐるといふ事である。勿論彼は自己の思惟の、個性的先驗的な最高の方式的統一を意識して居つたので、相對的個々相（勿論これは尙依然として極めて高い普遍性を有するが）に於ける矛盾は此の統一に對抗するだけの力がなかつた。一方では此の矛盾は、しつかりした極めて高い心的態度にある場合の彼には、人間と世界との關係に等似な表現と考へられた。又彼が思想構成に際して常に極端にまで突き拔け、制限を有せぬ普遍性にまで進んだのは、かかる絶對性を局限し得べき筈の反駁乃至反證が創作の瞬間に於ては當然否定者として現れ、常に肯定を執持する彼の性質は、これに對して抵抗したからである。年齡の重ると共に愈々斷乎たる力を增した肯定相の尊重、一切の輕々しい批評乃至異議の拒否と一切の思惟方向の絶對視、一般化（これは不可避的に彼の言葉の間に矛盾を齎したが）との間には深い關聯が成立する。價値と生活とは一直線に無限界に通ずる唯一の思想に支配される樣には出來て居らない。（此の事も彼は抽象的に極めてよく知つてゐた。）彼は此の點の不備を補うのに個々の格律の局限に依らずに、一格律の局限されざる普遍性に對して反對の意味にある他の格律の同樣に局限されない普遍性を立てた。而して、彼の精神生活が此の形態を採つた事はかの偉大なる發展方式の最高にして最普遍なる完成であり、彼の青年期が生命、生活理想、感情として所有した一切は此

の方式に從つて彼の老齢期までも生き延び、玆で理論的或は實踐的内容の形で一つの客觀的世界を建設した。

此の轉向を時代の上から確定する事は元來傳記的興味で、從つて予の問題とは緣が遠い。殊に――既に屢ゲーテの精神的特質に於て著しく現れた如く――決定動機が彼にあつてはその眞に主宰力を獲るに到らぬ前から夙く準備せられ、それが主宰力を獲た後でも前時代の動機は決して死滅せずして常に機に應じてその余韻を響かせるからである。此の事は、彼の性情がその異常なる全變遷を一貫して同じく異常なる連續性を生かし續けた謂はば手段である。彼が高齢に於て「反復する思春期」、卽ち更新せる青年期の生產力と呼んだ事柄は此の範疇の特に濃厚な現象に外ならないので、此の範疇は唯、内容性から機能性へ移つたに過ぎない。卽ち、早期の内容がその力と旋律との範疇へ復歸して生じたもので、此の力と旋律が無かつたら到底かの生產力も復歸し得なかつたらう。さういふ限り、彼の全生涯は元來此の「反復する思春期」の標號に現れて居るので、此の「反復する思春期」は往々固疾狀態から急性症的に認知される狀態に移るに過ぎない。而して此の思春期は異れる時間面に延びてゐる相似像を有する。此の對象には一語で適切に眞相を表現する言葉がないが、つまり、内容からすれば後に來る時代の關聯に列すべき狀態乃至思想を豫め彷彿する事である。生の現在が、一切の機械的事物と比較されない仕方で、その過去と未來を自己の裏に包攝するのが一般に生の本質であるが、至純なる生活そのものを生活した彼に於ても現在の刹那は過去と未來との中へ沒入したのである――これは、現在の過程、現在の力動性の一形式で、かの眞過去の存續と眞未來の彷彿とは此の形式に對して、現在の内容に於て指示される表現で、此の形式は恐らくゲーテの不滅の信念の一素因であつた。極めて特色のあるのは、玆に論ぜられてゐる彼の生涯の大轉向が此の不滅の信念にも勿論顯現される事である。後に再び觀察さるべき有名な表現に於て、彼は「吾々の存續の確信」を「活動の概念」から發生せしめた。曰く「予が若し最後まで息むことなく活動するならば、自然は予に存在の他の形式を賦與する義務がある云々」と。而してそれよりも半世紀以上前にかう書いてゐる。「君よ、人間が今生に於て開發する事の出來ない極めて多數の精神的素質が人間の裡に宿り、此の素質はより善き未來を暗示し、調和的存在を暗示する。此の點で君と僕との意見は一致する」と。此の兩表現には同一の動機がある。卽ち、現在は現在自らのうちに存在して居るが、併し解かれず、實現されず、未來に亘つて體現し得る者であらんが爲めに未來が要求されるのである。併し青年期にあつては、未來が現在を繼續すべき資格は、「調和的存在」、存在の完成、感情性の「より善きもの」であつたのが、老齢期ではそれが活動と變つて、此の活動に對しては青年期の存在基礎が謂はゞ影を潜め、且つ此の活動

はかの青年期の質的な感情成果を問題とせぬのである。

生活の此の連續性、換言すれば、生の此の過去未來への連亙あるが爲め、精神的內容にのみ向けられたゲーテ研究には、詳細な年代記は、多くの點で必要でも無ければ可能でもない。それのみか、眞の傾向を見る上に却つて誤謬を來し易い。それだからとて彼の偉大な發展階次の順列の異常なる意義が否定されたと考へるのは全く背理である。されればこそ、此の章での考察に於て問題になるのは、ゲーテが——恐らく偉大な人物の何者にも見られない此の純粹さを以て——彼の存在の理念を有機的に生きた發展序列のうちに實現した事である。否寧ろ、彼の理念は最初から決して概念的不動性のものではなく、生活の理念であつたのである。獨り彼の種々なる所信の現るゝ時の序列に於てのみならず、彼の生涯の區切りの序列に於ても時間に支配されない順序、意味の上だけの順序が現れてゐる。今述べた轉向に對する意圖は微かながらも已にワイマル前期に現れ、全體としては伊太利旅行後に決定的となつた事を述べて上述の事實を强調するのは、吾人に傳記上の興味を與へる爲めでなく、彼の精神生活の實際構造に重要である。人は此の伊太利旅行を見做して新しい生活時代の發足點とし、實際の意味ではゲーテの生涯の後半全部の決定繩規と見てゐるのが常である。此の事は或る特殊の意味、正確に言へば、消極的の意味でのみ正しい樣に考へられる。此の旅行の一切の效果、新展望、材料上の收得にも拘らず、此の旅行は第一に一生活期の終結で、從つてその意味に於てのみ新生活期の始りであつた。予が先に引用した如く、伊太利は彼には渴望の飽滿、堪え難くなつた矛盾の解決、此の自然と藝術の觀照に依つての彼の最深なる生活意義の實證であつた。けれども「羅馬悲歌」の樣な、直接影響の中から生れたものを除いて、彼の後年の詩作に注目するならば、その疇なき樣式と美のうちには、彼の伊太利生活の痕跡を見る事が極めて尠い。「ベネチアの短詩」にして既に伊太利の空氣が漂うてゐない。認識と實行に向つた分化せる新生活期は、時からすれば勿論伊太利から歸つた後に確定的に現れたが、內面的に言へば、外的經驗とは比較的關係のない組織力が促進した一進化階次である。彼の最初の偉大なる期間がかくの如き完成的結末を見出したのは彼の生涯の異常な幸福に屬する。それ故に、彼が約四半世紀後に深い感動を以て告白して、ボントモルを踰へて鄕里に還つた以後は最早唯の一日も眞に幸福な日を經驗しないと言ひ、而もローマ滯在後一年にして既に、伊太利は自分にとつて最早何者でもないといふ露骨な宣言を以て第二回の伊太利滯在を中止したのは決して矛盾ではなくして、これこそ上述の解釋の有力な證明である。かの所謂「彼の存在の金字塔（ピラミッド）」はローマに於てその一頂端の發見を了して、更に進んでの建設はその傍に橫る新しい基礎の上に行はれたのである。若きゲーテはローマに於て死んだ。而して彼が再び伊太利の地を踏んだ時、吾ながら幽靈の樣な氣が

したのも理解が出來る。此處で獲たものが彼の新生活への入口であるとはあり得ないことである――唯古き生活の出口に過ぎなかつた。彼は此處で後年の發展に於て指摘される多產的な一聯の內容を獲た事があるにしても、生活の過程に關しては、伊太利は、旅行前のワイマル時代の故障、矛盾に依つて極度の自我肯定に刺戟された在來の生活意向の頂點であつた事は已に予が說いた如くである。彼の生活は最早同一の方向を指して進まなくなつた。それは新しい形成に轉向せねばならぬ事になり、それに以前の時代が、その內外の完成に於て、最早それ以上に出られない程の調和的絕頂に達したので、尙更自由に截然と此の轉向が行はれたのである。彼はローマからかう書いてゐる。「若し予の傍に、予と生成を共にする新しき者があつて、予が彼に予の增大し行く知識を途々語り傳へ得たならば、如何に幸福だつたらう。その故は、恰も旅宿が夕べには旅の疲れも樂しみも呑みつくす樣に、生成の結果が生成の快感を結局呑みつくすからである」と。卽ち、玆で再び彼の青年期の方式、卽ち一切の單純なる結果に對して、換言すれば、最後的に完成して提示される內容に對して、過程の優秀な價値、個人的生成の價値、發展的存在の力動性の價値が言明されてゐる。此の熱情の籠つた主觀主義的理想觀の調子はローマに到つて永劫にその響きを止めた。併し彼の青年期の方向と緊張が最高の解決と完成に迫進した刹那に伊太利が彼の青年期の「理念」を斯く形成する爲めに現れたのは、彼の運命の典型的幸福と考へ得ると共に、彼の歸來に當つて彼を待ち受けた苦痛も亦均しくかうした結末を好都合にした。吾々は當時ワイマルが彼に與へた失望、友人達の冷淡な應待、彼の當時の存在と意圖に對する理解の全的缺乏に關する激しい慷慨を知つてゐる。彼はまだ青年期の完全な豐かさと意氣とを以てワイマルに到着した――而も閉ざされた心の扉の前で踵を反さねばならなかつたのである。疑もなく當時彼の裏なる一絃が切れたが、それに對しては再び結び繫ぐよすがもなかつた。故に、それ以來彼が發表した最も切實な、最も感激的なものも、一種の抑制、卽物性、否主知的調子を持つたのである。けれども此の經驗が彼には如何なる苦痛を齎したにせよ、運命は此の苦痛と共に新しき時代の助產婦となつた。そして彼の生活はその內部の旋律と理念的必然性から脫して此の新時代に迫進したのである。主觀的存在の理想を客觀的な活動と認識の理想を以て置き替へた此の時代は、その成業と心的基礎を最早感情に委ねる事が出來なくなつた。今となつては、かの諸關係の變化せぬ調子に何の用があらう。此の調子といふのは、完全に感情と無條件的獻身とに依つて決定されたものであつた。「予は極めて打ち解ける性情を持つてゐた」と言つたシュトラースブルク時代から始つて、「予は爲し了へ、或は爲し得る最善のものを秘せんとする性向をいや益しに感ずる」といふ老齡の告白に至る振撼的發展の消息が玆にある。此の永い戲曲のやま（Peripetie）はワイマルへの歸還にある――けれども彼が內面から

行かねばならなかつた道を外面から切り拓いたのは、よし荒々しい手を以てしたにもせよ、運命の仕業であつた。彼自身は、彼の運命の神秘なる一定軌道であるものを單なる外在的因緣に歸し、彼の歸還後の苦悶と懊惱を指して、「外界と接觸する感覺が慣れねばならなかつた缺乏は餘りに大きかつた。從つて精神は目を醒してその缺を補うに努力した」と言ひ、それに續いて彼の科學上の努力の說明が出てゐる。此處で、彼が眞實決定的事項、卽ち單純な「埋め合せ」以上の肯定的のものである彼の生活の進化を見逃し、或は默殺してゐる事の如何を問はず、彼と運命との關係に於て、世界に對する彼の關係の方式が反復されてゐる。運命は、ゲーテが單に自己の內面的衝動に隨いて行きさへすれば、所謂「解答する相似像」を世界に於て見出すといふ結果を齎し、又彼の自律的思想は、謂はゞその獨自の正鵠と眞證を自ら伴うと同樣に、彼の實際上の生活發展にも運命が控へてゐて、彼の有機的必然的に生成する各時代に「解答する相似像」を與へた。換言すれば、各時代が畢竟內部から經過せねばならなかつたと同樣に、運命は純粹に外的必然、外的刺戟並に提示に依つて各時代を經過せしめた。伊太利旅行とワイマルの失望とは、彼の新しき道の低徊顧眄なき斷乎たる態度が要求した通りの純粹さと明白さで彼の靑年期を閉ぢる手段を彼の手に賦與したのである。

偖てゲーテの老齡期にはこれ迄の發展の上に第三階次の徵候が顯著である。此の第三階次を以て終結する精神上の系列が恐らく最も明白に示されるのは、形式の概念が此の全發展中に占める意義に於てゝある。予は先に、如何にして無限が形式を取り得るかといふ異常な問題に論及した。此の問題の解決史に於てはゲーテの本質の存在と創造性とは特殊の地位を占める。感情の激越する場合、或は道德の完成を求むる場合、享樂の欲求、力の實證を求むる場合、又は超絕者に對する關係を欣求する場合、凡ゆる與へられた有限の限界を越えんと努めるのは、獨り人間の典型的な憧憬に限らない。已に實際に於て吾々は無限者に捉はれてゐるのを感ずる。卽ち、吾々の周圍には世界過程があつて、それは各面に亘つて無限に延び、吾々は謎の樣に、又決して吾々の一身的存在が嚴格に局限さるゝ事なく、此の世界過程內に住つてゐる。又吾々の內部には無數の關係を通して吾々に導かれ來る生活過程がある。此の過程の刹那的擔當者は吾々であり、その無限への流れは吾々の生活を通して導かれる。此の二重の無限、卽ち憧憬と現實の無限とは均しく二重に構成さるゝ對立を見出す。無限の系列への此の編入及び個體としての持續性に對する限界消失にも拘らず、吾々の個體である事には間違ひない。つまり吾々は、吾々の本質のかのぼんやりした圓周が、不動の、取り違える事のない、而してその變化に際しては自身にのみ隨順する中心によつて總括されてゐる事を感ずる。吾々の自我は無限にして動搖する存在材料から、よし實體的立體的形式としてゝはなくとも、機能的性格的形式として構成されて

ゐる。けれども吾々の欲求は之を踰えて尙、物、思想、存在內容一般の確乎明白な形式を得んと努力する。吾々がこれ等の形式を獲んと憧憬するのは、吾々の存在がかの停まる處なき無限へ沒入する事を防止するからであり、吾々の內外の觀照の爲めの支持點、吾々の理解と活動の倦怠を防ぐ支持點としてゞある。現實と理想としての此の兩範疇は不斷の爭鬪狀態にある。その故は、一切の形式は一切の他者に對する限定、完結、限界を意味するからである。それ故、生活の力と情熱とは、絕えず生活の形式化を乘り越え、その限界線を搔き消し、此の相對的一時的な限界線を越えて、內外に亘つて無限、限界を撤せる境、卽ち無形式の境に吾々を投げ込むのである。而して、吾々が此の論理的矛盾にも拘らず、吾々にとつて缺く事の出來ない自己の形式化及び世界の形式化へ無限者の贈物を流し込んで、而も此の贈物の豐かさと力とを保存し、一方では形式をその靜肅と嚴正のまゝに保ち得て、而も凝結、偏狹、單純なる有限に墮する事がない――これは實に最も深い生活問題一般の形式化の一つである。作者の全面的な且つ流れて止まない生活强度を裏に含む凡ての藝術品、意味の深い宗敎の凡ての敎理、吾々の實踐力に包括する處の極めて廣い至高の目的を與へる凡ての道德的規範、凡ゆる眞正の哲學上の根本槪念――これ等はそれぞれ世界と人生の無限を一形式に包攝し、一方にある存在の永遠に進展して息まぬ無盡なるものと、他の一方にある明確なるもの、形式に有限化するものとの間の矛盾を如

何にかして解決せんとする方法である。偖てゲーテの青年期は――その根本的傾向に從へば――一切の强調を生活の無限の流れに置いた。その爲めに、たとひ自制、總括力、理會力が彼には本來充分强く、シュトゥルム・ウント・ドランングに於ても見る樣に、形式化されない存在の獨占にはならなかつたことを承認しても、やはり屢彼の青年期は無形式に流れた。併し彼の生活の不安定なる振子動、此の時代を所謂「憧憬的時代」と自分で言つてゐること、典型的詩篇「旅人のあらしの歌、」シェークスピヤに對する熱情、ケストネルとアウグステ・フォン・シュトルベルクに宛てた手紙の文體、一切の定型と窮屈な傳統に對する反抗――これ等凡ては如何に彼の內面の旋律が限界の不斷の超踰、形式の破碎、無限として感ぜられた生への沒頭であつたかを示すものである。ワイマル時代最初の十年の半ば頃、此の內的無限への限界の最初の影が射してゐる。卽ち「噫ロッテよ、人間には何が出來るか！　人間は何事を爲し得ようか！」と嘆じてゐる。而してこれを言ふ數月前に「依然として未來の進路を不可能事の裡に見る」旨を書いたが、その言葉の裡には一種驚異の調子が漂うてゐる。青年の樣に主觀的現實からばかり生活する者は容易に客觀的不可能事に立ち入る。自己の主觀から出發すれば客觀に局限が無い。主觀は眞實自己の萬能なるを感じて、局限を感ずるのは偶然の場合に過ぎない。然るにゲーテの高齡時代は客觀への永き沈潛の結果として生活志向を、形而上的事象から外面的

實踐事象に及ぶまで「可能事」に制限したのであるが、不可能事、無限者が一種の觀念的實在としてのみ現れてゐる上述の言葉は既にその序曲であつたのだ。――扨てかの無限者が吾々の欲する如く、無形式、無形體として考へられるとすれば、古典の標識下に立つ新しき生活期は、その强調を第一に形式の上に移した。伊太利旅行に於ては未だ形式の優勢乃至原理間の反目が顯著となる程度に達してゐない。彼の青年時代が培ひ來つた直接なる、一切の限界の上を流れる力强き生活の流れがそこに至らしめなかつた。ゲーテの伊太利時代は人類が達成した最後の完成の一つである。その故は、此の時代は、かの大なる二律背反の調和統一點を示すからである。即ち、茲でかの生の感情的無限、形式に現れた生の局限の無意識性は明白な詩的な確實性と彫刻的形態、持續的統合的格律を獲得した。而して逆說的表現が許されるならば、生活は形式即ち、有限にその場所を發見したからとて、以前に劣らず無限であり、形式がその爲めにぐらつきもせず、不鮮明ともならず、形式そのものの特殊價値に背きもしない。といふのは、形式は、かの不斷の氾濫であつた生活の流れを自己のうちに收め取つたからである。茲から觀るとゲーテの伊太利滯在は更にゲーテの生涯の一天頂である。恐らくイフィゲーニェはその最も完全な表現であらう。イフィゲーニェに於ては少くとも二個の主要人物に於て限りなく豐かな生命、感情、熱情がある。而して之が內外の形式の美とまとまりに依つて收め取られ、而もそのうちに影を沒する事がないので、吾々は兩原理の深い精彩ある反目――そこにゲーテの青年期と老齡期とが衝突する――を恰も自明の事の如くに調和として聽くのである。タッソーは色々の點で、此の調和點を越えて形式の優勢に導く足どりを描く。尤もタッソーといふ人物自體に於ては、生は未だその全無限性に於て、その力動性のそれ自體無形式な迫進に於て現れてゐる。世界は、生活が落ち着いて安定を得べき何らの形式をもタッソーに提供せずに、タッソーは嚴然と形成された世界に對立してゐる。而して此の形成がベルリガルドの宮邸法律に、或はアントニオの性格の固定的渾成に、それとも又王女にのみ具つてゐると思はれる「節度」に存するかは問はない。タッソーは事實「あらしに搖動する波濤」に過ぎない。彼は不動の形式に當つて碎けねばならぬ。既に藝術的文體的表現がこれを象徵してゐる。彼の科白の裡には、無限無量の境へ迫進する熱情が漲つてゐる。その彼が、常に調つた定形辭句を語つてゐる人々をどう相手の仕樣があらう。尤もイフィゲーニェに於てさへも已に論理的對話の鋭い辯證法が缺けてゐるが、併しまだ全體を包んで且つ主要人物に集中する心情の溫さが對立を總括し、感情は實踐的倫理的調子、定形辭句的語法と均衡統一を保つてゐるのに、タッソーではそれが分離してゐる。茲で再びゲーテの生活の大危機が强く對立をなして分れてゐるが、單純な生活强度の無力、一切の限界を絕してその融合狀態に於て形式をなさぬ感情の無力は決定的である。即ち、ア

ントニオに依つて代表される實踐的規範的性質、その他の人物の辭令式擧動に終始する思慮が勝利を獲得した。此の勝利は結局タッソー自身に依つてさへも正當のものと認容された。それは兎も角、闘爭は依然として闘爭であつた。青年特有の生活志向（正にタッソーの青年である點が極めて屢强調されてゐる）は決定の力ある生活原理を備へては居らぬにしても依然、力と權利とを喪失する事なく、他の大なる生活原理に對立してゐる。然るに「庶出の娘」に於ては作の內容を主觀客觀の孰れの點より觀るも形式の勝利は最初から決定されてゐる。但し屢誤つて非難される樣に、此の作には內面的生活が缺如してゐるといふ意味ではない。けれども玆では生活は最早イフィゲーニェに於ける如く、可能的生存の形式と好ましい調和に依つて和唱する感情として、或はタッソーに於ける如く、力强く此の形式を包み漲つて而も力無く了つた感情としてその自治的存在を營む事をせずして、一途に固定した社會的鑄型のうちに經過せん事を求めてゐる。而して問題の全部は唯、鑄型の如何に係る。此の作では（かのイフィゲーニェの常に神に向つてゐる、深い宗敎的特質乃至自己の內部から永久に不滿に宣告されたタッソーの性格に於て暗示される樣な）人間を立ち圍む無限の面影は毫も窺ひ得られない。從つて無限と形式との深い對立はその和解の言ひ知れぬ幸福を歡ぶ事も出來なければ、その反目の力を相互の衝突に於て示す事も出來ない。唯悲劇の存する點は、客觀的な、謂はゞ歷史的な運命の力に依つて女主人公に課された生活形式が彼女の憧るゝ生活形式に對立する事である——併し、彼女の憧るゝ生活形式も均しく客觀的な、歷史的に鑄刻されたものである。藝術形式そのものも此の轉向を認識せしめる。卽ち、イフィゲーニェ及びタッソーにあつては猶、主觀的直接性の抒情的音調が響いてゐるのに、「庶出の娘」は、孰れかと言へば彫刻的である。而して純熱情的なる故を以て常に限界の不定性を含んでゐる色彩性に代つて線的樣式が現れて來た。無限者と形式との間の此の過程は、感情の生活强調が、認識と實行の生活强調と交代したかの發展に對する謂はゞ抽象的表現に過ぎないのは明白である。その故は、感情そのものは形式の原理に追隨せずして、寧ろ色彩と强度の原理に追隨する。感情は謂はゞ內在的無節度性を有し、此の無節度性には恐らく唯力の喪失、或は他の方面からの障害に依つて限界が現れるだけである。それに反して凡ての認識と實行とは最初から形式に立脚し、此の認識と實行とは、必ずしも實際の精力（エネルギー）を伴はぬにしても、その意味と共に與へられてゐる鑄型、確定性に立脚する。ゲーテには一切の問題が、生活と直觀の爲めの形式を獲得する一事に歸した時代に當つて、一切の形式の典型として古典藝術が立ち現れた。彼が此の發見に陶醉して、此の樣式に隨順しない內容の存在する事を認めなかつたのは不思議でない。併し、ゲーテの此の錯誤の心理的結果として、今日でも尙多くの人々には、古典の樣式に盛られないものは、本來全く形式を有しない

かの様に考へられるに至つた。

ゲーテの「形式」尊重は年齢の重なると共に愈々截然と現れて、畢には形式拘泥主義に流れる迄になつた。彼には、個々體を超踰して、その相互間の結合が益々重要となつた。而も此の結合は一面に於ては、人間材料と興味材料からなる形成に過ぎず、他の一面に於ては、個人を他の個人に對して限定し、それに一定の地位を指定する事に依つてのみ達し得る形式を個人に與へるのである。彼は「合目的性」を愈々高く評價した。而もそれは實踐世界の形式的構造としてゞある。といふのは、一體此の形式を採つて行はれる行動が如何なる目的に役立つべきかを往々説明しないからである。彼には「秩序」が益々絶對的必要と思はれて來た。その結果、彼は率直に不秩序よりも寧ろ不正義を忍ばうと宣言するに至つた。而して自然そのものも今や――彼には自明の事であらうが――それと歩調を合せる事になつた。即ち

汝若し樹木を植ゑなば樹列を正せ、

自然は整頓せるものを榮えしむるが故に。

彼が政治的社會的事件に就いて屢極めて保守的に、否反動的に述べた後年の言葉は階級利己主義と何の係りもない。それは一面に於ては生活の肯定相に活動の餘地を與へんとする傾向に基いてゐる。彼は一切の革命思想、無政府思想、過激思想に於て、破壞をのみ庶幾する障害、否定相、力の浪費を見た。彼は秩序を肯定的生活活動の條件として使用せんと考へた。それから他の一面に於ては、上述の表現で彼は秩序と形式的組成の宇宙的原理を人間關係へ轉用したのである。彼が嚴格に宗教政治的な、貴族政治めいた技術を以てのみ之を實現し得ると考へた事は勿論議論の餘地があり、その時代の歴史によつて制約せられる事である。それだからとて最後の志操上の動機に疑の餘地があるのではない。今でも彼の論駁は、過去（それは彼自身の過去をも含めて）と未來に亘つて、純精神的無形式、無秩序に向けられる。彼には渾沌は仇敵に外ならない。彼は六十代に、これをルソー時代の「重なる病患」と名附けて次の如くに言つた。「國家と慣習、藝術と才幹が自然とかいふ名で呼ばれた得體の知れぬものと一緒に一つ粥の中へ煮込んで掻き廻すがよいのだ」と。併し彼は自らに對する此の時代の意義を極めてよく認知してゐる。といふのは、彼は上の言葉を續けて、「予も亦此の流行病に襲はれたのではなかつたか。そして、此の流行病は、予には今他の如何なる方法でも考へられない予の本質の發展に對して良好な寄與をなしたではなかつたか」と言つてゐるからである。而して殆んど同じ頃、精神生活に於て支配的な勢力を持つてゐた空想に就いて意見を述べて言ふ。「之は一切を包括せんと欲し、その爲めにいつも元素的なことに迷ひ込んで自らを見失ふのである。個々の點に於て無限

の美があるにはあつても、（缺如するものは全體の形成である）あてどなき未來に新しいものが發生する爲めに自己の周圍に世界が朽ち果てゝ元素に還元せねばならぬ有樣を眺める時、吾々老齢者には狂せんばかりの思がある」と。形式の此の倫理的活力的評價は、圓熟時代の彼が藝術内容に對抗して藝術形式に賦與した既述の過重と深い關聯がある。卽ち、對象を重大視するのは藝術品そのものの完成の障碍とさへ思はれた程に、藝術形式を重く視たのである。藝術對象の獨自の價値は或る程度、藝術形成に依つて此の對象に課される限界を越える。對象はその獨自の意義に從へば、實在の連續する無限の相關中にある。藝術は此の對象を切り出して緣取つた繪と爲し、對象のあるがまゝの存在及び存在の價値延長に缺けてゐる限界を對象に賦與してこれを形成する。斯くしてゲーテ後年の藝術觀の純粹性もその基礎を彼の老齢期の形而上學に置くのである。

此の點に於ても彼は或る程度典型的人間として現れる。唯、普通は力の減退と平行するかかる轉向は、彼にあつては全く積極性を有する事、卽ちエネルギーの喪失から由來せずして、唯その表現を更へるエネルギーの有機的發展から由來する階次である事が異る。一般に青年は多く形式を問題としない。それは、その單なる力の蓄積だけで凡ゆる境遇、要求に滿足を與へ得ると考へるからである。老人は確と刻まれた、理想的或は歴史的に既存する形式を求める。それは、此の形式が彼をして常に新しく致される力の消耗、種々な疑はしい試み、全然自己の受くる責任を免れしめるからである。けれどもゲーテにとつては、此の事は、彼の力の現れる新しい原理的構成に過ぎない――それは恰も、神に對する歸命と謙讓が多數の人にあつては唯自己の弱さと賴り無さから由來するが、眞に宗教的な人間に於ては正に彼の最高なる中心力の體現である樣に――。斯く無限と形式とに置かれる範疇上の强調が青年と老年とに分れるのは、一つは彼此の生活の個々相が生活總量に對して有する割合の差に歸する。青年が何を體驗しようと――その程度は彼の前途に横る豐富な未來の展望に於て全く測定されない。生活は發展の際涯を定め難く、今後無限に雜多なるものを齎すだらうから、個々の成業、經驗の意義は、如何に偉大であつても、有限量は無限に比すれば零に近い樣に、事實考慮するに足らざるものとなる。然るに老年はその前途に限られた視界を持ち、略確實に生活の限界線を引いてゐるので、その意義に於て決定され得る個々の經驗が分子となる分數の分母は有限大となり、從つて經驗そのもの、卽ち分數全體が有限となる。斯くして苦樂、成業の成否は生活全體の明示され得る割り切れる部分となる。此の部分は青年の前途に横つてゐる無限内に全く決定不可能なる部分として姿を沒してゐるけれども、老年にあつては決定的に一定の經驗を背後にしてゐるのである。生活の個々相と全體間の此の區別ある關係を指摘しさへすれば、青年の生活原理としての機能的無限と、老年の原理として

の秩序を要望する確定的形成が、やはり此の關係に源を發する事は直ちに明瞭となる。均しく、此の契機に由つて明瞭となるのは、茲では決して力の量の變化に基かずして唯、力の量に就いての觀察の變化に基く生活相の交代が存在すれば足りるといふ事である。

だが恐らく此の點にゲーテの全像に於ける特殊の消極相の說明が存する。予は本書中で幾度となく彼の生產の包括的方式として次の事を揭げた。卽ち、創作、構成、實行に對する彼の自然的な、發足時點から動いてゐる衝動と、所產、結實に對する價値判定の規範との間には人間が普通に所有するよりも遙かに深い自明的調和が行はれてゐる事、理論、詩作、道義に亘つて規範に準ずるもの、卽ち彼の直接なる衝動の動くまゝにして居ればよかつた事である。彼がその最困難事、その最完全事さへ、所謂「遊樂しつゝ」「好事者として」爲し了げたのは確に茲で意味されるゲーテ、卽ち「理念ゲーテ」に妥當する。併し主觀的生活表現と物及び規範の客觀性との間の此の調和から獲られる推論、卽ち彼の所產の一切は客觀的に完成せるものである事は、事實に依つて決して確證されてない。實に吾々は偉大な創作家の何人に就いても、その作がゲーテ程多數の劣作、理論上にも藝術上にも不完全なもの、殆んど何の故なるかを知り難い程の不充分なものを含んでゐる者のある事を知らない。尤も茲では最高級の造形美術家は最初から比較を許されない。それは彼等にあつては、その藝術の特殊性の結果、ここでは、全く無價値のもの、所謂「神に捨てられたもの」が、謂はゞアプリオリに除外さるゝか、さなくとも極めて稀にのみ現れ得る程度で、彼等の才能は單なる手腕に托乘するからである。けれども、よしダンテ、シェークスピヤ、バッハ、ベートーヴェンが、彼等の一般藝術的階級を定める成業の高さには決して凡ゆる制作を以て到達したのではないにしても、劣作の程度はこれ等のいづれの人々にもゲーテ程大きくない。例へば彼の劇場の演說、個人に宛てた詩作、革命劇に限つて見ても、そこでなした散漫な陳腐と沒詩趣の總量は全精神史の最も驚くべき事件に屬する。勿論、彼が統一體、全體として占めてゐる地位はそれが爲めに累を蒙る事はない。蓋し、此の地位は藝術家にあつては、彼の成業の平均に依らずして――容易に理解し得る制限を以てゞあるが――全然その最高成業の高さに依つて定まるからである。此の高さから著しく隔りあるものは、凡て（「惡い方の例」として擧げられるに非ざれば）全く制作されなかつたと同樣に瑣末なるものである。とは言へ、ゲーテに於ける此の價値虧缺の現象は一種の謎で、それに對しては充分に滿足なる解決が予には欠けてゐるのである。予が本書の初めに述べた見地は成程かの消極的價値に謂はゞ生活事實としての可能的地位を與へるが、併しゲーテはかかる價値の低い狀態の主觀的生活過程を生活したに止らず、同時に、或は少くとも後には、自らの所產に向つては、批判者として對したのである。それで、人間が自己の生活を統制する手段

たる此の制遏が用を爲さなかつた事は此の生活自體の動搖といふ事では充分に說明されない。尤も一種の不羈放逸なる性情をも考へられぬ事もない。その性情は任意の刺戟を所緣として何事かを提起するが、それは單に此の刺戟と和解する爲めで、結局公衆と自己とに對する一種の反語（イロニー）を以て提起するのである。けれども、ふうした論證は散見的に現るゝ筒處にこそ當嵌れ、問題になる制作全般に亘つて眞理であるとは、已にその異常な範圍の爲めだけでも言ひ難いのである。これに反して形式そのものゝ高度の尊重が恐らく此の問題の鍵鑰ではあるまいか。殊にかの空疎無價値な所產が、殆んど專ら老齡期に於て見られ、而も一方に見られる重大な活動は以上の消息を單純な老衰を以て說明する事を許さぬからである。結局彼は、主觀生活と客觀存在內容一般に形式を與へ、各事物を美學的、樣的式な乃至は理論的一般的な種類の規定關係內に編入せんとし、最瑣事さへも何等かの仕方で構成せんとした結果、內容の超樣式的意義は往々にして彼の興味を失うに至つたのである。その爲めには、如何にもよく此の場合に當嵌る事で、少からず不可思議な事、卽ち彼が老齡に於て全く價値尠き文學に對して示した言ひ表はし樣のない寬容を考へて見るとよい。現代の或る偉大なフランス詩人は曾て平凡な詩作に對して「詩を作ることはいつでも極めて好ましいものだ」といつた——而もこれは決して皮肉な意味で言つたのではない。それは、創造的な人物が屢世界材料の構成に對して、彼の創造的形式に準據し、單に形式としてのみ有する興味で、此の興味は單純に享樂する者の容易に同感し得ないものである。然るに予に著しく特色ありと感ぜられるのは、ゲーテが形式秩序の理念に發展するに到つたその源たる、かの活力の理念、卽ち無限者の原理と志向とを探知するや否や、彼の藝術上乃至精神上の形成に對する興味は寬容の正反對に導くといふことである。此の原理、志向の現れてゐるのは、その態樣が相異り、隱現の度を異にするが、ジャン・パウル、クライスト、ヘルデルリーンに於て見る。その或る者に於ては、無制限、局限超踰が外面的に明確であり、或る者に於ては內奧の生活努力に過ぎないにしても、ゲーテの老齡期の立場から觀察すれば、此の三者の本質的差別は形式の方面にあるのではなくして無限の方面にあるのである。斯くして正さしく彼等の意義がゲーテの嫌惡を一層截然たらしめねばならなかつた。——然るに凡ての群小作家の內容上の無意義は正さしく精神的生活形成の謂はゞ樣式性を比較的强く際立たせたのである。ゲーテがこれ等の群小作家に對して示した寬容こそは、彼自らに對しても持つたものである。彼は無限の中へ流れ込む生から、卽ち內容の局限決定の一切を此の無限性のうちに解消し去る生から、一瞬間を奪ひ取るのに、常にかの無數の隨時的制作の一つ一つを以てする事で滿足した。此の事は形成感覺の過大と言はれても止を得ないかも知れない。それは、形式は、究局する處無限と考へられねばならぬ生の實體の完成以外、決定的意義を持ち得るか

否かは依然疑問であるからである。が、此の事は吾々には肝要な決定事項でない。併し、彼が不秩序よりも寧ろ不正を忍ばんと欲した如く――但し一切の秩序はその究極目的とする處は正しさでないかどうかは問題であるが、――彼は或る年齢以後は（パラドックスの樣ではあるが）一瞬の生活でも、かかる形成を可能ならしめる場合に、拙劣な詩作でも、作らぬに優るとなした――而して、彼が活動要求の究局價値と内容意義とを問ふ事なく行動し、活動せねばならぬと常に強調したことも、無限なる世界材料に局限を與へ、何らかの秩序と形式とを與へる加工に向つての同樣な努力に屬する事はあり得ぬ事ではない。

予は今や、遂に色々の方面から暗示せられた點に到着した。ゲーテの發展諸期を形式の範疇に編入すれば、次の點に歸納されねばならぬ。即ち、彼の高齢に於ては、此の範疇の主權と並んで、斷片的ではあるが、形式原理の斷絶克服といふより外なき一歩進んだ精神的階次の痕跡が示される。それに對する最も決定的徵候は、ファウスト第二部に於て殊に現れる用語上の合成の無理である。已に次の如き語の連結もこれに屬する。Glanzgewimmel, Lebestrahlen Pappelzitterzweige, Gemeindrang などである。これよりも一層決定的なのは、個々の表出が脈絡なく投出された樣に見える句である。即ち、

Worte die wahren, Äther im klaren, ewigen Scharen, überall Tag.（言葉、眞實なる、淨らなる永劫の群に見る精氣、陽光洽ねく。）

などの類である。尙他の範圍にあつては、論理的には全く秩序立つてゐない「古典的ワルプルギスの夜」の混沌がある。これ等の現象に於ては、多數の偉大な藝術家が一切の早期の作と比較し難い表現の階次を獲得する老齢藝術の特色が著しく現れてゐる。例へばミケランゼロは主としてそのピエタ・ロンダニニ及び晩年の詩作を以て、フランス・ハルスは「孤兒院の女管理者」を以て、ティツィアンにあつては、その頽齢の諸作に於て、又レンブラントは最も明白にその晩年の銅版と肖像畫を以て、ベートーヴェンは最後のソナタ（殊に兩セロソナタ）と四重奏曲を以てこれを示してゐる――その他バルズイファル（ワグネル）や「蘇生の日」（イブセン）にあつても窺はれるのである。予は、此の共通な凡てのものに於て感ぜられる特性に明白な表現を與へんと試みよう。これ迄は恰も一の統體を統一構成する力が老人に失はれ、主觀の域を脱しない個々の契機の頂點を示し得るに過ぎないかの如く考へ、その理由としては、老人は、個々の衝動、思想、見解が中斷なく相互に働き合う連續としてのみ現るゝ獨自の形式には到達し得ないといふので、此の老齢樣式を印象主義と名附けて來た。けれども、それは予には全く皮相的であると考へられる。勿論事實自體は議論の余地がない。即ちこれ等總ての創作に於て吾人の感ずるのは、強い波動をなして高まる主觀と綜合的統體形式の碎裂である。唯、問題は玆で主觀乃至形式が如何なる意味で理解されねばならぬかである。第一

老齢藝術の等閑視する形式なるものは歴史的に鑄造されたものである。普通、如何なる繪畫的資料、如何なる音樂的行文乃至階調、詩的表現と意味内容間の如何なる關係、如何なる論理的相關が正規のものとして是認されてゐるか――の問題には大藝術家の老齢藝術は極めて無關心である。而もそれは尙一歩進んで、これ迄の發展中に存する形式命令に對するのみならず、一般形式の原則に對しても一種の無頓着、否恐らく拒否と反撥とを抱懷するに至るのである。老齢藝術が究局意欲する處は、單に一定の形式から離脱するばかりでなく、謂はゞ形式の形で現れる表現から離脱してゐる。而して、精神に依つて理解構成されたものが問題である限り、形式とは常に客觀の原理の謂で、此の點に倫理學並に藝術に於ける形式の形而上學的意義が存する。吾々が或る内容に或る形式を承認或は賦與する場合、形式は此の實現の彼方に一種の理念的な、少くとも無時間的先在を持つ。此の形式が「創られる」場合、創作者は内面的直觀、内面的所爲に豫定されたものに從うのである――恰度希臘の形而上的神話が已に世界創造者をして永遠の理念乃至形式を展望せしめ、それに準じて事物にそれぞれの形體を賦與する樣にさせた如くである。實體としての心的過程を含んだ存在の各内容はいづれも唯一のもので、それは再び存在し得ない。それは時間と空間の定まれる個處に行はれた絶對獨自のものである。從つて吾々はいづれの實際内容にも形而上的主觀性を承認し得る。即ち、此の内容はその局限内に閉ざされた此の獨自の存在を超える事が出來ない。その概念上無形式であり、從つて不定形無局限である存在の材料は全體としても、各局部に現れたにしても絶對に一度限り存在し得るに止まる。これに對して局限されたもの、局限を與ふるものとしての形式は幾度となく實現され得る。それ故形式は客觀的存在である。といふのは、形式は、よし唯一度だけその實現の箇處に現るゝにしても、その實現の個々の場合以上に超越して居り、その理念的性質に於ては、材料のいづれの部分に實現されるとも無關心であるからである。これが形式の客觀性たる所以であり、此のことが、形式に對し、凡ゆる具象的存在を偶然的なもの、自身だけの存在、主觀的なものとなす所以である。而してかかる存在は、それに卽して形式を感得する程度に比例して客觀的となる。吾々の行動、思惟形成が、與へられた如實相、純材料界から罷脱して形式に充たさるゝ事が多くなればなる程、愈々客觀的となり、愈々主觀存在の流れ去る一回性から理念的に自由である形式原理に參與することが愈々多くなる。歴史的に鑄造された形式に對して形式原理の拒否をその主權内に藏する老齢藝術が、何故に單純なる主觀に墮する樣に見えるかといふ理由は茲にある。併し茲に問題となつてゐるのは恐らく全對立の克服である。茲に現れる主觀は恐らく最早青年期に於けるが如き偶然的な、分裂的な形成に依つて初めて解決さるべき主觀としてではない。青年期にあつては主觀的無形式は、歴史的乃至理念的に豫存する形式

内に收容さるゝ必要がある。主觀的無形式は此の形式に依つて一客觀相たるべく發展されるのである。けれども、老齢に於ては、偉大な創造的人物は――予は茲で勿論純粋の原理、理想に就いて述べるが――自己内に、自己自らに形式を具へてゐる。即ち、今や絶對に彼自らのものである形式を所有する。彼の主觀は、時間空間に於ける規定が内外共に吾々に添加する一切を無視すると共に、謂はゞ彼の主觀性を離脱し了つたのである。――即ち、已に述べたゲーテの老齢の定義にいふ「現象からの漸次の退去」である。かうなると人間はその個々の發表と活動の周縁に框を張る必要がない。といふのはその各發表、活動が已に、此の人間内に實存して、彼に可能である全生活幅員を直接に提示するからである。即ち、正さしく印象主義の反對である。蓋し印象主義は或る體驗、つまり主觀と、或る意味に於て主觀外にあるものとの間の關係を唯主觀自身の一側面だけから陳述するに止まるが、此の場合では絶對的内面化が存在し、それに依つて主觀が純粋な客觀的精神上の存在となり、從つて彼には外存相が謂はば全く存在せぬ結果になる。併し、かかる高齢の人間から世界の個々相と外存相とが如何に遠ざかつても、やはり此の世界に生活し、藝術家として此の世界並に世界に存する物象に就いて述べねばならぬから、彼の陳述、否彼の全精神的存在は象徴的となる事、換言すれば彼の物象を最早その直接性、その獨自存在のまゝに掴み述べる事はせずして、唯彼自身とのみ生き、彼自らの世界である内面の脈搏が物象に對する記號であり得る限り、乃至脈搏そのものが物象の代理比喩である限り、物象を掴みこれを表現し得る事は理解が出來る。已に述べた如くに、ゲーテは曾てその高齢に於て異れる生活内容の同値に就いて述べ、その理由としては、彼が「凡ての自己の活動、成業を常に象徴的にのみ見てゐた」爲めと言つてゐる。併し事實の裡には、年齢と共に上昇し、屢高き價を拂うて遂行された生活の統一への意志が示現される。その故は、生活内容を悉く象徴的に理解した事は生活を多少統一相として提示する吾々の唯一手段であらうから。吾々の「活動と成業」はその目標と價値、その偶然性と必然性、その成功、失敗から見ると無限に分裂し、脈絡もなく、相背反するもので、その結果、生活はその直接の内容に即して觀察すれば、混沌たる多元として現れる。唯、一切の行爲を一の比喩と見做し、經驗上に提示さるゝ吾々の實際的存在を深い眞活動の實在の單なる象徴と見る決心をすれば、そこに統一の可能性が得られ、かの一切の支裂的傾向ある個々の經驗を自己のうちから釋放する匿れた統一的生活根源の可能性が得られるのである。正に此の消息で以上の老齢の象徴意義の神秘的性格が説明されたのである。ゲーテは曾て明かに自身に關係せしめて「靜寂觀」と「神秘」とは老齢の特質であると言つた。彼は茲で明に神秘を目して予が象徴と呼んだものを指してゐる。彼は、一切の所與世界の象徴的性格を「一切の無常相は一の比喩に過ぎない」と宣布する「神秘合唱團」である。ゲー

テは、老齢期の要素が特に彼の早期の存在形式と異れる限りに於て、明確に、かの二性質を以て老齢期を説明した。此の「静寂觀」はかの「現象よりの退去」に他ならず、主觀が自己と對立する客觀を有する場合とは全く異れる意味、即ち相對的の意味を持たない主觀の自性内存在に他ならぬ。今やゲーテ自身世界の一切であり、世界に關して知り得る一切である。從つて所謂世界に對しては「象徴」の關係を有するに止まる。それで、此の主觀と客觀的「形式」との間には全對立が消滅する。蓋し、曾ては或る仕方で先在し、主觀自らの所産内ではあるにしても、主觀の彼方に存在した形式を主觀に齎し來つた客觀化は、今や主觀の自己釋放と自性歸還との結果、主觀の直接なる生活と自己表現裡に現るゝ事になつた。玆で、完成せる老齢存在と老齢藝術の示した「獨自の形式」に就いて云謂するは殆んど冗辭に類する。事實上明かに完全には實現されなかつたにしても、その形式の至純なる理念と志向から觀れば、此の生活はその主觀性の材料から分離さるべき何らの「形式」をも最早持たない。即ち、形式原理は此の全く客觀的自己存在となり了つた主觀に向つては、全然意味がない。此の意味で、ゲーテ晩年の無形式、綜合の分裂は、彼の偉大なる生涯の努力、即ち主觀の客觀化が彼の最高齢に於て、新しい、神秘絶對的完成段階に達したとは云はぬ迄も、その直前に來てゐた徴候であると言へよう。

これでゲーテの生涯最後の時代の眞相が他の時代と異る點を明かにした。――と言つても此の最後の時代はその比喩なき性質を單に暗示と志向とを以てそれ以前の諸時代の生活繼續へ混入したのではあるが――で此の生涯の全部に對する展望が此の事と結合する。ゲーテの科學的學説並に彼の全人生觀は、偉大緊要事乃至如何がはしい徒爾なる事に於ても彼の藝術家氣質に依つて決定されたといふのは、これ迄屢述べられた事である。彼が後年の述懐に於て、「予は元來審美的禀性である」と書いてゐる。彼の自然尊崇性、理念が現象裡に可見的に内在するといふ確信、彼の思惟の「直觀性」、彼の世界觀に於ける「形式」の意義、實踐的並に理論的存在の調和圓融に對する情熱――これ等一切は、わけてそれ等が併存狀態に於ては、藝術性のアプリオリから見た心的存在の規定性である。彼が藝術家であるといふ事は、彼の生活諸現象に對する「根本現象」である。然るに彼自らの暗示する處では、根本現象の背後に、即ち吾々に理解され探求され得る最後のものの背後に尚一の究極があつて、これは一切の視力と言説を絶してゐるといふのである。斯くして彼の本質の藝術的基礎と機能法則とはその背後により深きものを藏し、彼の藝術的に決定された全現象を支持し包括する呼稱し難き實在を持つのである。勿論、これは彼の特權ではなくして、凡ゆる人間存在の最後の實相は此の斷層まで延びてゐる。唯ゲーテにあつては此の實相が特に感取される。といふのは、正さしく彼の本質の個々

相、初發的現象が既に統一に向つて、卽ち、これ等凡てを支持し貫充する明確なる根本現象――藝術的現象――に向つて集會する樣が他に殆んどその類を見ない位であるからである。彼は――彼の人格の同時的並に發展的諸對立の緊張のうちに、又それを手段として――己に經驗事象內に於て一つの統一を持つてゐる。然るに吾々は吾々の內部にあるかの超現象的絕對の不明瞭な表象內で此の統一を採らねばならぬのである。それでゲーテにあつては、一般に經驗され、表現され得るものと、どこまでも神秘であるべきものとの對立の具合は、直接の個々相が正さしく此の神秘のうちに集會する樣に見える場合よりは純粹である。彼の存在の全幅は、よし藝術家氣質の根本現象に依つて支配されてゐる樣に見える限りでさへ、若し此の根本現象そのものがより高い、より普汎的な、或はより人格的なものの放射乃至操作でなかつたとすれば、全然あり得なかつたらう。此の消息は、一層經驗的、心理學的斷層に於ては斯う表現してよからう。卽ち、藝術家が單純なる藝術家以上のものでなければ純粹に藝術家としてさへ最後の偉大性に到達して居らぬのである。勿論、ゲーテの生活の一切の表示、卽ち知的、倫理的純人格的表示を藝術家氣質といふ一般呼稱に歸納すれば、彼の形像を正しき方向に於て深める事にはなる――けれどもそれで以て究局の審判がまだ到達されたのではない。尤も此の終審は槪念に固定し得られないもので、唯內面的感情的な直觀裡にのみ現象する底のものである。その理由は、一般人間に於けると同樣、ゲーテに於て人格の此の最後のものが超越的な深さのうちに內在してゐる爲めばかりでなく、人間中で最も偏る事のない彼に於ては、他の人々よりも一層、此の最後のものの呼稱のいづれをも拒否する度合が强いのである。それはそれについてかれこれ言擧げすることは當然偏倚的、排他的のものとなるからである。ゲーテの場合、吾々は他の如何なる歷史的人物に對するよりも明確に此の特殊な、これまで殆んど省察されなかつた範疇を感ずる。此の範疇はいかなる人間に對しても吾々がその人間を或る程度知ると同時に決定性を持つものである。卽ち、此の人の人格の一般性であ、る。但しこれは彼の個々の性質と活動とから抽象して得らるゝものではなく、唯直接な心的認識にのみ理解される統一である。個々相を超踰して普遍を理解する事は槪念を構成する悟性の行く道とは異れる方向である。勿論此の悟性にも、かの個性の特殊現象が理解されない譯ではない。例へばゲーテにあつては吾々が彼の經驗的雜多相から普遍的特質として抽象し得る藝術性を考へるのも此の悟性である。けれども吾々が、自己に近い人を「知つてゐる」といふのはかかる包括的な言說を越えて、恰度此の人の容貌が他と混合する事なく、又一擧に說明し竭されぬと同じ樣に、一種特殊の、悟性的ではない、體驗にのみ許される範疇裡に知るのであるが――此の事の可能である最大の歷史的例證たるゲーテに就いて吾々は一種の本質の直觀を持つてゐる。それは彼の個々の性質なり業績なりで竭されず、

その總計なり、それ等から概念的に得る普遍で盡し難いものである。而も此の本質の直觀は、實にかかる個々の相の印象内に働いてゐるのは、恰度形而上的に觀た人間にとつては如實の個々相は悉く、それ等の一つを以て呼稱する事も出來ず乃至それ等を抽象する事に依つても獲られない絶對的存在統一に根據を据え、それに滲透されてゐる樣なものである。詩人ゲーテ、獨自の生活をなせるゲーテ、研究者ゲーテ、愛人ゲーテ、文化創設者ゲーテの裡に、背後に、多を合して一となしたものではない此の人格的普遍を感得せぬ者、その本質を多の世界に對する關係に於てゞはなく、「默して崇むべき」存在の統一に對する關係に於て有する此の所謂形式的旋律と力學とを感得せぬ者には、ゲーテのみなし得る事も水の泡である。予は彼に對する凡ゆる偶像崇拜から自由であると信ずる。世には彼よりも强く深く、尊敬に値する存在と業績があるかも知れない。けれども此の人格的普遍に於ては彼はその程度から考へて獨自のものである。事實自己の個々の生活表示としてのみ存するものを以て、かくも高く、此の一切の個々相を超踰する存在統一を直觀せしむる樣に後世に殘した者のある事を予は知らない。

偖て、此の最高のものに近接し、又直觀としてのみ理解されるものと近接して、まだしも記述を許すものを求めるならば、恐らくは一層普遍的なるもの、卽ち人格を一層その形式に從つて性格づけるものに達着する。これが藝術家氣質である。若し吾々が單に精神的内發衝動、卽ち主觀的生活を表明せんとする欲求からのみ生存し、それと共に、内容をのみ重視する規格にも堪え得る客觀價値を創作する確信があるならば、それは最も完全な生活である樣に考へられる。此の點にゲーテの生活の一貫せる樣式を見る事は予の已に屢述べた處である。而して彼が青年時代には主觀的過程を、老齢期には客觀的内容を主調とした事は前節で述べたが、それは要するに彼の生の世界存在に對する總體關係内での强調移動、發展階次に過ぎないのである。彼の存在の此の幸福を支持したのは内的人格因子の關係であるが、此の内的人格因子を吾々は資性の總力の程度並に才能と呼ぶことが出來よう。此の兩者が普通の人に見る處では、極めて著しい程度に相互獨立して存在する樣に考へられる。どれ程多數の人々が、その力がその才能に適はぬか、或はその才能がその力に適さなかつた爲め、それとも彼等の天賦の構成上、力が延びずに彼等のうちに萎え、又は力の漸次的發展に順應しない排列を取つて發展した爲めに何ら得る處もなかつたり、外境に對して不調和に陷るか、甚しきは身を亡ぼすに到つた事であらう。つまり、汽罐がその構造上堪え得る以上に蒸氣を容れるか、構造がその有する蒸氣の爲し得るよりも以上の作業を爲すべき設備にあるかである。處で、ゲーテの本質に對して承認せられる一切の幸福なる調和のうちで最も深い調和、謂はば彼自らの内部から決定する調和が玆に存在する。確に彼の力も

亦往々にして「誤れる傾向へ」迷走し、才能が力に充分に廣い水路を提供しない場合には、けゝ口を探し求めた事もある。けれども些細にこれを觀察すると、それは常に助走準備の爲めの後退で、それが濟むと力と才との間の均衡がいや增しに完全に復歸する――卽ち、力は主觀的に內面から外面へ生くる生に照應し、才は、此の生が自己以外の存在並に客觀的規範に準じて進行し得べき手段となるのである。從つてゲーテの內面的構造の調和は、それと一客觀相との調和の支持者となつたのである。彼の生活の此の樣式的根本實體は靑年期と老齡期間の作風の對立に於て展開してゐるのを見た。その對立の際立たしさは知名の偉人中では唯フリードリヒ大王に於てのみ見らるゝ底のものである――但し（特殊の條件のもとに立つ）宗敎上の內的革命は勘定に入れない。蓋し此の場合には、兩極間の發展といふではなく一極から他極への飛躍と言へるからである。以上の事實に卽して更にゲーテの生の大なる均衡形式が示される。卽ち彼の生活形像に於ては、固執不變なるものが、變化するもの、活潑に變形するものの印象を極頂にまで齎す最高程度が感ぜられる。又統一、持續の相は變化の基礎に立つて、その最大なる印象强度に達するその變化の最高程度が感ぜられるのである。これ等生活形式の各はその對蹠者を緣として、自己並にその對蹠者を、最も完全に發展せしめた事によつて、此の存在の特殊の有機的性格が實現されるのである。その故は、有機體は、次のやうな本質として現るゝからである。卽ちその本質は一切の機械組織とは反對に、不斷の變轉の流れを、本質自らの破滅に由つてのみ破滅され得る獨自存在と合して一體となすものである。フリードリヒ大王にあつては、此の持續する糸は、靑年期と老齡期とでは極めて異れる外相を呈する織物に編み込まれてゐるので、ゲーテに比してそれぞと感得される事が遙かに少い。勿論吾々はゲーテに於ても靑年期老年期を一貫して維持されてゐる生活並に精神の內容を求めてはならない。よしこれが見出さるゝにしても（例へば藝術家氣質乃至汎神論的傾向に於て、）而もそれは此の場合に決定の力を有しはせぬだらう。固執的內容そのものは常に固定的のものである。正確に觀察すれば、此の固執的內容は生活に對して、その變化を綜括する役目を果す當の存續物ではない。此の存續物は、槪念的に凝定され得る內容よりも遙かに密接に此の變化と結合してゐるのである。それは寧ろ一つの機制物、一つの法則であつて、此の法則は變化に依つてのみ存在し、變化のうちにのみ存在する。――比喩を以て言へば、――個體的存在を始めから終りまで支持し、その一切の方向と變轉を貫いて不變至純のものとして支持する原動力である。ゲーテの所信では、人間の性格は唯その行爲の上にのみ生きてゐる。彼はそれに關聯して言ふ。「泉は唯流れる限りに於てのみ考へ得られる。」「人間の歷史はその性格である。」これ等の言葉の意味は、生活の發展變化に於ける統一と不變とは此の變化の局外に立つものではないといふのであらねばならぬ。ゲーテ自らの實證が恐

らくその最も明確な例である。且つ不變相と變化相の對立は追加的分析に過ぎない。此の分析に依つて吾々は、生活のそれ自體不可解なる事實を吾々の領解内に移植するのである。扨て、極めて對立的な發展要素が自らの裏に持續的にして形式化された統一を具へてゐる具合に就て、ゲーテは我が身に關聯して極めて重要な指示を與へてゐる。卽ち、生活がその各瞬間、その發展の各場合に於て最後の階次に對する準備として乃至先行階次の完成として價値あるのではなく、獨立して價値を有するものの、それだけで完全なるものであり、又あり得る事は彼の大なる精神動因の一つである。「人間はその種々なる生活階次に於て異れる者にはなれるが、より善くなれるとは言ふ事が出來ない。　次に彼は作家が彼の創作の凡ゆる階次に於て果さねばならぬ要求を述べて言ふ。「斯くして彼の作は、若しそれが出來上つた階次の上で正當なものであつたとすれば、將來も依然正當であらう。そして作家が後年如何に變化發展しようと、その事は變らない。」　此の動因の奥底に横る考へは、偉大な藝術家の作は、彼の完成過程のいづれの階次に於てもまとまりのあるものであるといふ事である。

各生活瞬間の此の自足、生活一般の基本的價値性は此の形で表現されるが、此の自足は未來からの獨立に於てのみならず、過去からの獨立に於て存する。予は玆でゲーテの「回想」に關しての驚嘆すべき言葉を參考に出す。彼は回想を「許さない。」　それは、生活は持續する發展、向上的煉成であつて、固定せるもの、過去として考へられるものへ結縛し得ないもので、これ等のものを唯、力學的作用として、それによつて向上された現在のうちに收容して然るべきものと考へるからである。「予は不斷に精進して止まないから、自分が曾て書いた事も忘れ、やがて往々、自分の書いたものを全く他人のものと考へる樣な事になるのである」と言つたのは、八十二歳の時の事である。一切の目的論的見解に對する彼の深き嫌惡はそれと關係があらねばならぬ。卽ち、凡ゆる存在瞬間のそれ自らに於て充足せる意味に關する彼の確信は、かかる瞬間が、それを超越する最終目的からその意義を採り來らねばならぬなどといふ考へと撞着した。各存在の部分には一般存在の總體が内在し、從つて各存在部分は自己以上に出る事も出來ず、又出るを要しないといふ汎神論的傾向を此の場合生活の時間的過程に移されたと見ても差支はない。生涯の各時期はその裏に生活の全相を包含してゐる。唯各期異れる形式で現れるだけである。そしてその各期の意義を他の前後の期との關係から採り來るべき理由は毫も存在しない。從つて各期はそれぞれ、獨自の美と完成を具へ得る。それは他のいづれのものとも同一ではないが、而も美、完成といふ點では同一である。これこそは、ゲーテが價値の範疇から、又彼の生活の直接なる價値感情から、不斷の變化及び生涯の各時期の懸絶せる對立を、此の各期を一貫して恒存せる一者、同一者と同時に感じ得た消息である。